

^{くり}栗 ^た田 城 跡

^{しも}下 ^う宇 ^き木 遺 跡

^み三 ^わ輪 遺 跡 (3)

1991・3

長野市教育委員会

序

社会生活の変化とともに「物の豊かさ」から「心の豊かさ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできない国民的財産であります。

市民生活の充実という目標達成のために行われる開発行為の陰で失われていく埋蔵文化財に対し、私達はその保護・保存・公開という大きな責務を負っています。

平成2年度において、旧長野市街地の裾花川と浅川扇状地上にある5件の開発事業に伴う緊急発掘調査を実施いたしました。その内容は、共同住宅建設・宅地造成・ゴルフ練習場建設等によるもので、調査範囲は遺跡の破壊が懸念される部分という限定されたものでありましたが、重要な遺構・遺物を発見しております。これらの成果は、2分冊の発掘調査報告書として刊行いたしました。その1分冊が本書で、栗田城跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)を所収いたしました。




本書が埋蔵文化財に対し一層のご理解と、地域文化の向上のために役立ただけならば、この上ない喜びであります。

最後に、発掘調査にあたり、委託者の方々はもとより、直接調査に従事いただいた地元の皆様、そして報告書刊行に至るまで多勢の方からご指導・ご援助を賜りましたことに対し、本書の上梓を共に喜びたいと思います。

平成3年3月

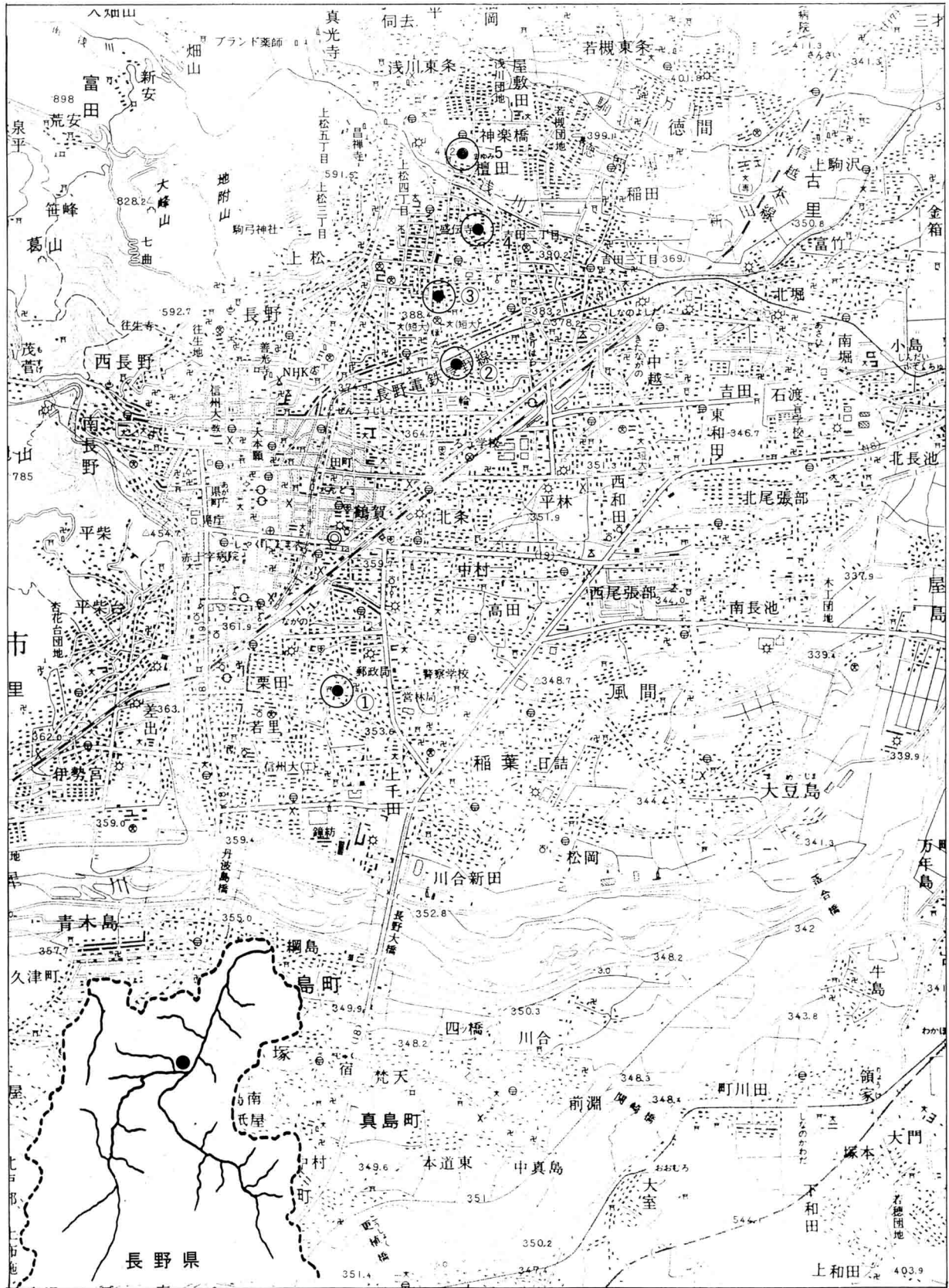
長野市教育委員会教育長 奥村秀雄

凡 例

- 1 本書は、平成2年度に実施した長野市街地に於る単年度開発事業に伴う緊急発掘調査報告書を集成した。
- 2 集成した遺跡は、調査順に「栗田城跡」・「下宇木遺跡」・「三輪遺跡(3)」である。
- 3 本書では、以下の遺構記号を使用している。SB（住居址）・SD（溝址）・SK（土壙）・SE（井戸址）・SZ（不明遺構）である。尚遺構実測図の表示縮尺は1/60である。
- 4 遺物実測図・拓本図の弥生土器・土師器・土師質土器の断面は白抜き、須恵器・施釉陶器・中世陶器類はで、青磁・白磁・青白磁類はで区別した。また土器のうち黒色処理されているものをで、赤色塗彩が施こされるものには赤色で示した。尚、遺物実測図の表示縮尺は、特殊のものを除き1/4である。
- 5 発掘調査は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターの直轄事業として実施し、平成2年度の組織及び業務分担は以下のとおりである。

調査主体者	長野市教育委員会教育長 奥村秀雄
総括責任者	長野市埋蔵文化財センター所長 水沢国男
庶務担当	主幹兼所長補佐 小山 正（契約・出納事務・庶務担当）
職員	青木厚子（ ” ” ）
調査担当	調査係長 矢口忠良（栗田城跡・（松代城跡）・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)・松原遺跡（市道松代東111号線）担当）
主 事	青木和明（松原遺跡（長野南農協）・篠ノ井遺跡群（聖川・県道篠ノ井稲荷山線）・塩崎遺跡群（市道篠ノ井南253号線）・石川条里遺跡（市消防局塩崎分署・県営ほ場整備・県道新州町新線）・上見林遺跡担当）
”	千野 浩（中俣遺跡・稲田徳間遺跡・下宇木遺跡・押鐘遺跡・檀田遺跡担当）
”	飯島哲也（松原遺跡（長野南農協・県道中野更埴線）担当）
専門員	中殿章子（ ” ” 調査員）
”	横山かよ子（中俣遺跡・稲田徳間遺跡・下宇木遺跡・押鐘遺跡・檀田遺跡調査員）
”	今井悦子（篠ノ井遺跡群・塩崎遺跡群・石川条里遺跡調査員）
専門主事	小松安和（稲田徳間遺跡・石川条里遺跡・下宇木遺跡・三輪遺跡(3)調査員）
”	中沢克三（稲田徳間遺跡・下宇木遺跡・檀田遺跡調査員）
”	大室 昂（松原遺跡・篠ノ井遺跡群・石川条里遺跡調査員）

- 6 調査で得た諸資料は、長野市埋蔵文化財センターで保管している。



a図 平成2年度発掘調査地位置図 (1:50,000)

- ①栗田城跡 ②三輪遺跡(3) ③下宇木遺跡 4押鐘遺跡 5檀田桜町遺跡

(○印本書所収遺跡)

栗^{くり}田^た城跡

ーグランドハイツ東公園建築地点ー

1991・3

長野市教育委員会

例 言

1 本書は、日特不動産株式会社代表取締役大戸克弘と長野市長塚田 佐との「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」に基づき、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが実施した「グランドハイツ東公園」建築事業に伴う緊急発掘調査報告書である。

2 調査地は、長野市栗田東番場471-1 番地に所存する。

3 遺跡名を「栗田城跡」とする。当初「東番場遺跡」として届出したが、中世面での遺構・遺物のみで下層より前時代のものが存在しなかったことによる。別称「堀ノ内城跡」（『長野県市町村誌北信編』昭和11年）。

4 発掘調査は、平成2年5月7日から6月11日（実質25日）に実施した。

5 調査面積・調査費等は、700㎡以上・5,980千円である。

6 発掘調査から調査報告書刊行までの担当・直接参加者は以下のとおりである。【調査主任】矢口忠良（遺構整図・報告書編集）【調査員】小松安和・中沢克三・大室 昂・今井悦子（注記・復元）【整理作業員】徳成奈於子・岡沢治子・池田見紀・小泉ひろみ（洗浄・注記）【発掘調査参加者】竹村礼治・竹村光子・石川みつ子・西尾千枝・神戸 誠・関 清守・浅野正一・向山純子・芹沢祥子・倉石彰子・青沼たま子・見小田たけ子・上村久登・清水謹一郎・山岸富見子・丸山 栄・小林竜子・池田とよ子・小山智恵子・石川ゆき枝・池田幸雄・石丸正次・竹村雪子・石川清吉・市川てい子・戸谷ヒロ子・竹村徳蔵・小林芳子・市川英乃・中沢文男・竹村金吾・松本有香子・田村喜久子・服部和代・池田とよ子・竹村タミ・高木しず子・内山稔子（順不同・敬称略）

7 （財）長野県埋蔵文化財センター 原 明芳・町田勝則両専門研究員より、出土遺物の分析・実測・整図・版組・原稿執筆（Ⅲ章3）をいただき、長野市立博物館 和田 博専門員から遺跡周辺の環境（Ⅱ章）の玉稿を賜わった。

8 国家座標基準点の設定、コーディクシステムによる遺構測量・空中写真撮影を（有）写真測図研究所に委託した。

目 次

例言・目次

I 調査の経過

1 調査の事務経過	1
2 調査日誌	1

II 遺跡周辺の環境

1 地理的環境	3
2 歴史的環境	3

III 調 査

1 遺構の分布	7
2 遺構	7
3 遺物	38

IV 結 語	71
--------------	----

挿 図 目 次

1 図	調査地周辺の地形及び遺跡分布図	5, 6
2 図	栗田城跡周形地形図及び調査位置	5, 6
3 図	遺構分布図	5, 6
4 図	1号・5号・6号・7号～10号、1号溝址実測図	8
5 図	2号～4号土壙実測図	9, 10
6 図	11号～13号土壙、2号溝址実測図	12
7 図	14号・15号・20号・22号土壙実測図	13
8 図	16号～19号・21号・24号土壙実測図	14
9 図	S K 25 - イ・ロ・八号・26号土壙	16
10 図	25 - 二号～ト号・37号土壙実測図	18
11 図	27号・28号土壙実測図	19
12 図	29号～33号土壙実測図	21, 22
13 図	34号～36号・47号土壙実測図	24
14 図	38号・39 - イ号～八号土壙実測図	25
15 図	40号～44号・50号・51号土壙実測図	26
16 図	45号・46号・48号～50号土壙実測図	27, 28
17 図	52号～58号土壙実測図	31, 32
18 図	59号～61号・63号～65号・上面1号土壙実測図	33, 34
19 図	62号土壙実測図	35
20 図	焼物実測図 1	41
21 図	焼物実測図 2	43
22 図	焼物実測図 3	44
23 図	焼物実測図 4	46
24 図	焼物実測図 5	47
25 図	焼物実測図 6	49
26 図	焼物実測図 7	51
27 図	検出面出土焼物実測図 8	52
28 図	食膳具の比率	53
29 図	土器皿法量分布図	54
30 図	土器皿の形態	55
31 図	古瀬戸食膳具の比率	55
32 図	大型調理具山地別比率	56
33 図	須江質擢鉢の口縁形態	56
34 図	大型貯蔵具山地別比率	56
35 図	火鉢修正図	58
36 図	石製品実測図	61
37 図	石製品金属製品実測図、古銭拓本図	62

I 調査の経過

1 調査の事務経過

- 平成元年10月16日 「(仮)日吉開発行為に関する事前協議申出書」を受理する。
- 10月18日付 「開発行為に先立って分布調査が必要」の旨、長野市建築指導課長宛報告する。
- 10月30日 「埋蔵文化財事前調査願い」が提出される。
- 11月11日 ミニバックホーの提供のもとに分布調査を実施する。遺構・遺物を確認し、11月21日付で報告する。
- 12月14日付 「発掘調査依頼届」の提出がある。
- 平成2年1月8日付 「発掘調査計画書・予算書」を回答する。2月19日付 予算書を再回答する。
- 2月2日付 文化財保護法57条の2第1項の規定による「埋蔵文化財発掘調査届」の提出があり、2月19日付長野県教育委員会教育長宛進達する。
- 2月22日付 文化財保護法98条の2第1項の規定による「埋蔵文化財発掘通知」を提出する。
- 2月26日付 県教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について(通知)」がある。
- 4月1日付 「発掘調査依頼届」の再提出される。以後調査に関し協議を重ねる。
- 5月7日付 「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結する。
- 5月7日～11日 重機による表土除去作業を実施する。
- 5月7日～6月11日 発掘調査を実施する。
- 6月14日付 「発掘調査完了届」「埋蔵文化財拾得届・保管届」を関係機関等へ提出する。
- 6月27日付 「埋蔵文化財認定について(通知)」がある。
- 3月25日 発掘調査報告書『栗田城跡ーグリーンハイツ東公園建築地点ー』を刊行する。

2 調査日誌

- 5月9日(晴) 本日より調査開始。天幕設営後、東側より残土処理。焼土塊が散在するも遺構なし。
- 5月10日(晴) 残土処理。遺構検出。
- 5月11日(晴) 残土処理。遺構検出。
- 5月14日(曇) 遺構検出。午後降雨。遺構測量。
- 5月15日(曇) SK1～5・7・11～13、周辺ピット群の調査。
- 5月16日(晴) 調査継続。SK6・8～10の調査。
- 5月17日(晴) SK14～18・21・23、周辺ピット群の調査。写真撮影。
- 5月18日(晴) 調査継続、SK19・20・22・24の調査。
- 5月19日(晴) SK25ーイ～ハの調査。
- 5月22日(晴) 調査継続。



I-1 5月9日



I-2 5月15日

5月23日(晴) SK25ーニート・26完掘。清掃・写真撮影、SK27及び周辺ピット群の調査。

5月24日(晴) SK28～33、周辺ピット群の調査。

5月25日(晴) SK36・38、周辺ピット群の調査。

5月28日(晴) SK34・35、周辺ピット群の調査。

5月29日(晴) SK37・39、周辺ピット群の調査。

5月30日(晴) SK47、周辺ピット群の調査。地鎮祭が行なわれる。

5月31日(晴) SK40～46・48の調査。写真撮影。遺構測量。

6月1日(曇雨) SK41～44・48、周辺ピット群の調査。午後降雨。遺構測量。

6月4日(晴) SK49～51・63、周辺ピット群の調査。

6月5日(晴) SK52～60・63の調査。SK27周辺写真撮影。

6月6日(晴) SK43～46・52～60調査継続。

6月7日(晴) SK52～60・63・65～67の調査。写真撮影。遺構測量。

6月8日(晴) SK63・65、周辺ピット群の調査。写真撮影。遺構測量。器材撤収。

6月9日(曇) (有) 写真測量図研究所による空中写真撮影。遺構測量。

6月11日(晴) 遺構図結線。器材撤去。



I-3 5月23日



I-4 6月4日



I-5 6月7日



I-6 調査参加者

Ⅱ 遺跡周辺の環境

和田 博（長野市立博物館専門員）

1 地理的環境

本調査地がある栗田（堀ノ内）城跡は、裾花川扇状地先端地域に位置する。当該河川の自然流路は妻科地籍から幅下・新田を経て本城跡東北約700 m付近の七瀬をさらに東南流していたが、近世初頭慶長年間に人工的に現流路に切り落とされ、本城跡西とほぼ同距離を南流している。そのうえ犀川が左岸に自然堤防を形成し流路をやや南下させたとはいえ、本地点の南数100mを東流する。それら新旧河川が三方を囲む本地域は、近世に至ってもしばしば裾花川の洪水に見舞われて西高東低の微地形を形成し、自然堤防との比高差も認められぬまでに堆積を重ねている。

この地域には裾花川支流の古川や計湯川等がさらに幾条にも分流して一帯に広がる熟田の灌漑用水として重要な役割を果たし、本城の水濠も満たしていた。近世後半には水量不足も手伝ってか、木綿栽培や菜種の生産が盛んになり、1857年（安政4）には木綿350両、菜種200両を生産している。

近代になって農事試験場が設置され、桑園も営まれるようになったが、第二次大戦以来再び豊かな田園風景を展開していたこの地域も、最近の急速な市街化に伴って信大工学部や若里公園等の公共施設が建設されて耕地は次第に残り少く、用水路は排水路と化し、旧水路が宅地に転換している様相も所々に見受けられる。

2 歴史的環境

栗田地域では本城跡約 120 m西の東番場遺跡が発掘調査された以外は、城跡南端の蓮池地籍から偶然発見された高見遺跡があるに過ぎない。約400m東南の芹田小学校遺跡も加えて、いずれも平安後期中心の遺跡と確認されると共に、三地点とも1 m以上もの地中に生活面が検出され、旺盛（おうせい）な堆積を物語っている。と同時に周辺の九反・荒木・文大附属高校敷地等からも同時期の土師器・須恵器出土を合わせ考えると、数少ない資料ではあるものの「和名類聚鈔」に所載された芹田郷の存在を裏付けるとみられる。

平安末期にはこの地域一帯の開発が進んだとみえて、市村庄や公領の千田郷・千田小中島郷が成立する。市村庄は本城跡南の自然堤防を中核とする地域とされ、当初平正弘領であったが、保元の乱により没官領、次いで後院領に編入され後に長講堂に寄進された。1191年（建久2）の課役注進状には「毎年御簾許勤之」と朱註があり、実権が武士に次第に握られていった実態を示唆している。

これより先、1180年（治承4）木曾義仲が麻績を攻撃した際、救援に発向した平家党の笠原頼直を村上義直と共に栗田寺別当範覚がここ市原で迎撃している。範覚とは戸隠25代別当の寛覚と見られ、千田仲清らと共に村上為国の子。水戸栗田系図の寛覚傍註に「栗田禅師初テ信濃国栗田郷ニ居住ス依テ本名村上止在名号栗田、同国兼戸隠明神別当」。嗣子仲国は「栗田太郎信州栗田城ヲ築居住ス弟寛明ニ戸隠ノ別当ヲ譲ル依而号里」と。里栗田・山栗田がここに生じ、近世に至っても栗田の内80石は終始戸隠領となった。

仲国傍註の城郭が本調査地で、二重の水濠を巡らした複郭式平城。外郭は東西709 m、南北1090m、内郭約220 mの方形であったという。北西隅に高さ9 m長さ40mの土塁が鍵形に残存し、その外側に残っていた濠も北側は

道路、西は遊園地と化している。内郭南東にも近年まで土塁の盛土があったが一部を残して削平され、その他円通院境内や南西の人家邸内に外郭土塁の痕跡を見せているに過ぎず、濠跡はほとんど埋立てられて了った。

先に市原の戦があった事実はこの附近が交通上の要衝であった証左であり、栗田氏がここを本拠としたのは、村上勢力の犀川以北進出の足場でもあった。

1329年（嘉暦4）諏訪上社造営の際、五町・栗田・今溝は玉垣5間の造営を負担し、1370年（応安3、建徳1）には関東管領兼信濃守護上杉朝房に攻撃され西木戸で交戦している。

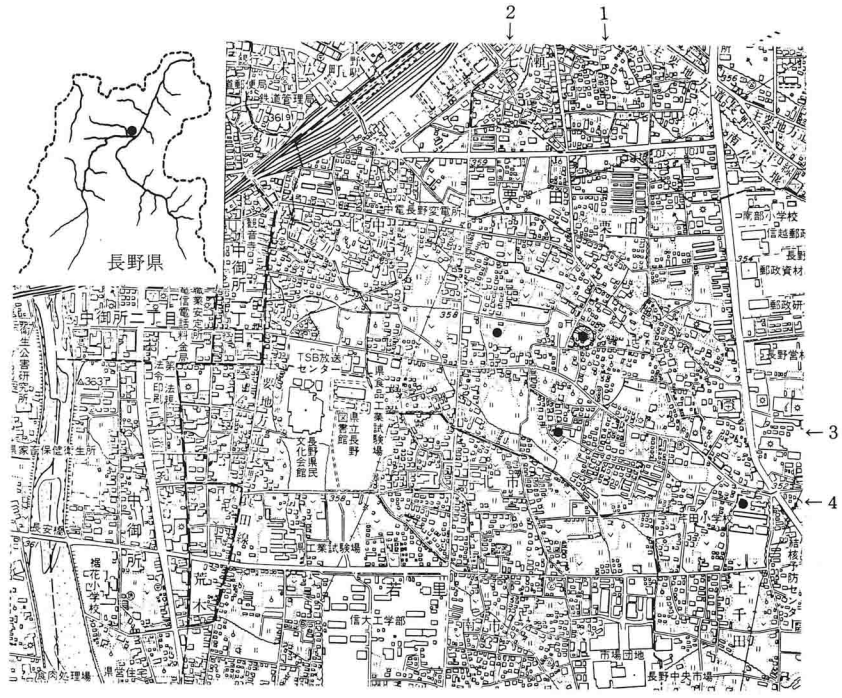
その後大文字一揆進状に栗田沙弥が名を列しているものの、1400年（応永7）大塔合戦に栗田名を留めず、1440年（永享12）の結城陣番帳では井上孫次郎が代役をしており、1777年（文明9）には漆田城を攻略した。

1555年（弘治1）旭山城を守備した際、信玄の応援を得て以来その陣営に参加、善光寺衆と共に甲府に移り善光寺別当となった鶴寿（寛久）が高天神城と運命を共にした（1581）後、永寿（国時）が別当を受け継ぎ千田・市村も宛行われている。1597年（慶長2）北信に還住した国時は長沼城下へ移り、栗田城は廃城になったと見られている。翌慶長3年上杉景勝移封に従って会津へ移った。その後故あって遺児寛喜がひそかに善光寺に戻り、やがて寛慶寺を建立（栗田からの移築ともいわれる）した。

近世栗田の村高は792～887石余。うち80石は戸隠領で他は松代領・幕府領・高田領・尾張支藩領とその所属をたびたび変えている。1840年（天保11）戸隠領が15戸69人、それ以外は1822年（文政5）には123戸586人であったが、1880年（明治13）には栗田村全体で土塁最高所には栗田大元神社と水内惣社日吉神社を合祀した社がある。後者は山王居館跡から近代になって奉遷した神社であるが、室町期の守護居館や漆田関係を多分に示唆している。

城跡付近には本城・部屋田・東番場・西番場・舍利田・舞台・高見などの地名があり、茶臼・土器が城跡近から、また多数の五輪塔が計渴堰改修の際出土したといわれる。

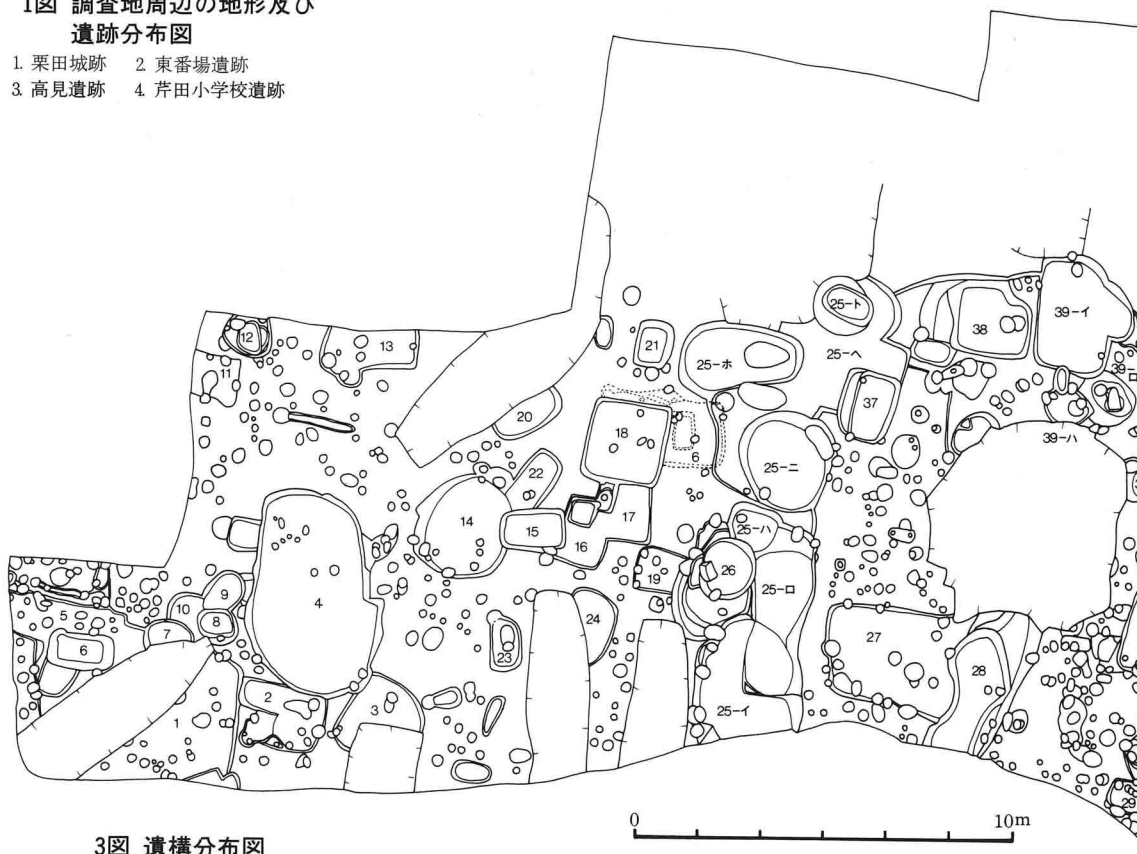
（参考文献）『上水内郡地質誌』『上水内郡誌自然篇・歴史篇』『豊野団研連絡紙No.30』『信濃史料』『長野市史』『長野県町村誌』『長野県の地名』『長野県史』



2図 堀ノ内城跡周形地
及び調査位置
(大正14年測量、昭和27年修正)

1図 調査地周辺の地形及び
遺跡分布図

- 1. 栗田城跡 2. 東番場遺跡
- 3. 高見遺跡 4. 芹田小学校遺跡



3図 遺構分布図

- 1図 調査地周辺の地形
- 2図 栗田城跡周形地形
- 3図 遺構分布図 (1 :

Ⅲ 調 査

1 遺構の分布

調査で検出した遺構は、番号を付した土壌が74基、溝址2ヶ所そして多数のピットである。これらは黄褐色粘質土を基盤層にして、覆土が灰黒色～黒褐色粘質土を基本としている（6図）。標高354.5 m前後、地表下約1 mあたりに展開するが、調査区の北及び東側では全く認められない。ただ東側で最終遺構面より15cm程上部に若干のピット・土壌（上面1号）及び焼土が確認されたが、中央より西方では認められない。また北方の39号土壌北壁の攪乱下方にピット状の落ち込みが確認されたものの黒褐色砂質土の覆土の状況から、後世の攪乱と判断される。

調査では、建造物による遺跡が破壊を受ける部分のみ対象にしたことと、所々に旧家屋の廃材等埋没のための大穴が掘られており、遺構の性格・規模等考察の上でさまたげになったが、大まかにみると外周に土壌状遺構がめぐり、また土壌状遺構が集中化し南北に並ぶ傾向がうかがわれる。ピットは土壌間を埋めるように、そして土壌上を覆うような形態で展開する（3図）。

各土壌共に床面は踏み固め又は突き固めた様子はなく、軟弱ではあるけれども凹凸はほとんどない。またどの遺構底面からも焼土を伴うカマド又は炉址等の痕跡を認めることはできなかったが、4号土壌覆土中に焼土及び黒色木灰層があり、18号土壌の覆土上面には炭化材・炭化物の混入が著しく、25-イ～ハ・26号土壌のそれにはスサ入り焼土塊が散在し、46号土壌覆土に焼土・炭化物が認められたにすぎない。

2 遺 構

1号土壌（4図）

調査区西端に位置し、北半分程の検出にすぎない。中央に大きな攪乱があり、5・7号土壌と重複、6号土壌を内包する。形態は東・西壁から不整隅丸方形を推定する。東西の最大巾5.6 mの規模になる。掘り込みは東壁がなだらかに掘り込まれているのに対し、西・北壁は直線的になり、16cm・19cmを測る。東壁の軸線はN15°E前後にある。床面は舟底状をなし中央付近の深さは23cmになる。柱穴は遺構内・周辺に多く認められるが、堅穴住居址形態の上屋構造を予想するも、南壁が不明の為断定は困難である。東壁の南端に不整形な掘り込みがあり、4個の大きな自然礫があるもこの遺構に付属するものか不明である。6号土壌は床面追求中見い出されたもので、覆土も同質のものであり、北壁に添っている等のことから本遺構の付属施設の可能性がある。

2号土壌（5図）

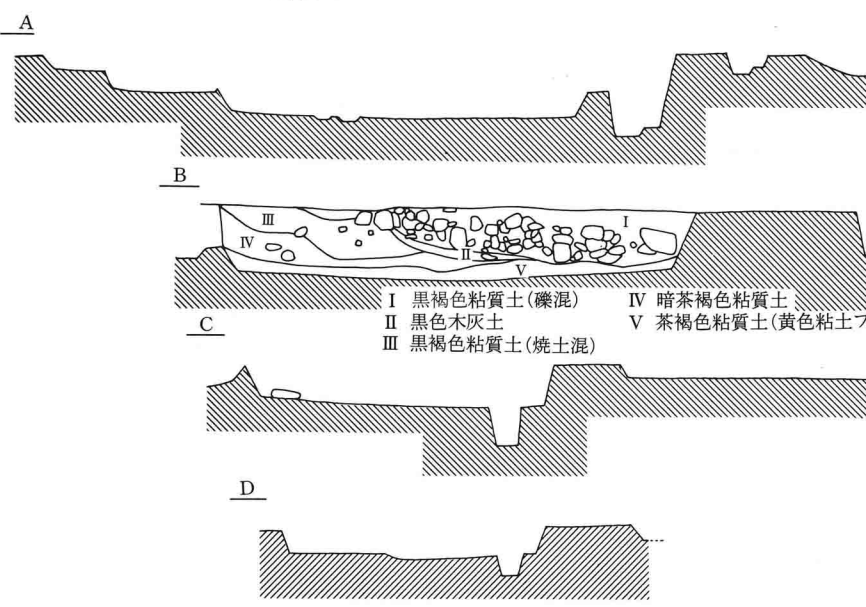
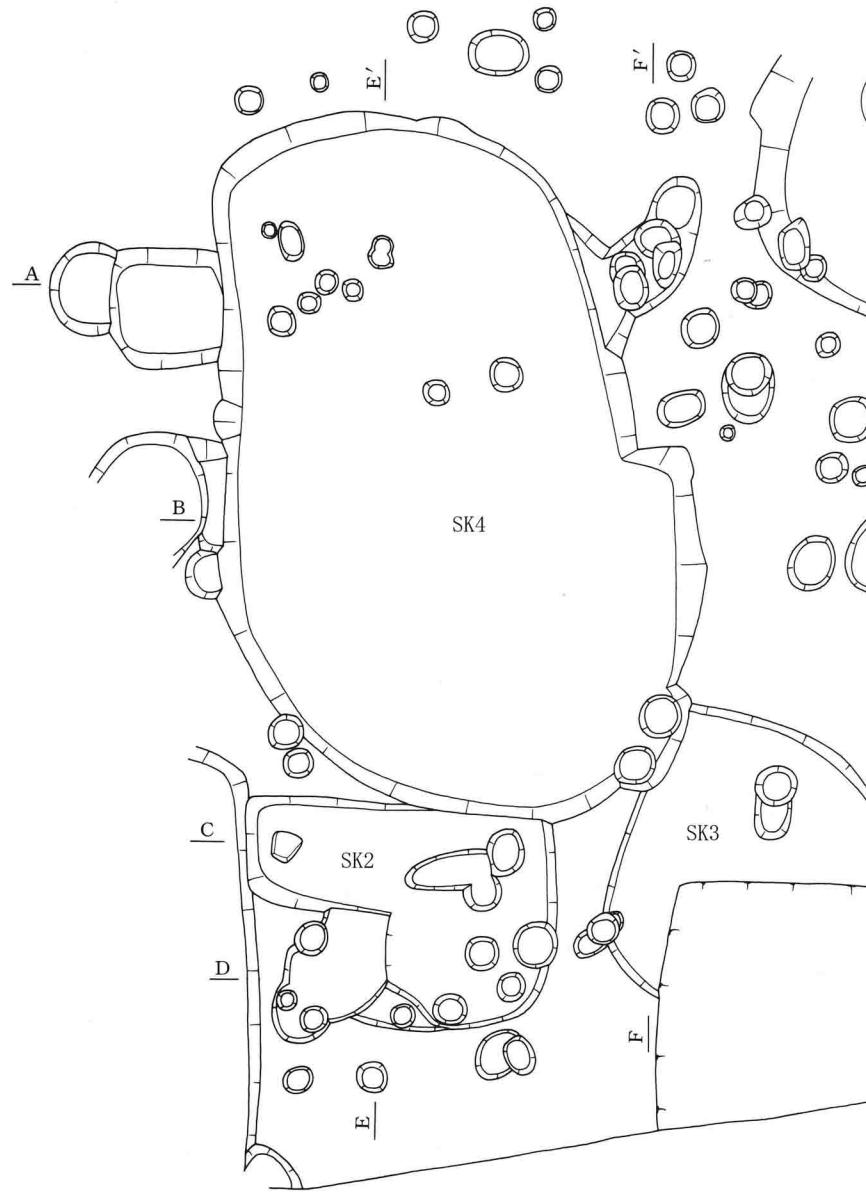
1・4号土壌と重複するが、前後関係は不明である。形態は複雑な様相を呈しており、3基の土壌が重複している可能性がある。北西から東へ長方形・隅丸方形・不整形態になるものを予想するが、規模等で分割することはできない。総体として東西軸2.34m・南北軸1.64m・深さ32cmを測る。底面はやや中央付近が低い舟底状になる。南壁内外・東壁内のピット列は本遺構と係りあるものかもしれない。

3号土壌（5図）

4号土壌と重複し、南側は攪乱を受ける。形態は不整隅丸方形を呈し、南北軸2.24m・深さ13cmの規模にな



4图 1号·5号·6号·7号~10号土坑、1号沟址实测图



- I 黑褐色粘質土(礫混)
- II 黑色木灰土
- III 黑褐色粘質土(燒土混)
- IV 暗茶褐色粘質土
- V 茶褐色粘質土(黃色粘土)

る。底面は平坦である。

4号土壌（5図）

調査区西側にあり、今回の調査では最大規模のものである。形態は楕円状の不整隅丸長方形を呈し、長軸 5.3 m前後・東西軸最大巾3.66mの規模になる。掘り込みは東壁43cm・西壁48cm・南壁42cm・北壁40cmを測り、床面が舟底状になり最深51cmになる。覆土上層には多量の礫が混入し、それも南半分に著るしかつた。またこの層の下層には最大厚6 cm程の黒色木灰層、焼土混入層等があり他の遺構と趣を異にしている。尚木灰層は中央付近約2 m範囲で確認されたにすぎない。建物址と推定すれば壁上又は近接のピットを柱穴とも考えられるが一定間隔ではなく、また遺構内のピットは浅いもので柱穴とは考えられない。

5号土壌（4図）

調査区西端に位置する深さ17cm程の溝状の遺構である。1号土壌と重複するも前後関係は不明であるが、6号と7号土壌の中間付近で東側は終結するものと思われる。

6号土壌（4図）

1号土壌の北西隅部に位置する長方形態の遺構である。長軸はN106 °C E方向を指し、長軸1.69m測り、短軸0.96mの規模になる。掘り込みは深く1号土壌床面より64cmで、底面は下層の礫層に達している。覆土中位より炭火米塊が出土した。南西隅付近は深さ6 cmの浅い土壌状遺構がある。

7号土壌（4図）

1・10号土壌と重複し、掘り込みは最も深く61cmを測る。形態は楕円形を呈し、長軸は東西方向にあり1.32mの規模になる。底面は平坦である。

8号土壌（4図）

9・10号土壌と重複する。覆土は他と同質であるが、やや黒味が強く最も新しい遺構と推定する。形態は不整楕円形を呈し、東西軸1.28m・短軸0.88m・深さ44cmの規模になる。

9号土壌（4図）

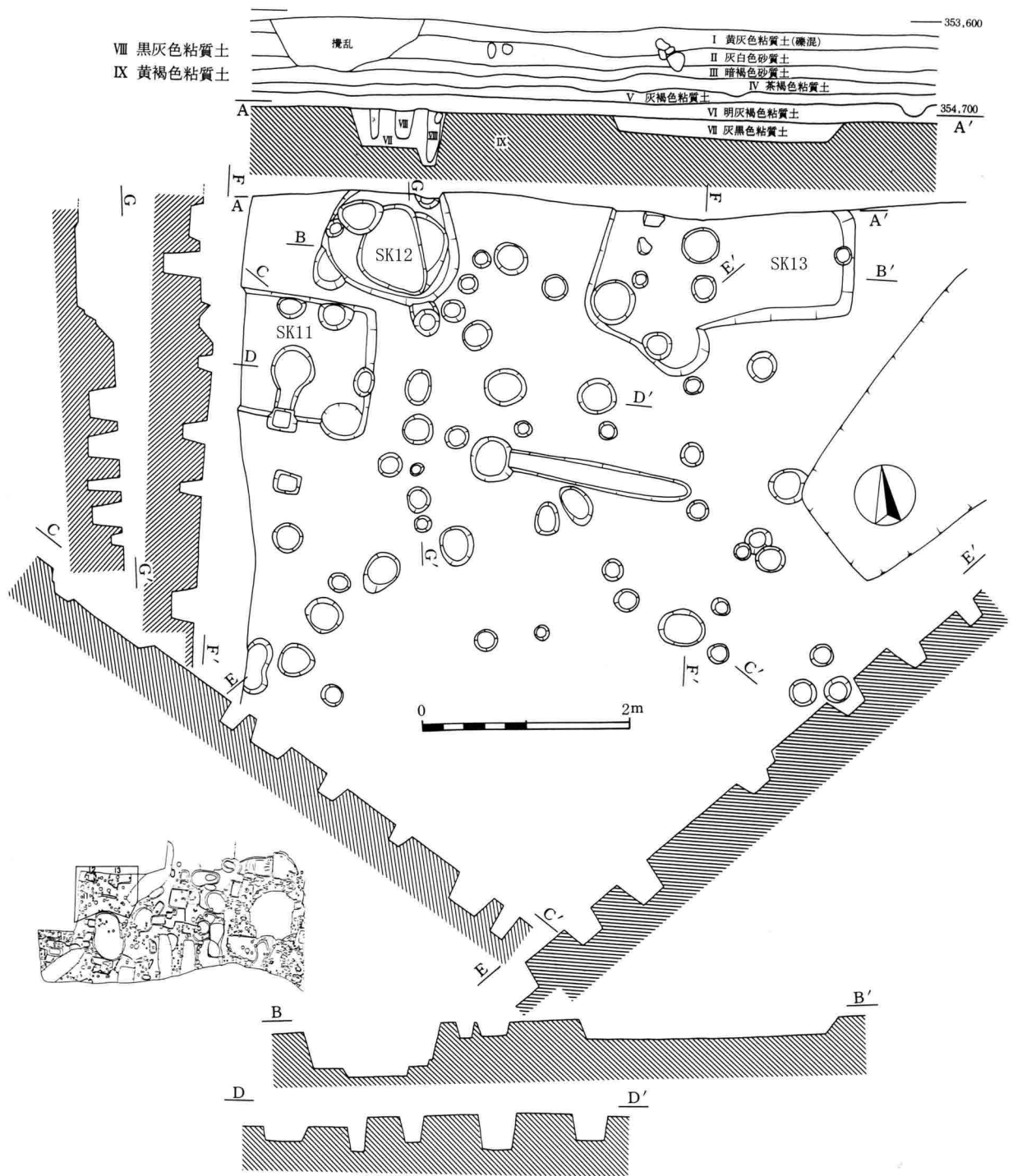
10号土壌と重複し、これよりも深い。形態は楕円形を呈し、長軸1.50m前後・短軸0.96m・深さ32cm規模である。長軸方向はN45° Eを指す。底面は幾分舟底状になる。

10号土壌（4図）

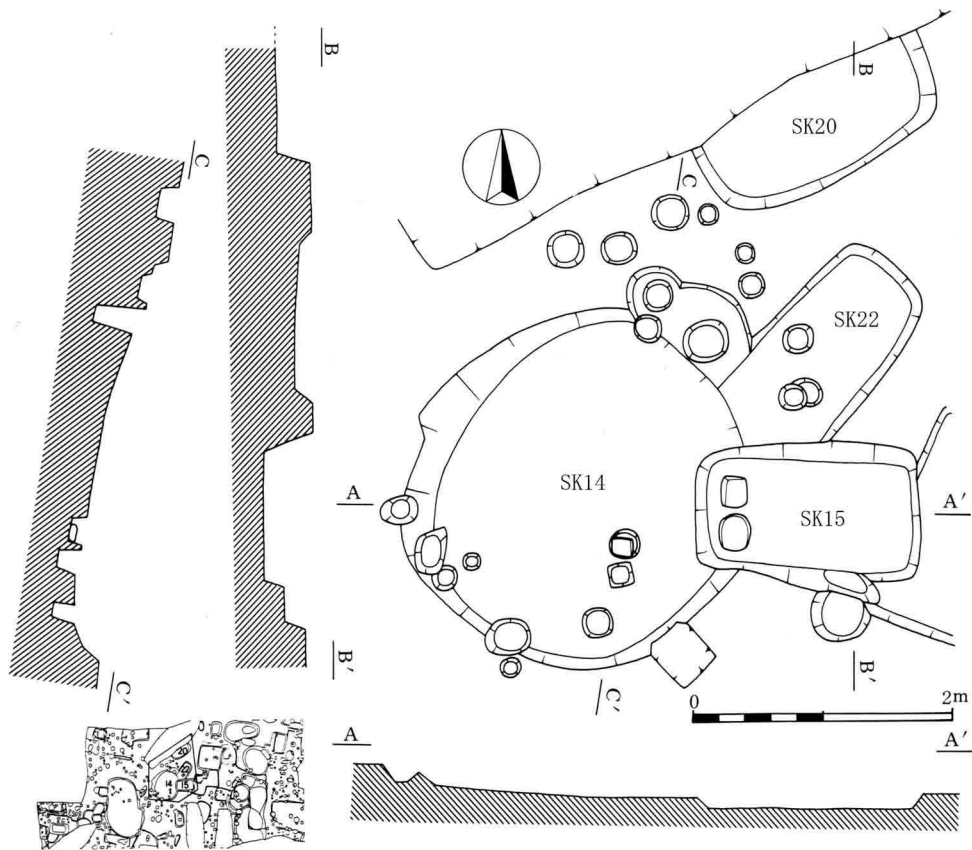
7～9号土壌と重複関係にあり、規模等は不明であるが、最深36cmを測る東西軸が長い楕円形が予想される。底面は西・南へ傾斜する。

11号土壌（6図）

調査区西側に位置し、西半分程は未検出である。形態は長方形を呈し、N104° Eに長軸がある。短軸1.2 m・深さ17cmを測る。



6 图 11号~13号土坑、2号沟址实测图



7図 14号・15号・20号・22号土坑実測図

12号土坑（6図）

11号土坑の北にあり、北側一部は未検出である。形態は不整形円形を呈し、東西巾1.34m・深さ36cmの規模である。内に不整形な大きなピット状遺構がある。土層断面の観察によれば柱痕様遺構があり、周辺ピット群より古い遺構である。

13号土坑（6図）

調査区西側にあり、北壁は未検出であるが不整形長方形を呈するものと思われる。主軸はほぼ東西方向にあり、2.52m・深さ19cm程の規模になる。床面はやや舟底状を呈し、西側に自然礫2個が据えられている。

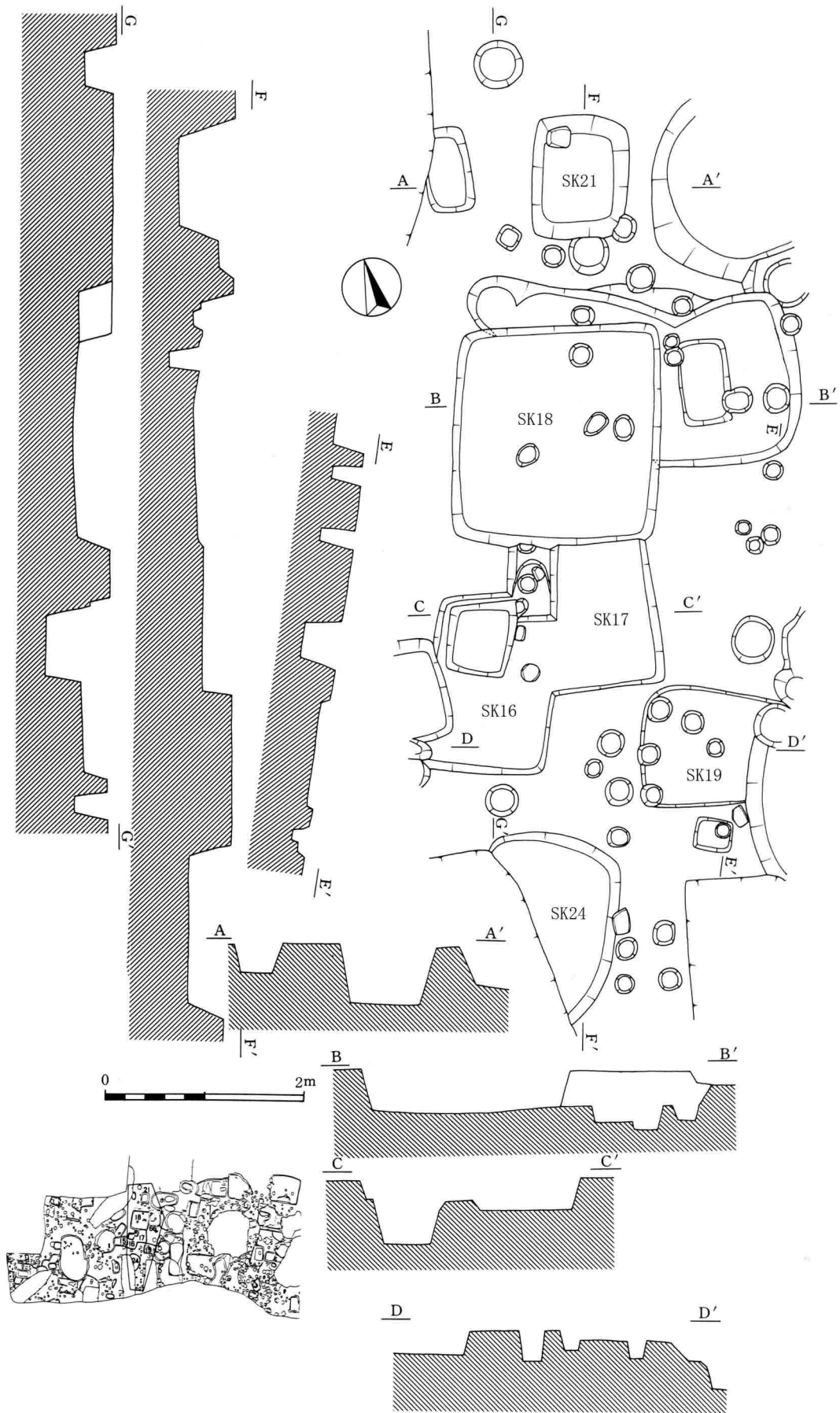
14号土坑（7図）

調査区西側にあり、15・22号土坑と重複するが前後関係は不明である。形態は円形を呈し、東西2.68m・南北2.8m・中央付近の深さ26cmの規模である。床面は幾分舟底状を呈する。建物址を想定すれば壁に掘られたピットを柱穴とみなすことができる。

15号土坑（7図）

14・16・22号土坑と重複関係にあり、最も深い遺構である。形態は長方形を呈し、長軸方向はほぼ東西で、1.74m・短軸1.06m・深さ36cmの規模である。底面は平坦で西側に2個の平石が据えられていた。

16号土坑（8図）



8图 16号~19号·21号·24号土壤实测图

15・17号土壙と重複関係にあり、15号より古い。形態は長方形を呈し、長軸1.86m・短軸12.6m・深さ19cmの規模である。長軸方向は N16° Eである。北側に一辺70cm程・底面からの深さ44cmの遺構を内包する。

17号土壙（8 図）

16・18号土壙と重複し、18号より古い。16号とは不明である。掘り上げ状態から長方形土壙2基が重複している可能性がある。長軸の規模は不明であるが、短軸1.48mと1.04m・深さ21cmと31cmの規模のものである。主軸方向は N13° Eを指す。底面は16号と同一レベルで平坦である。

18号土壙（8 図）

17・66号土壙と重複関係にあり、これらよりも新しい。覆土上面には炭化材を含む炭化物が顕著に認められた。形態は方形を呈し、東西2.1 m・南北2.22m・中央付近の深さ40cmの規模である。底面は舟底状を呈する。南北軸方向は N16° Eである。建物址を想定するにはこれにあてる柱穴が不明である。

19号土壙（8 図）

26号土壙と重複しているため長軸の長さは不明である。形態は隅丸長方形を呈し、南北1.2 m程・深さ10cmの規模である。長軸方向は N106° Eを指す。底面は平坦である。

20号土壙（7 図）

22号土壙の北に位置し、北側半分程は破壊を受けている。形態は隅丸方形を呈し、長軸1.98m・深さ27cmの規模である。長軸方向は N65° Eを指す。

21号土壙（8 図）

18号土壙の北に位置する。形態は隅丸長方形を呈し、長軸1.28m・短軸0.98m・深さ58cmの規模である。長軸方向は N18° Eを指す。底面は平坦で北西隅に平石が据えられている。

22号土壙（7 図）

14・15号土壙と重複関係にあり、最も浅い遺構である。形態は長方形を呈し、長軸の長さは不明であるが、短軸0.94m・深さ15cmの規模になる。長軸方向は N45° Eである。

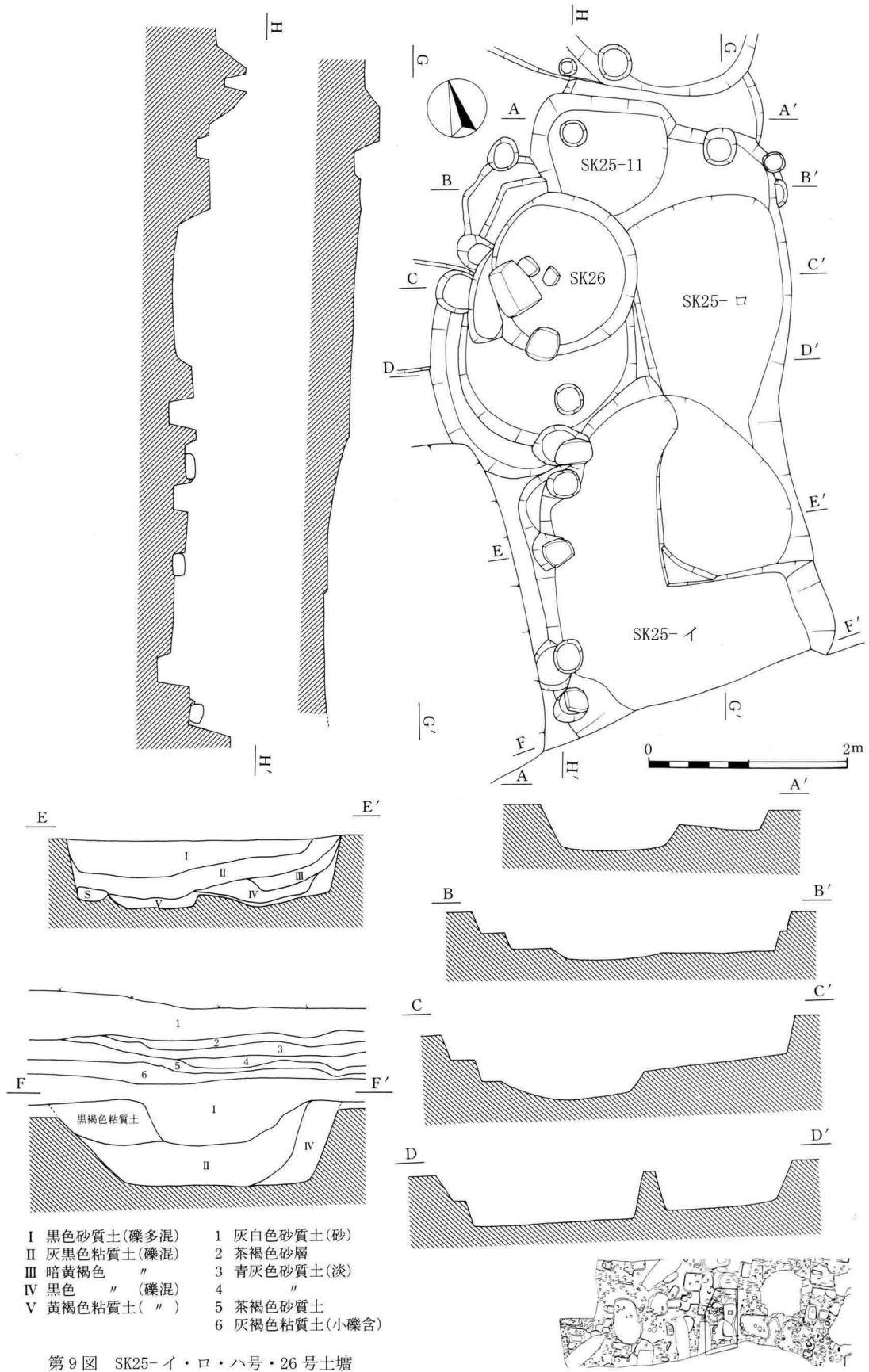
23号土壙（5 図）

4号土壙の東側に位置し、北東隅の丸味が大きい隅丸長方形を呈する。長軸1.4 m程・東西軸0.55m・深さ34cmの規模になる。内に大小のピットがあるが、本遺構との関係は不明である。長軸方向は N17° Eを指す。

24号土壙（8 図）

16号土壙の南にあり、南西半分程破壊を受ける。形態は隅丸長方形を呈し、長軸2.0 m・短軸1.4 m前後の規模を予想する。深さは26cmで、底面は平坦である。

25-I号土壙（9 図）



調査区中央よりやや西方に位置し、25・26・27号土壌が南北に連なり土壌群を形成する。調査ではこれらを一連のもの、大きな溝状遺構と認識していたため25号に枝番号を付する結果となり、またそれぞれに更に重複土壌がある可能性もある。標記の遺構も底面において10cm程の落差があり、また東壁の状態から2基かもしれない。形態は楕円形を呈するものと思われるが、南側は未検出で南北の長さは不明である。東西2.8 m程・最深70cm程の規模である。西壁に添って平石を有するピットが26号土壌にかけて展開する。イ・ハと関連するものであろうか。底面は舟底状を呈し、下層の礫層にまで及んでいる。尚前述の一連の土壌群の覆土上層は多量の礫が混入しており、イ～ハ・26号からはスサ入り焼土塊が認められた。

25-イ号土壌 (9図)

イ・ハ・26号土壌との前後関係は不明である。東・西壁から隅丸長方形態を推定する。南北軸3.0 m前後・東西1.54mの規模で、底面は西に傾斜し最深54cmを測る。南北底面は幾分南へ傾斜し舟底状を呈する。

25-ハ号土壌 (9図)

形態は隅丸長方形を想定する。東西1.46m・南北1.1 m前後・深さ50cmの規模である。この遺構と二号土壌との間に東西2 m・深さ20cm程の土壌が存在するが、形態は不明である。

25-ニ号土壌 (10図)

ホ・ト号土壌と重複関係にある。この一帯は数基の土壌が重複している可能性があり、前後関係は不明である。東西3.1 m・深さ11cm程の隅丸方形様土壌を楕円形土壌が掘り込む。後者の規模は長軸2.88m・短軸2.52mになり、底面は平坦であるが西に傾斜し前者の底面より22cm深くなる。長軸方向は N67° Eである。

25-ホ号土壌 (10図)

形態は楕円形を呈し、長軸3.22m・短軸1.7 m以上の規模になる。南壁の掘り込みは34cmで、東へ舟底状に傾斜し、最深部は44cmを測る。遺構内及び周辺に柱穴等はほとんど認められない。長軸方向は N97° Eを指す。

25-ヘ号土壌 (10図)

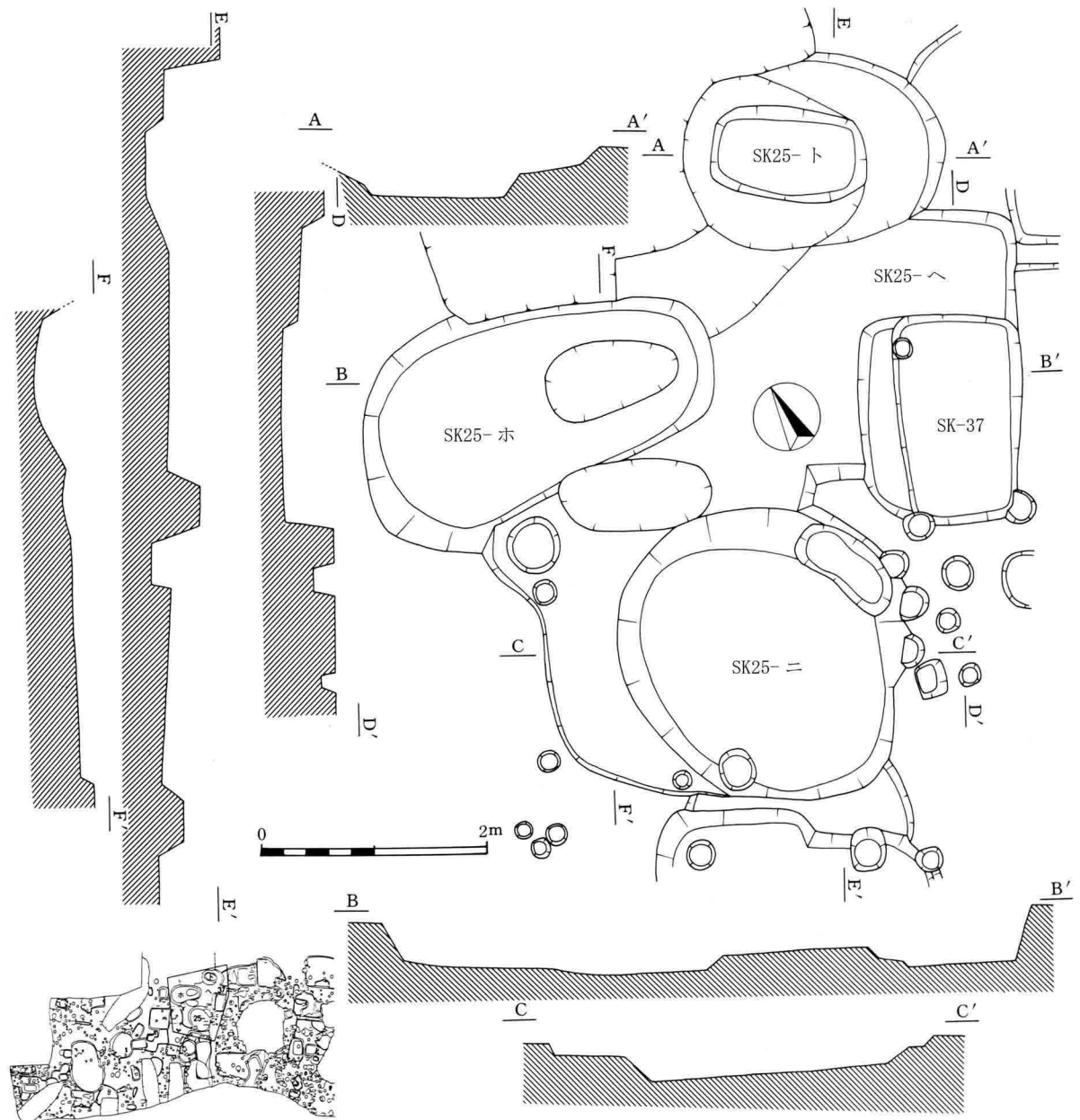
ニ・ホ・ト・37号土壌と重複関係にあるため形状・規模等の情報は少ない。形態は方形を呈するもの思われ、南北2.4 m・深さ28cmの規模である。底面は舟底状になる。柱穴等は見られない。東壁方向は N22° Eを指す。

25-ト号土壌 (10図)

北端の遺構のひとつである。形態は楕円形を呈し、残存遺構の規模は長軸2.34m・短軸1.72m・深さ50cmを測る。床面は西に傾斜する。遺構内に長軸1.4 m・短軸0.8 m・底面からの深さ17cmの隅丸長方形の遺構がある。覆土が同質であるので付属施設と思われる。主軸方向は N116° Eを指す。

26号土壌 (9図)

19・25号土壌と重複する。北側に直径1.6 m程・ハ号土壌底面からの深さ40cmの円形土壌と楕円形土壌が重複し、更に円形土壌の北に不整形土壌が重複している可能性がある。楕円形土壌の長軸の長さは不明であるが、東西2.1 m・深さ52cmを測る。底面は共に舟底状になる。円形土壌覆土には大きな角礫、底面に平石が据えられる。



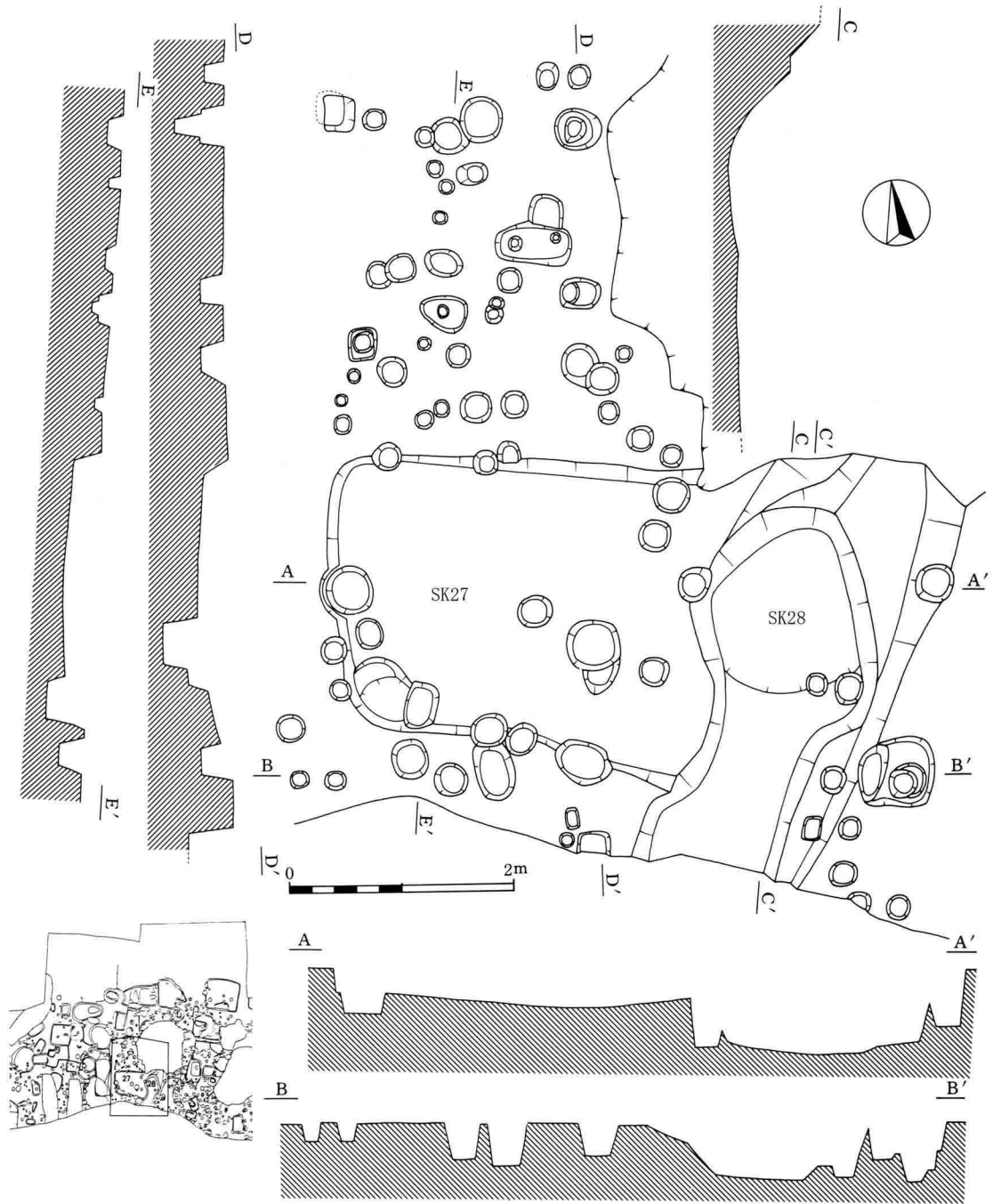
10図 25-二号～ト号・37号土坑実測図

27号土坑 (11図)

調査区中央南端に位置し、28号土坑に切られる。覆土は黒味の強い黒褐色粘質土で炭化物の混入も他の遺構より多い。形態は隅丸長方形を呈する。東西の規模は不明であるが、南北2.5 mで南壁は東側で更に開く。掘り込みは西壁21cm・南壁12cm・北壁22cmを測り、床面は中央が凹む舟底形を呈する。長軸方向は N100° Eを指す。

28号土坑 (11図)

27号土坑より新しい溝状の遺構である。掘り上げ状態を観察すると隅丸長方形の土坑を内包しているようである。溝状遺構は南側が未検出であり、北側が破壊を受けているため規模は不明であるが、舟底状底面の状況からまもなく終結するものと思われる。東壁が直線的なのに対し、西壁は蛇行し、検出北端の巾は1.74 m・深さ65cmを測る。隅丸長方形の遺構は、南北2.1 m・東西1.6 m・深さ66cmの規模を予想する。この遺構上部より石鉢・石臼等が出土していることから溝状遺構より新しい可能性がある。



11図 27号・28号土壌実測図

29号土壌 (12図)

調査区中央南端に位置する。形態は隅丸長方形を呈する。長軸1.14m・短軸0.78m・深さ24cmの規模である。長軸方向は N117° Eを指す。底面は平坦である。

30号土壌 (12図)

29号土壌に接する。形態は長方形を呈するものの北東隅みが張り出す。長軸最大幅1.38m・短軸1.0 m・深さ18cmを測る。主軸方向は N160° Eを指す。底面は平坦である。

31号土壌 (12図)

34号土壌と重複し、これよりも新しい。形態は不整長方形を呈し、長軸2.5 m・短軸最大巾1.6 m・南壁の深さ35cmの規模である。長軸方向は N19° Eを指す。底面は平坦である。遺構内に同一覆土の長軸1.42m・短軸0.86m・底面からの掘り込み深さ9 cmの規模を有する長方形土壌がある。主軸方向はN16°Eを指す。

32号土壌 (12図)

30号土壌の東に位置し、東側半分程は破壊される。形態は不整楕円形を呈するものと思われる。南北軸（短軸）1.24m・深さ12cm程の規模である。内に短軸50cm・深さ16cmを測る楕円形土壌がある。

33号土壌 (12図)

31号土壌の東に隣接し、34号土壌を切る。形態は東壁がやや張り出す方形を呈し、東西最大巾1.24m・南北1.22m・南壁の深さ50cmの規模である。南北軸方向は N20° Eを指す。底面は平坦である。

34号土壌 (13図)

調査区中央に位置し、31・32号土壌に切られ、東側は土壌状遺構及び攪乱による破壊を受ける。形態は方形を呈し、南北3.9m・北壁の深さ18cm・南壁16cmを測り、底面が舟底状をなし最深部では28cmになる。この遺構内に深さ10cm程の浅い楕円形・不整形を呈する土壌状遺構がある。覆土等から付属施設と考えられる。

35号土壌 (13図)

34号土壌の西に位置し、形態は隅丸方形を呈し、南北0.92m・深さ45cmの規模である。軸線はほぼ南北を指す。

36号土壌 (13図)

複数の土壌が重複している模様で複雑な形態を呈する。各壁中央付近の規模は東西2.9m・南北2.4 mになり、掘り込みは東壁21cm・西壁16cm・中央最深部43cmを測る。

37号土壌 (10図)

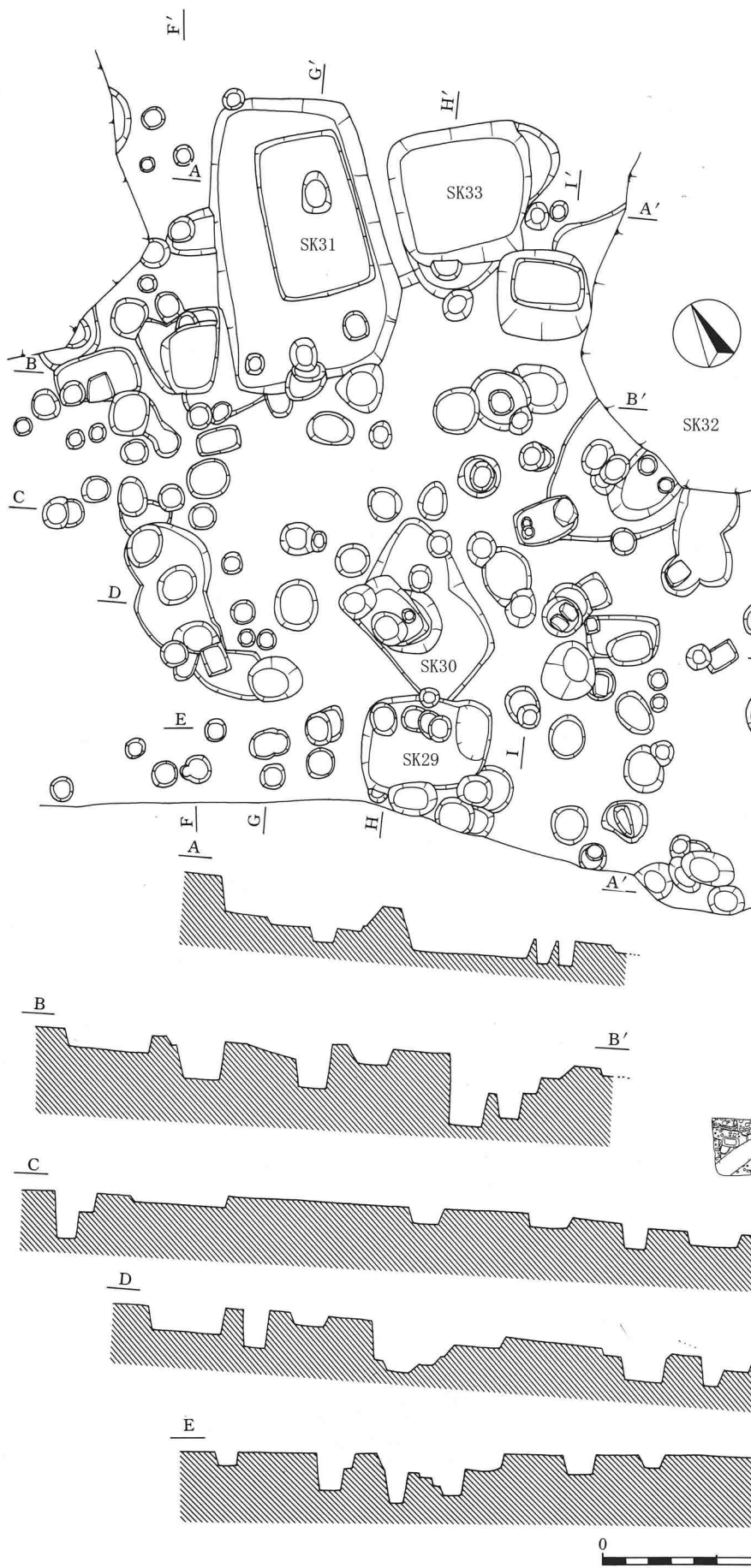
へ号土壌と重複する。形態は隅丸長方形を呈し、長軸1.86m・短軸1.48mの規模である。掘り込みは二段になり、深さ44cm・50cmを測る。底面はやや舟底状になる。主軸方向は N24° Eを指す。

38号土壌 (14図)

調査区中央北端の遺構で、西壁は3段に掘り込まれ複数の遺構の集合体化とも考えられる。形態の明確なものは不整隅丸方形を呈し、東西約2.2m・南北2.04m・深さ28cmの規模で、底面は舟底状を呈する。

39-I号土壌 (14図)

隅丸方形土壌と長楕円形土壌が重複しているようである。前者は長軸の規模は不明であるが東西2.08m・深さ38cm測り、南北軸が N19° E方向にある。後者は長軸3.1 m・短軸1.1m前後の規模で、長軸方向は N134° Eを指す。底面は共に平坦である。



39-ロ号土壙 (14図)

イ・ロ号土壙と接するが、前後関係は不明である。基本形態は円形で、直径1.3m程・深さ58cmの規模である。

39-ハ号土壙 (14図)

形態は不整形を呈し、東西1.2m・南北1.1m・深さ28cm程の規模である。南北軸方向はN58°Eを指す。

40号土壙 (15図)

調査区中央南端に位置する。形態は長方形を呈し、長軸1.74m・短軸1.08m・深さ28cmの規模である。長軸方向はほぼ南北を指す。底面は舟底状を呈する。壁際のピットは本遺構に付属するかは不明である。

41号土壙 (15図)

42号土壙より古い遺構である。形態は長方形を呈し、長軸約1.6m・短軸1.0m・深さ24cmの規模である。長軸方向はN79°Eを指す。底面は平坦である。

42号土壙 (15図)

41号土壙と重複し、これよりも新しい。形態は長方形を呈し、長軸1.62m・短軸1.06m・深さ28cmの規模になる。長軸方向はN8°Eを指す。底面は舟底状になる。南側に重複した長方形土壙の存在が予想される。

43号土壙 (15図)

42号土壙の東に隣接する。形態は長方形を呈し、長軸2.58m・短軸1.5m程・南壁の深さ40cmの規模である。長軸方向はN10°Eを指す。底面は北に向かい浅くなり、舟底状になる。

44号土壙 (15図)

43号土壙の北に位置し、北東隅が丸味を帯びる変形長方形になる。長方形部の規模は長軸3.4m・短軸1.72m・同最大長2.19mになり、掘り込みは東壁42cm・西壁50cm・南壁40cm・北壁40cm測り、底面は舟底状になる。長軸方向はN92°Eを指す。遺構内にピットが1個あるのみで、また壁周辺に柱穴様のものは認められない。

45号土壙 (16図)

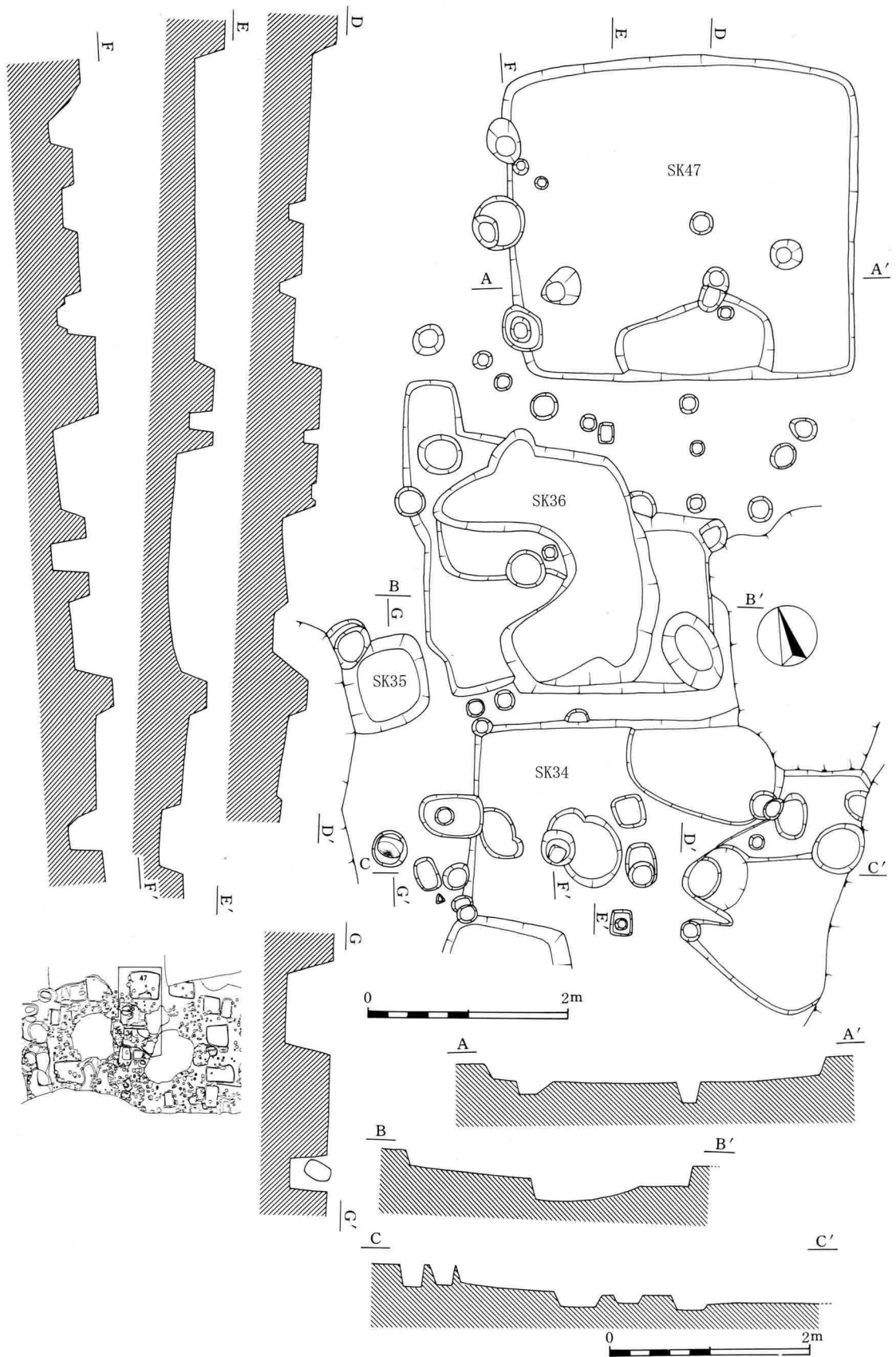
調査区中央付近に位置する。不整形丸長方形と2基の小さな長方形土壙が重複しているようである。前者は長軸2.54m・短軸2.0m・深さ10cmの規模で、底面は平坦である。長軸方向はN6°Eを指す。後者の北側遺構は東西0.9m・南北0.66m・深さ54cmを測る。南のものは東西1.2m程・南北0.6m・深さ15cmの規模である。

46号土壙 (16図)

北端に位置し、北側半分程は未検出である。形態は不整形を呈するものと思われる。規模は東西3.0mを測る。掘り込みは東壁16cm・西壁6cm・南壁10cmと浅く、底面は平坦である。覆土には炭化物・焼土が他の遺構より多く混入しており、東壁北よりのピットから炭化物に混り、炭化米塊が出土した。柱穴様ピットは一定でない。

47号土壙 (13図)

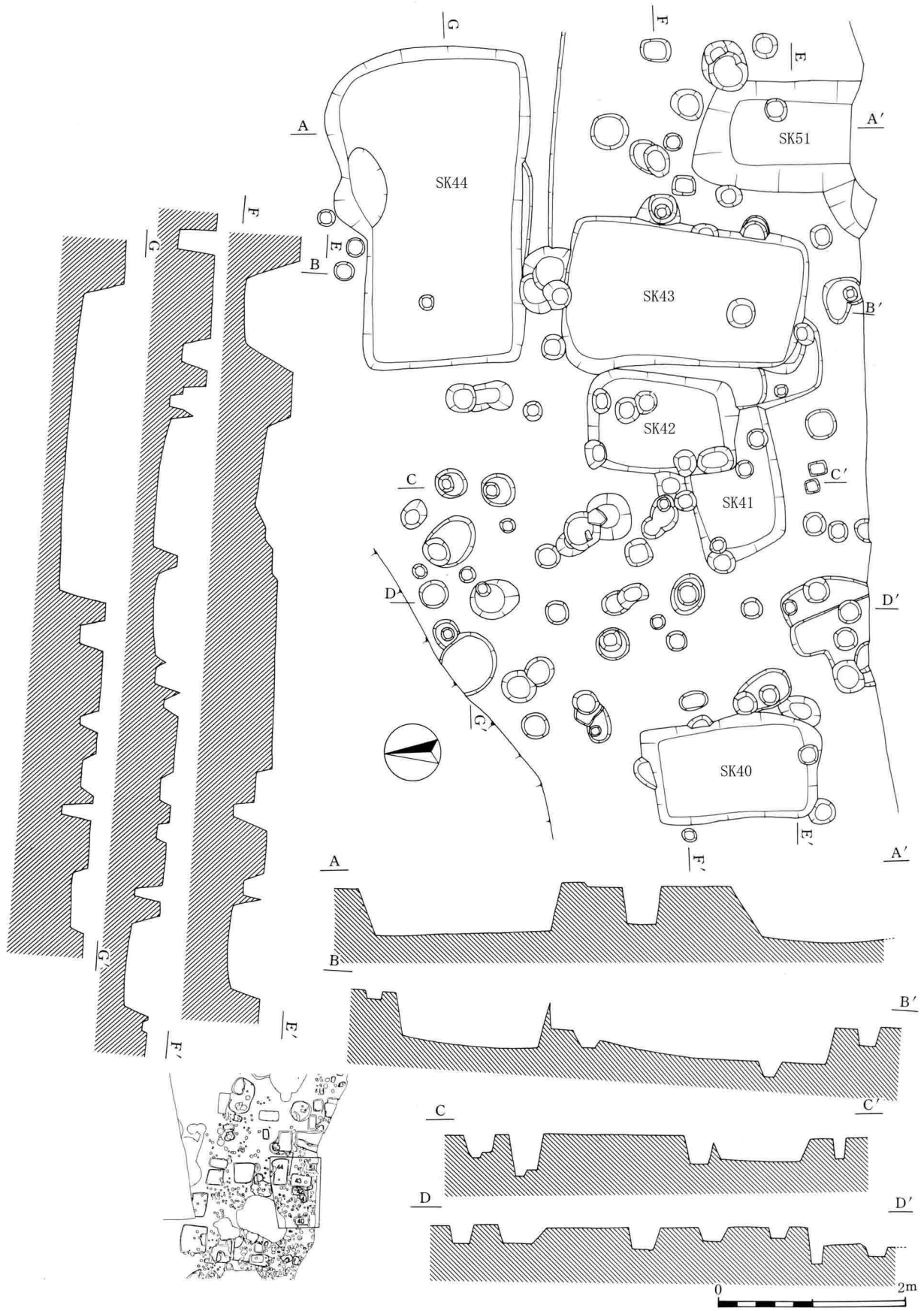
北端の遺構である。形態は隅丸方形を呈し、東西3.48m・南北3.26m・北壁の深さ28cmの規模で、南北軸方向



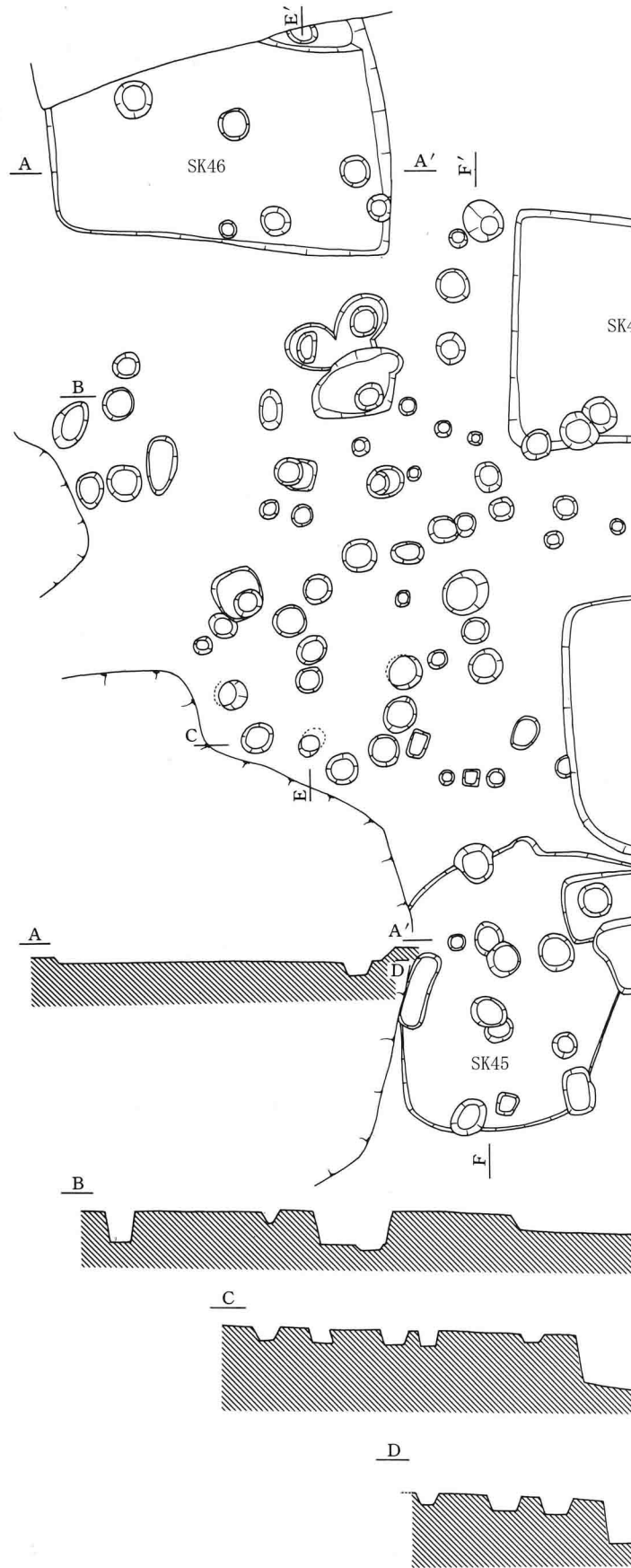
13图 34号~36号·47号土壤实测图



14図 38号・39-1号~ハ号土坑実測図



15图 40号~44号·50号·51号土坑实测图



は N20° E を指す。底面は平坦である。南壁下に東西1.6 m・南北0.9 m・深さ6 cm程の不整楕円形の落ち込みがある。竪穴住居址形態であり、西壁及び遺構内のピットを柱穴と考えられるが、東・北壁添には見られない。

48号土壌 (16 図)

46号土壌の東側に位置する。形態は東壁の短かい不整形を呈する。各壁中央での規模は東西2.0m・南北1.96 m・深さ20cmである。底面は舟底状である。南北軸は N 7° E を指す。東・北壁周辺にピットは認められない。

49号土壌 (16図)

48号土壌の東に隣接する。形態は長方形を呈し、長軸2.2m・短軸1.2m・深さ29cmの規模である。長軸方向は N 9° E を指す。底面は平坦である。南東隅に直径74cmの円形土壌がある。

50号土壌 (16図)

45号土壌の北に隣接し、南東隅で直径1.2mの円形土壌と重複する。形態は西壁の短かい台形状を呈し、東西2.58m・南北2.5m程・深さ48cmの規模である。主軸方向はほぼ南北を指す。底面中央付近は舟底状になる。

51号土壌 (15図)

隅丸長方形を呈する遺構であるが南側は未検出である。短軸1.2m・深さ59cmの規模で、断面形はU字状をなす。長軸方向はほぼ南北を指す。底面は舟底状になる。覆土は他の遺構と異なり拳大の礫が全面に詰まっていた。

52号土壌 (17図)

調査区東側南端の遺構で南側は未検出である。形態は溝状をなす不整形長方形を想定する。東西1.1~1.94mの規模で、北壁深さ32cmを測り、底面が舟底状をなし最深部では44cmになる。長軸方向は N 7° E である。

53号土壌 (17図)

58号土壌と重複関係にあるが時間差については不明である。形態は長方形を呈し、長軸2.6m・短軸1.7m・深さ50cmの規模である。長軸方向は N 90° E を指す。底面は舟底状をなし中央付近の深さ56cmを測る。

54号土壌 (17図)

52号土壌の東に隣接し、55号土壌に接する。形態は長方形を呈し、長軸方向は N 92° E を指す。底面は平坦である。

55号土壌 (17図)

54号土壌と接するが、前後関係は不明である。形態は円形を呈し、直径2.58m程の規模になる。掘り込みは12 cmであるが底面が舟底状になり中央部では20cmになる。北側の落ち込みの深さは46cmである。

56号土壌 (17図)

55号土壌の南に位置する。形態は長方形を呈し、長軸1.48m・短軸1.26m・深さ34cmの規模である。長軸方向は N 80° E を指す。底面は平坦で、北西隅に小ピット・南壁添に平石が置かれている。

57号土壙 (17図)

南端に位置し、南半分程は未検出である。長方形土壙が3基以上重複している可能性がある。総体としての規模は南北が不明・東西2.48m・深さ14cmを測る。床面は同一遺構のように一定の舟底状を呈する。

58号土壙 (17図)

53号土壙と重複する。形態は円形を呈し、2段構成で中央に長方形土壙・ピットを内包する。外側の円形土壙は直径1.44m・深さ18cmで、内側のそれは直径1.0m・深さ41cmを測る。方形土壙は長軸88cm・短軸62cm・2段目底面よりの深さ27cmであり、長軸方向はN13°Eを指す。ピットは直径32cmで更に13cm深くなる。

59号土壙 (18図)

調査区東側58号土壙の北に位置する。形態は長方形を呈し、長軸1.26m・短軸0.68m・深さ14cmの規模である。主軸方向はN104°Eを指す。底面は平坦である。

60号土壙 (18図)

東側北端に位置する。形態は不整形で、内に円形土壙がある。長軸1.26m・短軸最大幅1.04m・深さ27cmの規模である。円形土壙は長軸0.84mで更に12cm掘り込まれる。北側の円形土壙は直径56cm・深さ34cmを測る。

61号土壙 (18図)

60号土壙に接する。形態は長方形土壙2基が併行重複しているようである。規模は長軸1.32m・東西1.04m(深いもの0.62m)である。掘り込みは2段になり、4cm・28cmを測る。長軸方向はほぼ南北である。

62号土壙 (19図)

調査区東端に位置し、東半分程は未検出である。この遺構も複数の土壙が重複している可能性がある。形態は台形状で東端の規模は2.7mである。深さ8cmと浅く、底面は平坦である。西側に小形の長方形土壙が散在する。

63号土壙 (18図)

調査区東端に位置し、64号土壙に切られる。形態は不整楕円形を呈し、長軸4.4m・短軸2.6m・深さ10cmの規模である。底面は幾分舟底状になるにすぎない。長軸方向はN115°Eを指す。不整形土壙を内包する。

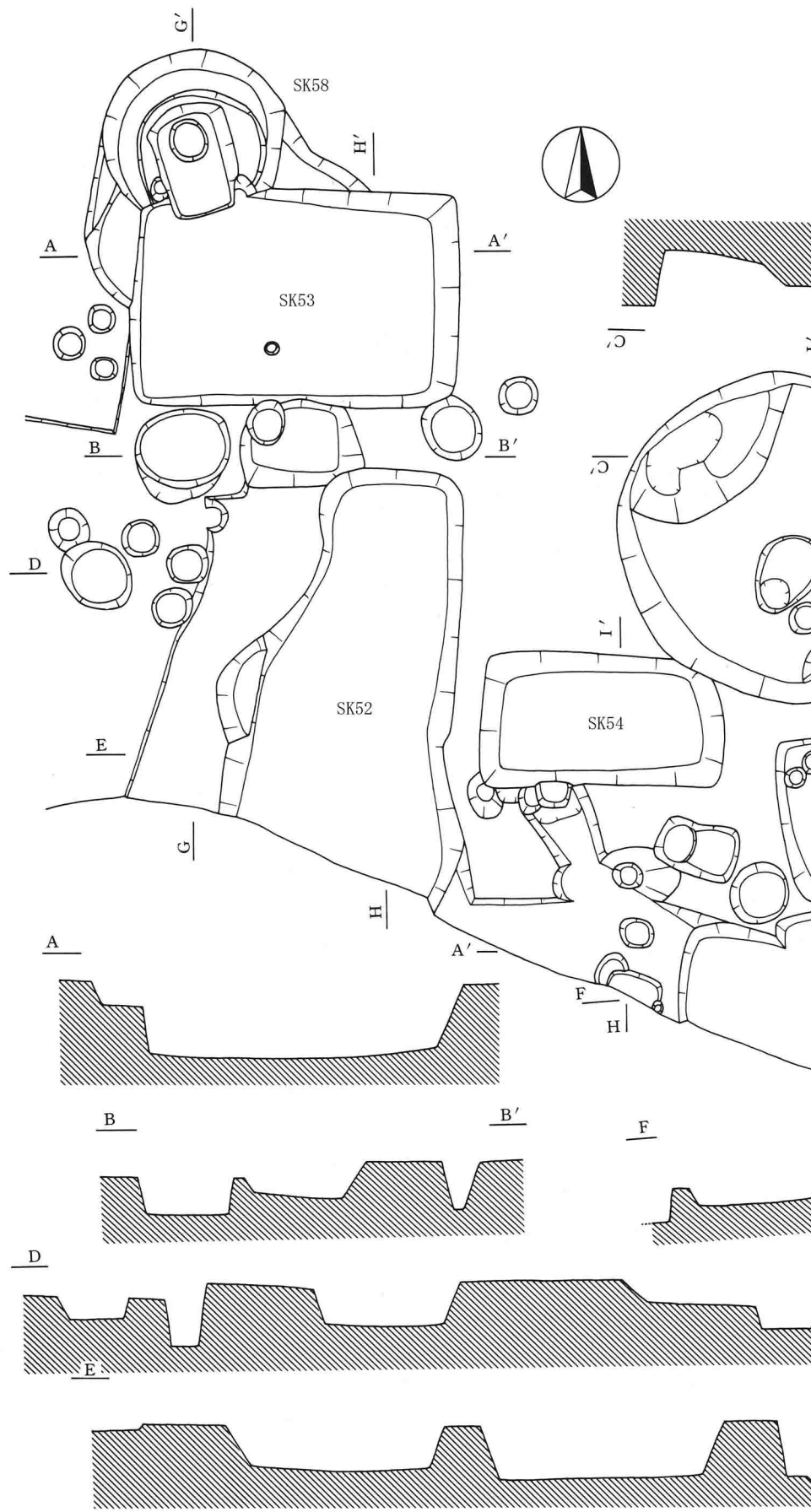
64号土壙 (19図)

63号土壙を切り込んでいる。形態は不整楕円形を呈する。規模は長軸2.2m・短軸1.42m・深さ24cmである。長軸方向はN115°Eを指す。底面は舟底状になる。

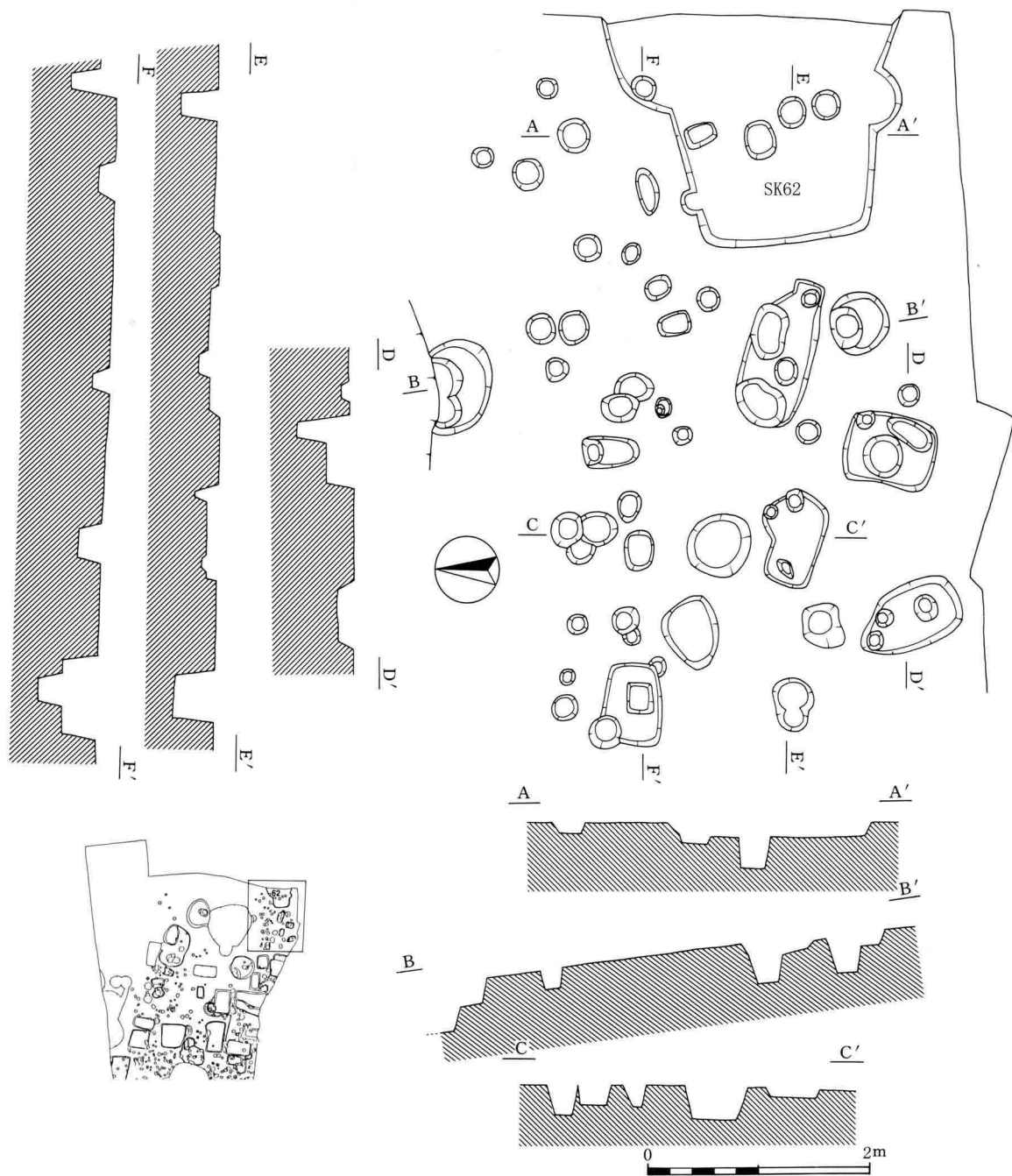
65号土壙 (18図)

調査区東端の遺構で、不整楕円形を呈し方形土壙を内包する。規模は長軸3.2m・短軸2.5m・深さ36cmである。長軸方向はN100°Eを指す。底面は舟底状になる。方形土壙は一辺70cm・底面からの深さ48cmを測る。

66号土壙 (8図)







19図 62号土壌実測図

18号土壌より古い。形態は隅丸台形状を呈するが、2基重複している可能性があり、長軸0.87m・東西軸0.52m・深さ8cmの長方形土壌を内包する。規模は南北軸1.70m・深さ34cmを測り、N96°Eを指す。床面は平坦で、18号土壌のそれと同レベルになる。

上面1号 (18図)

63号土壌と接する。下部の土壌群より約15cm程上層から確認され、最も新しい土壌である。覆土は暗褐色粘質土であり、これも他と異なる。形態は不整長方形を呈する。規模は長軸2.58m・短軸1.30m・深さ40cmを測る。床面は平坦である。長軸方向はN108°Eを指す。

1号溝址（4図）

調査地西端に位置し、方形にめぐむようであり、調査では南東部を検出した。南側は5号土壌に添って延び、巾22cm・深さ8cm程の規模になる。東側の最大巾40cm・深さ11cmを測る。

2号溝址（6図）

13号土壌の南に位置し東西方向に長さ1.8m延び、巾24cm・深さ10cmを測る。

ピット群（3～19図）

土壌間を埋めるように調査区全体的に分布し、中世を通じ、何棟かの建物が存在していたことは確かなことであろうが、柱穴として建物址を想定することが出来なかった。それは土壌の覆土と同色同質であったので、土壌内のピットを見い出せなかったことと、数があまりにも多く建物址としての間数が求められなかった点と、重要な位置に後世の大きな掘削による破壊を受けいたこととによる。規模・深さ等土壌実測図に一部であるが提示してあるので参考にされたい。

土壌集計表

遺構番号	図番号	形態	規模(長軸×短軸×深さ) m m cm	方向N-E	底面	付属施設	重複土壌	遺物番号	付記
土壌1	4	不整隅丸方形	5.6 × - × 16~23	15	舟底状	東壁南端自然礫4個	5~7	20	
2	5	3基重複(?)	2.34×1.64×32	100	〃	壁内外のピット列	1・4	〃	
3	〃	不整隅丸方形	2.24 × - × 13		平担		4		径2m範囲に厚6cm木炭層
4	〃	〃	5.30×3.66×40~51	南北	舟底状		1	〃・37	石鉢
5	4	長方形(溝状)	1.20 × - × 17	100	平担			〃・〃	古銭
6	〃	〃	1.69×0.96×64	106	〃	1号の付属施設(?)	1		炭化米
7	〃	楕円形	1.32 × - × 61	105	〃		1・10		
8	〃	不整楕円形	1.28×0.88×44	90	〃		9・10		
9	〃	楕円形	1.50×0.96×32	45	舟底状		10		
10	〃	〃	- × - × 36	100	西南傾		7~9		
11	6	長方形	- × 1.20×17	(104)	平担			〃	
12	〃	不整円形	1.34 × - × 36		〃	ピット状遺構		〃	土層断面に柱痕
13	〃	不整長方形	2.52 × - × 19	90	舟底状			〃・37	鉄釘
14	7	円形	2.80×2.68×26		〃	壁のピット(?)	15・22	〃・36	砥石
15	〃	長方形	1.74×1.06×36	90	平担	平石2個	14・16・22		
16	8	〃	1.86×1.26×19	16	〃	長方形土壌	15・17		
17	〃	〃・2基(?)	- × 1.48, 1.04×21・31	13	〃		16・18		
18	〃	方形	2.22×2.1 × 40	16	舟底状		17・66		炭化材・炭化物
19	〃	隅丸長方形	- × 1.20×10	106	平担		26		
20	7	〃	1.98 × - × 27	65	〃				
21	8	〃	1.28×0.98×58	18	〃	平石		37	古銭
22	7	長方形	- × 0.94×15	45	〃		14・15		
23	5	隅丸長方形	1.40×0.55×34	17	〃	大小のピット			石鉢
24	7	〃	(2.0)×(1.4)×26	26	〃	西壁平石ピット	26・27	20	
25-イ	9	不整楕円形	- × 2.80×70	南北	舟底状		26・ロ	11・37	スサ入焼土塊・古銭・鉄釘・石鉢・石臼
-ロ	〃	隅丸長方形	(3.0)×1.54×54	〃	〃		26・イ・ハ		〃
-ハ	〃	〃	1.46×1.10×50	〃	〃		26・ロ		〃
-ニ	10	楕円形	2.88×2.52×22	67	〃		ホ・ト	21・37	古銭(2)
-ホ	〃	〃	3.22×(1.7)×34~44	97	〃		ニ・ハ	〃・〃	鉄釘・石鉢
-ヘ	〃	方形(?)	- × 2.40×28	22	〃		27・ニ・ホ・ト		

遺構番号	図 番号	形 態	m m cm 規模(長軸×短軸×深さ)	方向N-E	底 面	付 属 施 設	重複土壌	遺 物 図 番 号	付 記
25-ト	10	楕円形	2.34×1.72×50	116	西 傾	楕円形土壌			
26	9	3基重複・円形	1.60× - ×40		舟底状	角礫・平石	19・25	21・37	スサ入焼土塊 鉄釘(2)
27	11	隅丸長方形	- ×2.50×12~22	100	舟底状		28	''	炭化物
28	''	隅丸長方形溝状	(2.1)×(1.6)×66	160	''				
29	12	''	1.14×0.78×24	117	平 担			22	
30	12	長方形	1.38×1.0 ×18	160	''			''	
31	''	不整長方形	2.50×1.60×35	19	''	長方形土壌	34	''	
32	''	不整楕円形	- ×1.24×12	52	''	楕円形土壌		''・37	鉄釘
33	''	方形	1.24×1.22×50	20	''		34	''・''	''
34	13	''	3.90× - ×16~28	15	舟底状	''	31・33	''・''	''
35	''	隅丸方形	0.92× - ×45	南 北	平 底			''	
36	''	数基重複	(2.9)×(2.4)×16~43	-	''			36	
37	10	隅丸長方形	1.86×1.48×44・50	24	舟底状		へ		
38	14	不整隅丸方形	(2.2)×2.04×28	7	''			23	
39-イ	14	長楕円形	(3.1)×(1.1)×38	19 134	平 担		ロ		
-ロ	''	円形	1.30× - ×58	-	''		イ・ハ		
-ハ	''	不整形	1.20×1.10×28	58	''				
40	15	長方形	1.74×1.08×28	南 北	舟底状		42	23・37	古銭(2)
41	''	''	1.60×1.00×24	79	平 担		41		
42	''	''	1.62×1.06×28	8	舟底状			24	
43	''	''	2.58×1.50×40	10	''			''	
44	''	不整長方形	3.40×1.72×40~50	92	''	ビット			
45	16	不整隅丸方形	2.54×2.00×10	6	平 担				
46	''	不整形	3.00× - ×16	103	''	ビット状遺構		25	炭化米塊 炭化物・焼土
47	13	隅丸方形	3.48×3.26×28	20	''	不整楕円形土壌 ビット		''	
48	16	不整形	2.00×1.96×20	7	舟底状			''	
49	''	長方形	2.20×1.20×29	9	平 担	円形土壌		''	
50	''	台形	2.58×2.50×48	南 北	舟底状				
51	15	隅丸長方形	- ×1.20×59	''	''				礫を覆土とする
52	17	不整長方形	- ×1.94×32~44	7	''			''	
53	''	長方形	2.60×1.70×50~56	90	''		58	''・36	硯
54	''	''	1.90×1.00×40	92	平 担		55	''・''	砥石
55	''	円形	2.58× - ×12~20	-	舟底状	不整形土壌	54	''・''・37	鉄釘・硯
56	''	長方形	1.48×1.26×34	80	平 担	ビット・平石		26	
57	''	3基以上重複	2.48× - ×14	90	舟底状			''	
58	''	円形	1.44・1.00× - ×18・41	-	平 担	長方形土壌・ビット	53	''	
59	18	長方形	1.26×0.68×14	104	''				
60	''	不整形	1.26×1.04×24	-	''	円形土壌	61	''	
61	''	長方形	1.32×1.04×4・28	南 北	''		60		
62	19	台形	- ×2.7 ×8	90	''				
63	18	不整楕円形	4.40×2.60×10	115	舟底状	不整形土壌	64	''・37	古銭
64	19	''	2.20×1.42×27	115	''	方形土壌	63	''	
65	18	''	3.20×2.50×36	100	''		18・25・ニ	''	
66	8	隅丸台形	1.70× - ×34	96	平 担	長方形土壌	18		
上面1	18	不整長方形	2.58×1.30×40	108	''				覆土暗褐色粘質土 上層より検出
上面								37	古銭・鉄釘
28東ビット 土壌1周辺 ビット群								22・37	鉄釘
検出面								26	''
								27・''	'' (4)

3 遺 物

原 明芳 ((財) 長野県埋蔵文化財センター調査研究員)

土器・陶磁器等の焼物、石製品、金属製品など、様々な材質の遺物が出土している。なお、木製品は土壌の条件から依存していない。これらの遺物は後述するように、14世紀から15世紀前半代に主体をおく。この時期としては、比較的量もまとまっており、良好な資料である。

器種的にみると食膳具類が圧倒的に多く、調理具、貯蔵具などがそれに続く。煮炊具は比較的少ない。このほか、火鉢や硯などのように特殊な用途と考えられる遺物もいくつかみられる。

以下、個々の遺物を記述するために、簡単な分類を行なう。その後、遺構単位に遺物の説明をする。中世の遺物の特徴上、小破片への配慮も必要のため、遺構ごとに破片数を集計した一覧表を付す。説明は図示した遺物を中心に、必要な場合は図示以外についても説明をする。最後に、これらの遺物群をいくつかの角度から若干の考察を加える。

焼 物

基本的には磁器、陶器、土器に分けることができる。更に産地別や用途別あるいは器種別に分けることが可能であり、複雑な分類になる。今回扱う焼物の概要について簡単にふれたい。

磁 器

すべて中国からの輸入品であり、青磁（龍泉窯系、同安窯系）、白磁、青白磁などがみられる。出土総数は約50片で、ほとんどが碗などの食膳具である。

陶 器

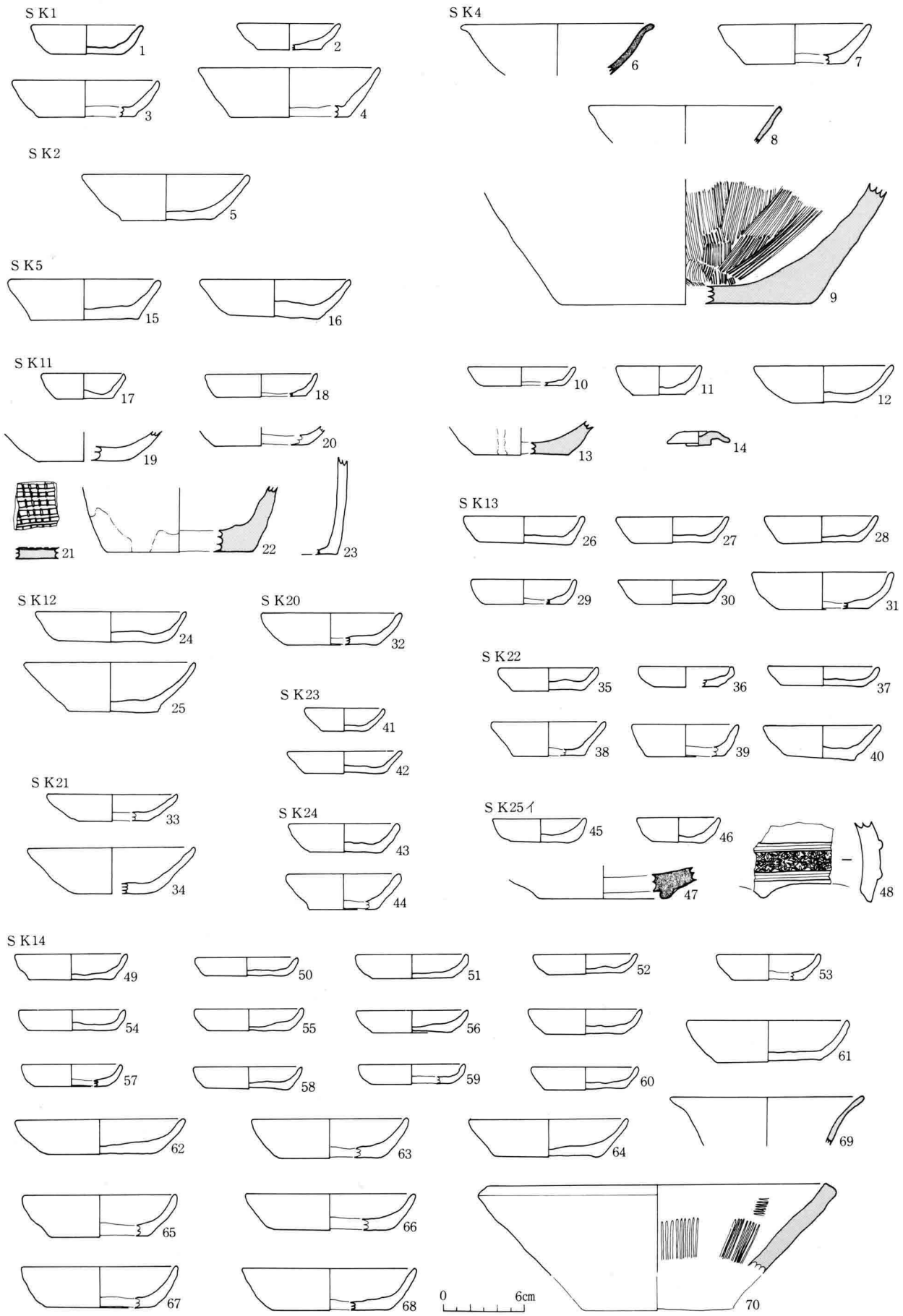
施釉陶と無釉陶の二つに分けることができる。施釉陶は全て国産と思われ、瀬戸・美濃に産地が求められる。時期的には、古瀬戸の段階であり、大窯製品はみられない。無釉陶の産地については、広義の東海系と珠洲系と分けることができる。観察によって二者の分類は可能であり、更に東海系の大型品については常滑と中津川に分類でき、小型品には東濃もみられる。なお、珠洲系には軟質の須恵質のものもみられ、一概に産地を北陸には限定することはできない。

土 器

土器皿が今回出土した中で最も多い。調整をみるとロクロ（回転台）を使用したものと、手づくねの二種がみられる。量的には前者が圧倒的に多い。産地としては一応広義の在地に求められる。現在、これらの分類、編年が県内で試みられているが、まだはっきりした結論はだされていない。土器皿以外に内耳鍋、火鉢、すり鉢などがみられ、若干瓦質のものもみられる。

1) 遺構及び遺構外出土の焼物

各遺構より出土した焼物は、その破片数を次頁に示した。以下図示できた遺物について説明を加える。なお、「土器皿」についてロクロ調整の場合はただ土器皿とし、手づくねの場合のみ手づくね土器皿として説明する。



20图 烧物实测图 1

25- 二号土壙 (21図71~73)

71は土器皿で体部が大きく開く。72は青磁の筒形の容器の口縁である。73は常滑の甕の口縁である。

25- 六号土壙 (21図74~89)

74~79は土器皿である。77は口縁にススが付着し燈明皿と思われる。80は土師器の香炉であり、3足がつけられる。81は72と同様の青磁の筒形の容器である。82は白磁の小碗であり、83は白磁多角碗である。84は龍泉窯青磁の香炉である。85は大型の珠洲系須恵質摺鉢の底部であり、摺目が間隔を空けて施される。86・87は常滑の甕であり、86は73と同一個体の可能性が高い。88は土師器の浅鉢形の火鉢である。口縁はやや内弯し、面が取られる。内面はヨコナデ、外面はヨコヘラミガキで仕上げられ、外面には梅花文が2個単位で押捺される。89は珠洲の甕で口縁端部が丸く仕上げられる。

26号土壙 (21図90~102)

90~98は土器皿であり、99~102は珠洲系須恵質の摺鉢である。99は片口が付けられ、摺目は間隔を空けて施される。いずれの口縁もやや内弯気味に方形に仕上げられる。

27・28号土壙 (22図103~111)

103~108は土器皿である。108は体部が大きく開く。109は白磁碗で、腰部が大きく屈曲する。110は珠洲系の須恵質摺鉢であり、口縁部はやや内弯し面が取られる。111は土師器風炉の口縁である。直立する口縁外面には2条の隆帯が貼られ、その間に雷文が押捺され、円文の押捺によって区切られる。その下部には断面三角形の連子がつけられ、その間の長方形の空間には沈線を交差させ、梅花文と菱形文が施される。

28号土壙東ピット群 (22図112~134)

112~124は土器皿で、2法量に分けることができそうである。125は古瀬戸平碗で、灰釉が掛けられる。126~129は古瀬戸卸皿である。127・129は端部が面取され、直線的に立ち上がり灰釉が掛けられる。126・128は口縁端部に強いナデが入れられ、内部に隆帯が張りだす。126は鉄釉、128は灰釉が掛けられる。127・129が126・128より古相を示す。130は薄手の山茶碗で、東濃産白土原1号窯式と思われる。131~133は龍泉窯系青磁で、131は折縁の坏、132・133は蓮弁文碗である。134は珠洲系の須恵質摺鉢である。

29号土壙 (22図135・136)

135は土器皿、136は古瀬戸平碗で灰釉が掛けられる。

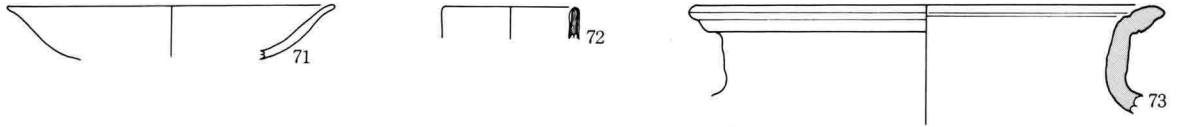
30号土壙 (22図137~141)

137~140は土器皿で、2法量にわかれる。141は古瀬戸平碗で灰釉がかけられる。

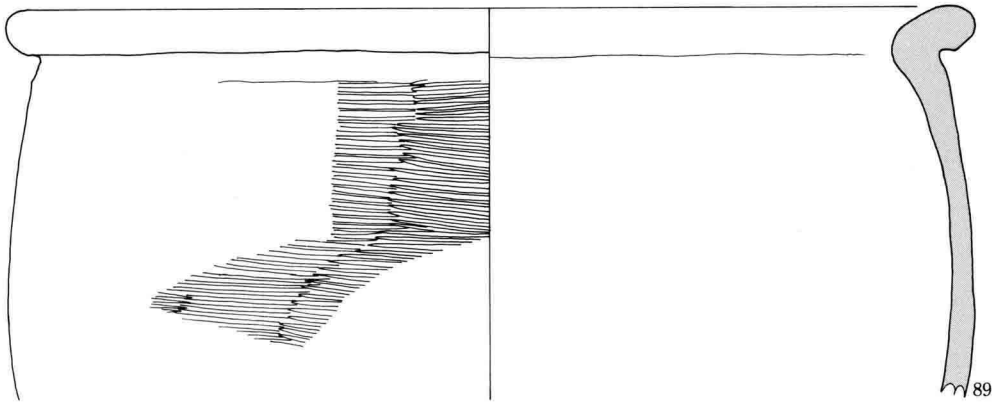
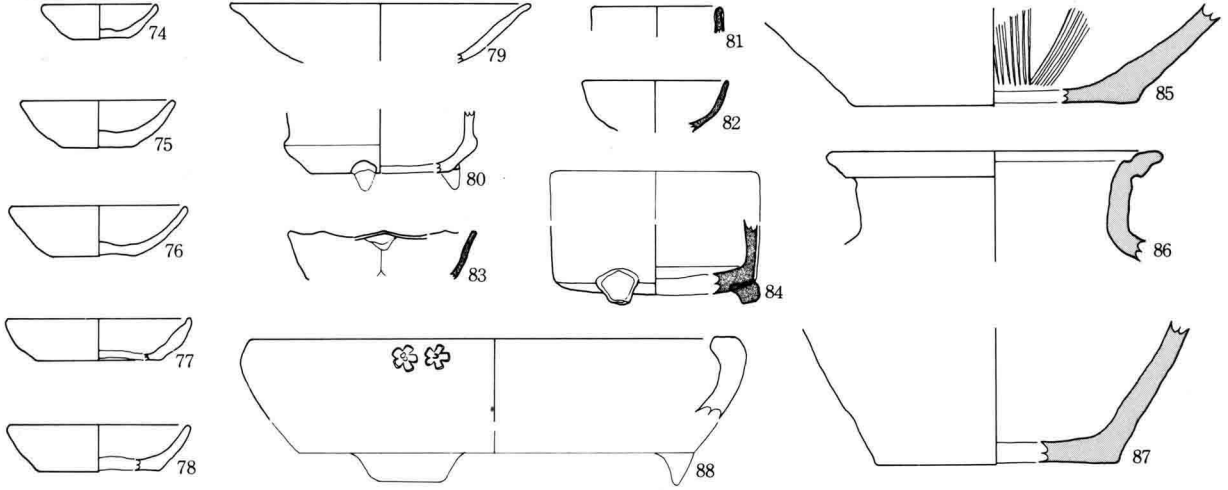
31号土壙 (22図142~149)

142~147は土器皿である。142は口縁にススが付着し燈明皿と思われる。148は龍泉窯系青磁の折縁の坏である。149は内耳鍋の口縁である。やや内弯しながら外反し、端部が面取りされる。

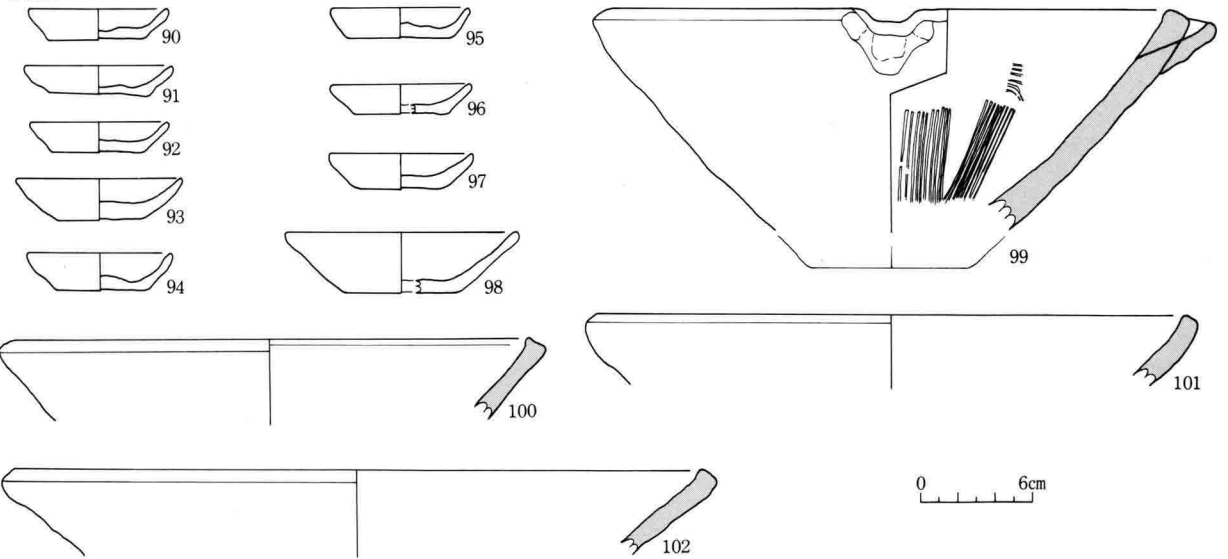
S K25ニ



S K25'大



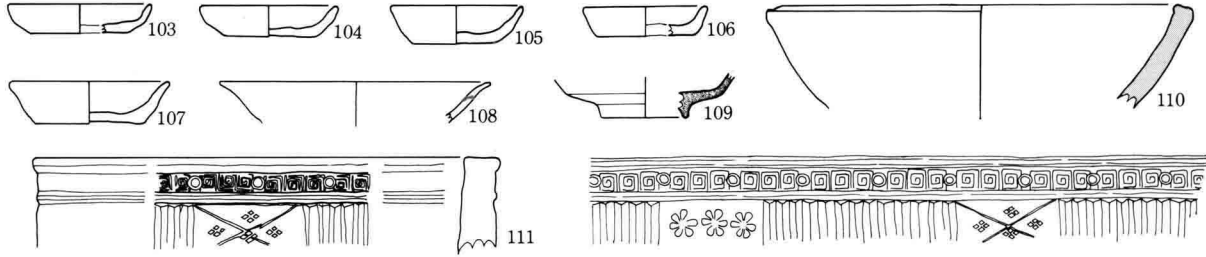
S K26



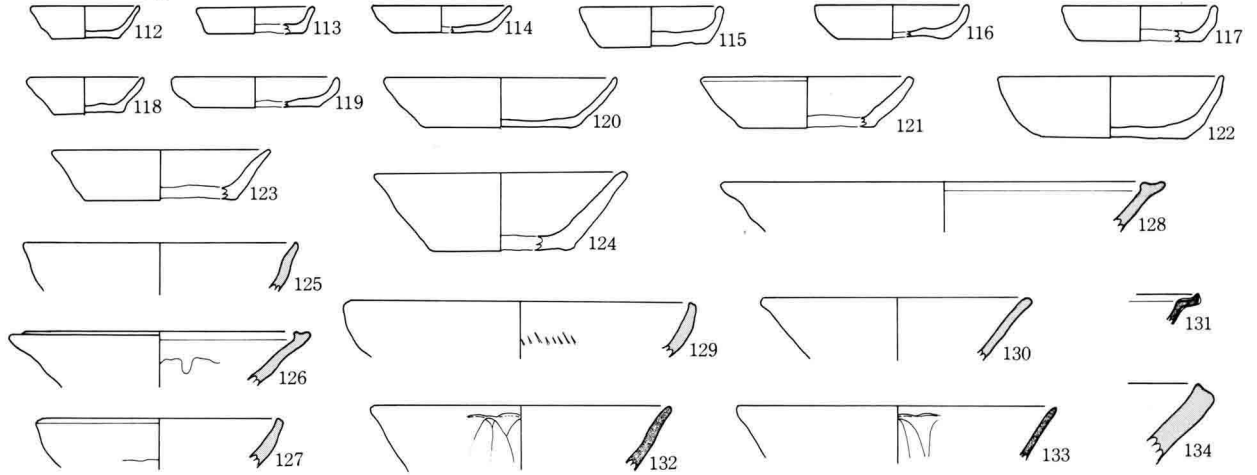
0 6cm

21図 焼物実測図2

S K27・28



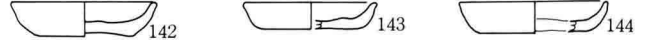
S K28東ビット群



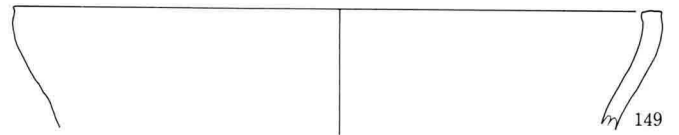
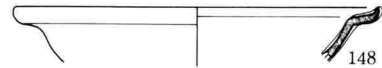
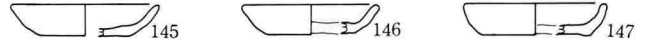
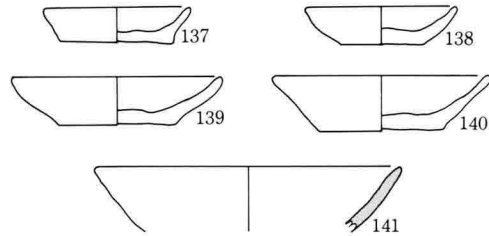
S K29



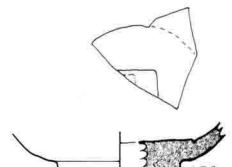
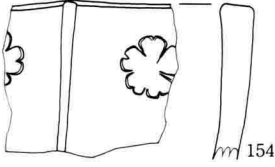
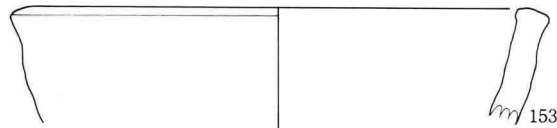
S K31



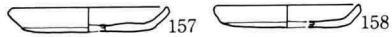
S K30



S K33



S K32



S K34



22図 焼物実測図 3

33号土壙 (22図150～156)

150～152は土器皿である。153・154は浅鉢形の火鉢である。153は比較的厚く端部が面取りされる。154は外面端部から縦方向に押圧を加え、平面形で輪花状を呈す。外面に菊花文のスタンプが押捺される。155・156は龍泉窯系青磁の碗で、156の底部内面にはスタンプが押捺される。

32号土壙 (22図157～159)

157・158は手づくね土器皿である。口縁は面取りされる。口縁部のみではロクロ調整と区別できない。159は土器皿である。

34号土壙 (22図160～166)

160～166は土器皿である。163は口縁にスガが付着しており燈明皿と思われる。法量より大小2種に分けることができそうである。

35号土壙 (23図167～170)

167～169は土器皿である。170は珠洲系の須恵質摺鉢で、口縁端部が広く面取りされる。

38号土壙 (23図171～177)

171～173は土器皿である。174は東海系捏鉢の口縁部で、端部が肥大化する。175は内耳鍋の底部で丸底になると思われる。176は龍泉窯系青磁蓮弁文碗である。177は須恵質の摺鉢である。口縁が大きく内弯し、端部が面取りされる。体部下半には指頭圧痕が残り、内面には間隔を空けて10条単位の摺目が施される。

39号土壙 (23図178～181)

178～180は土器皿である。181は龍泉窯系青磁碗である。

40号土壙 (23図182・183、24図184・185)

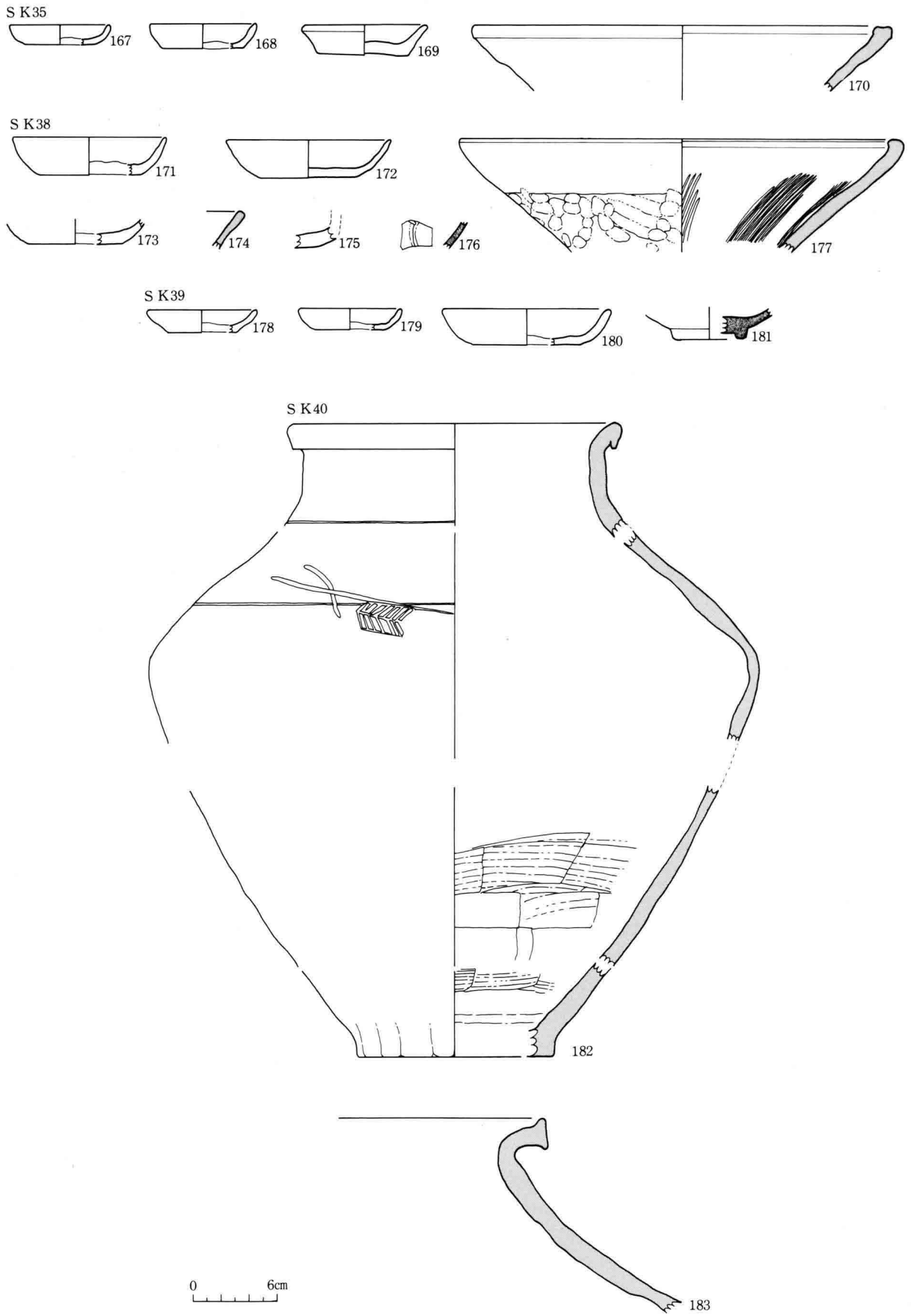
182・183は常滑の甕である。182は口縁が折りまげられる。体部上半には沈線が2条いれられ、線刻がなされる。183も口縁端部が折り曲げられ、広く面取りされる。182が13世紀代、183は14世紀代におけそうである。184は古瀬戸の大型の平碗で、灰釉が掛けられる。185は風炉である。破片より全体を復元した。直立した口縁には2条の隆帯の間に雷文のスタンプが押捺される。同じような文様帯が体部中央にもつけられる。文様帯の間に三葉状の円孔があげられる。底部に獣脚状の3足がつけられる。

42号土壙 (24図186～195)

186～189は土器皿である。190は古瀬戸の縁釉小皿、191は内面底部まで灰釉が施される古瀬戸の皿である。193は古瀬戸折縁の深鉢で、灰釉が掛かる。194は古瀬戸の大型の平碗で、灰釉がかかる。192はいわゆる「口冗げ」の白磁坏である。195は珠洲系の須恵質摺鉢で、9本単位の摺目が間隔を空けて施される。

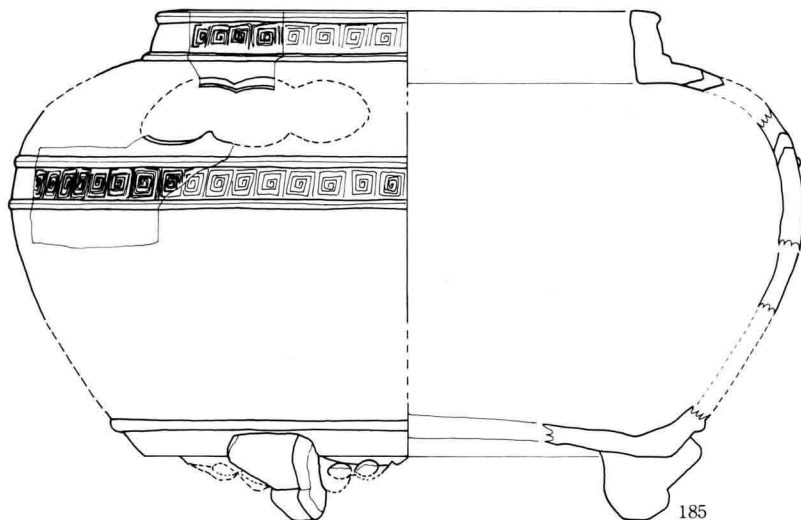
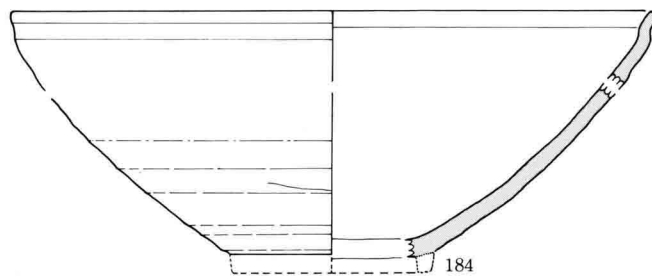
43号土壙 (24図196～203)

196～198は土器皿である。199は古瀬戸卸皿で灰釉が掛けられる。200・201は古瀬戸折縁の深鉢で、いずれも

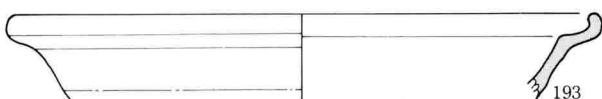
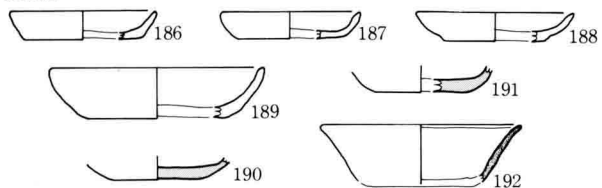


23图 烧物実測図4

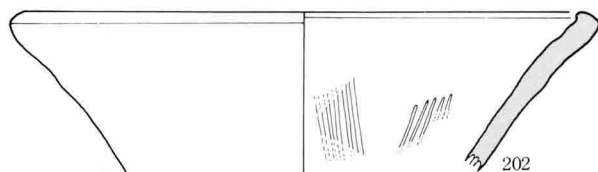
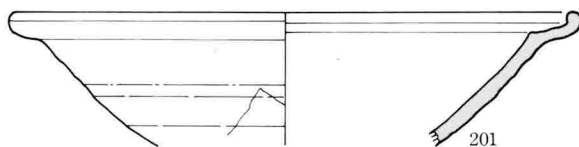
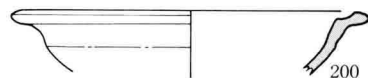
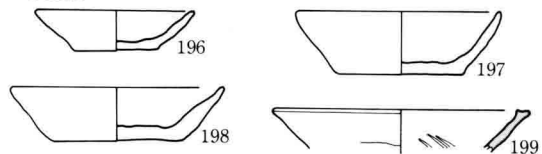
S K40



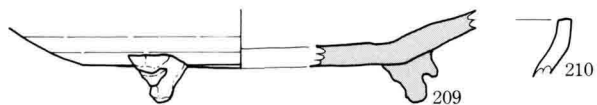
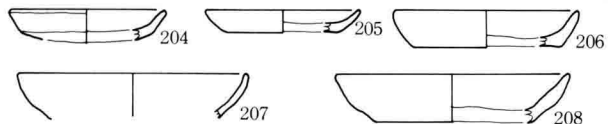
S K42



S K43



S K44·45



0 6cm

24图 烧物实测图 5

灰釉が掛けられる。202は珠洲系の須恵質摺鉢である。口縁がやや内弯し面取りされる。203は珠洲の壺で、口縁端部は面取りされる。外面は上部が横方向のタタキ、下部は矢羽根タタキがなされる。

44・45土壌 (24図204～210)

204は手づくね土器皿、205～208は土器皿である。209は古瀬戸の折縁深鉢の底部で、脚がつけられる。210は内耳鍋で、大きく外反し直線的に立ち上がる口縁をもつ。

46号土壌 (25図204～213)

204～209は土器皿である。204は口縁にススが付着しており燈明皿と思われる。210は古瀬戸折縁深鉢の底部と思われ、灰釉が掛けられる。211・212は同安窯系青磁碗である。213は珠洲の壺であり、やや外傾して端部を広く面取りする口縁をもつ。体部上半には横方向のタタキ、下部は矢羽根タタキがみられる。

47号土壌 (25図214～222)

214～222は土器皿である。法量より大小2種に分けることが可能である。

48号土壌 (25図223～225)

223・224は土器皿である。225は白磁碗で、内面が一段低く凹む。

49号土壌 (25図226・227)

226は土器皿である。227は古瀬戸卸皿で、口縁が強く折り曲げられ、鉄釉がかけられる。

52号土壌 (25図228～231)

228・229は土器皿である。228は口縁にススが付着しており燈明皿と思われる。230は古瀬戸天目茶碗で鉄釉が掛けられる。削り出し高台で、底部中央に糸切痕が残る。231は古瀬戸平碗で灰釉が掛かる。削り出し高台である。232は尾張産の山茶碗と思われる。

53号土壌 (25図238～246)

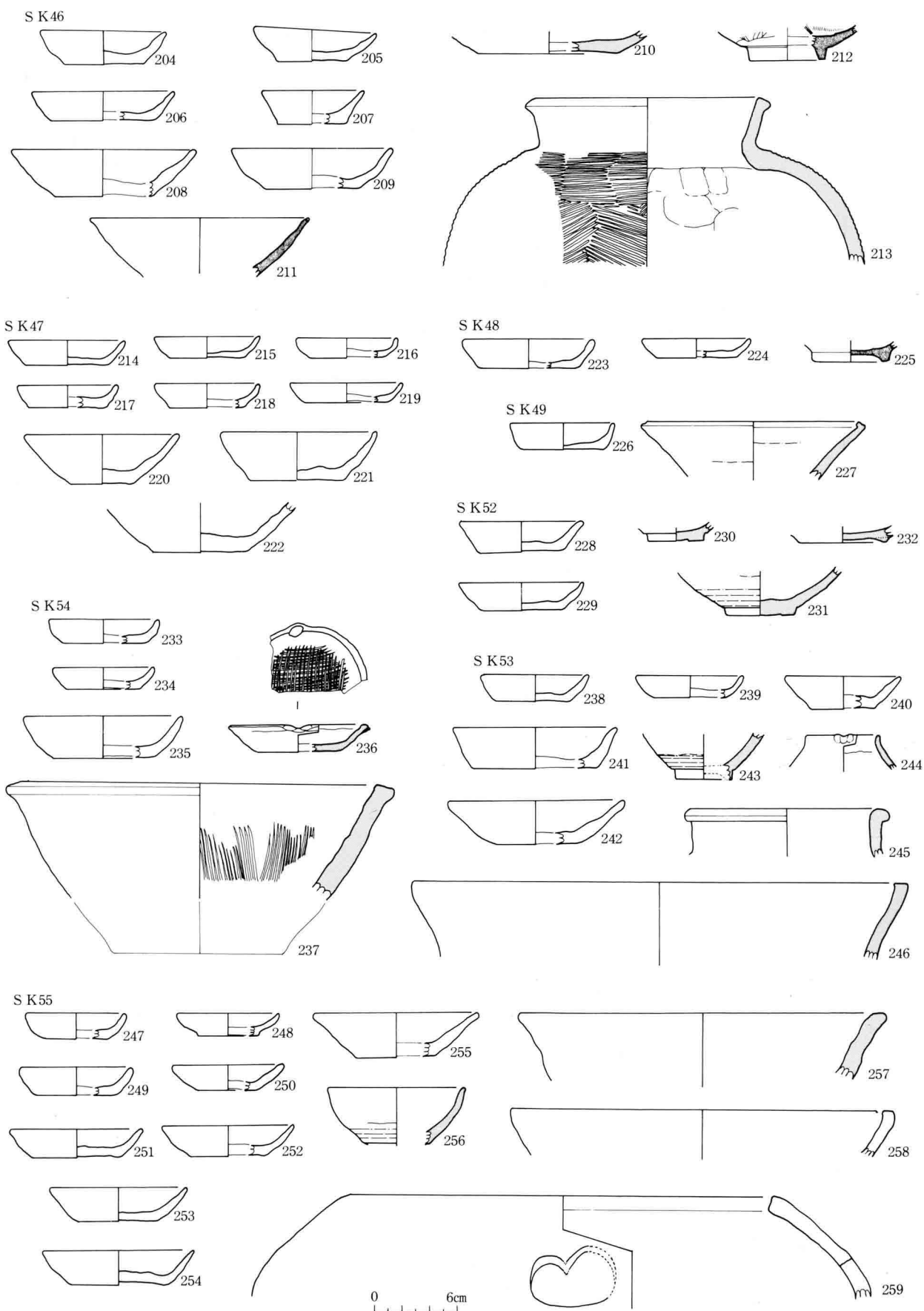
238～242は土器皿である。243は古瀬戸天目茶碗で鉄釉が掛かり、削り出し高台である。244は古瀬戸の小型壺で口縁端部を折り曲げたような片口がつけられる。外面と内面上部に鉄釉が施される。245は中津川産の壺である。246は内耳鍋で、大きく外反し端部がやや内弯して立ち上がり、面取りされる。

54号土壌 (25図233～237)

233～235は土器皿である。236は小さな片口がつく古瀬戸卸皿で、口縁内外面に灰釉が施される。237は珠洲系の須恵質摺鉢である。口縁はほぼ水平に仕上げられ、12本単位の摺目があまり間隔を空けず施される。

55号土壌 (25図247～259)

247～255は土器皿である。256は古瀬戸天目茶碗である。257は珠洲系の須恵質摺鉢である。口縁は外反し端部は水平に仕上げられる。摺目は9本単位でほとんど間隔を空けず施される。258は内耳鍋である。口縁は外反し



25图 烧物实测图 6

端部ちかくでやや内弯気味になり、端部は面取りされる。259は土師器風炉である。内傾する口縁は端部は面取りされ、三ツ葉状の透かしがはいる。外面はヨコヘラミガキ、内面はヨコナデで仕上げられる。

56号土壌 (26図260～263)

260・261は土器皿であり、261は口縁にススが付着しており燈明皿と思われる。262は龍泉窯系青磁碗である。263は内耳鍋である。口縁は外開し端部ちかくでやや内弯し面取りされる。

57号土壌 (26図264)

264は内耳鍋である。体部は外反しながら開き、頸部ちかくでさらに外反し、口縁は内弯し端部は面取りされる。底部は欠損しているが底部に向ってゆるやかに下がるため、丸底になる可能性がある。

60号土壌 (26図265～269)

265・266は土器皿である。267は古瀬戸皿であり、口縁端部は水平に仕上げられ、灰釉が掛けられる。268は古瀬戸折縁深鉢の口縁で灰釉がかかる。269は珠洲系の須恵質摺鉢である。口縁がやや内弯し端部は水平に面取りされる。摺目は間隔を空けて施される。

63号土壌 (26図270～273)

270・271は土器皿である。272は土師器風炉である。185と同様の形態になると思われ、直立する口縁の外面には2本の隆帯が付され、その間には雷文のスタンプが押捺される。内面にも隆帯が1本つけられる。273は浅鉢形の火鉢であり、内外面ヘラミガキで仕上げられる。

64号土壌 (26図274～277)

274～276は土器皿である。277は内耳鍋にちかい胎土をもった土師器の浅鉢形の火鉢である。直立する口縁端部は水平に仕上げられ、両側に張り出す。内面に菊花文のスタンプが押捺される。

65号土壌 (26図278～281)

278は土器皿である。279は古瀬戸天目茶碗、280は古瀬戸平碗である。281は古瀬戸瓶子の口縁部で灰釉がかかる。

68号土壌 (26図282～286)

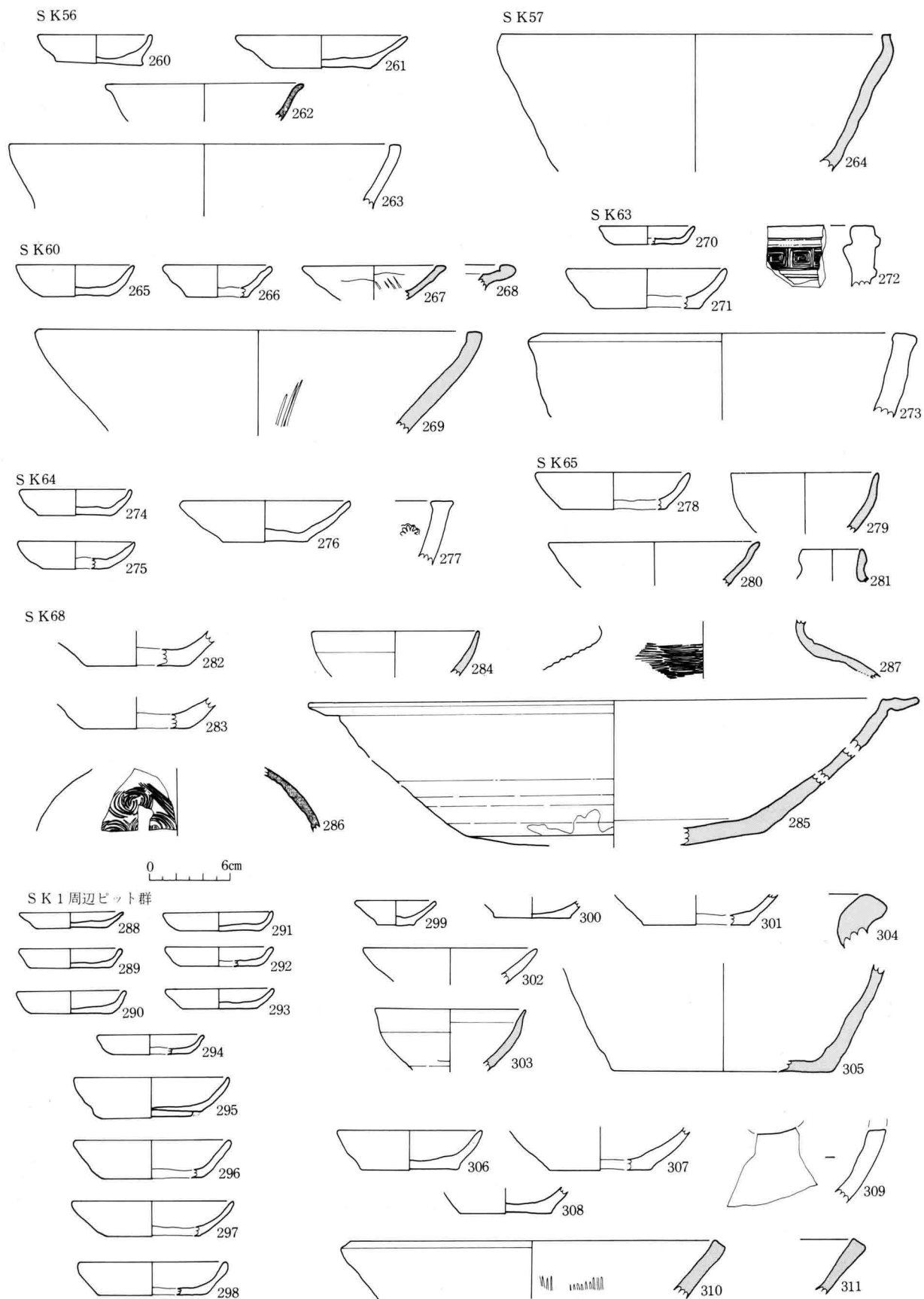
282・283は土器皿である。284は古瀬戸天目茶碗である。285は古瀬戸折縁深鉢で、灰釉が掛けられる。286は青白磁梅瓶の体部である。287は珠洲の壺であり、頸部以下に横方向のタタキ、矢羽根タタキがみられる。

1号土壌周辺のピット群 (26図288～311)

288～302・306～308は土器皿で、法量より2種に分けることができる。303は古瀬戸天目茶碗と思われる。304は珠洲の甕の口縁で、端部は丸く仕上げられる。305は茶褐色の光沢のある鉄釉が掛けられた古瀬戸茶壺である。309は土師器風炉の体部片であり、円形の透かしが入れられる。310・311は珠洲系の須恵質摺鉢である。ともに断面方形に仕上げられ、310は9本単位の摺目が間隔を空けて施される。

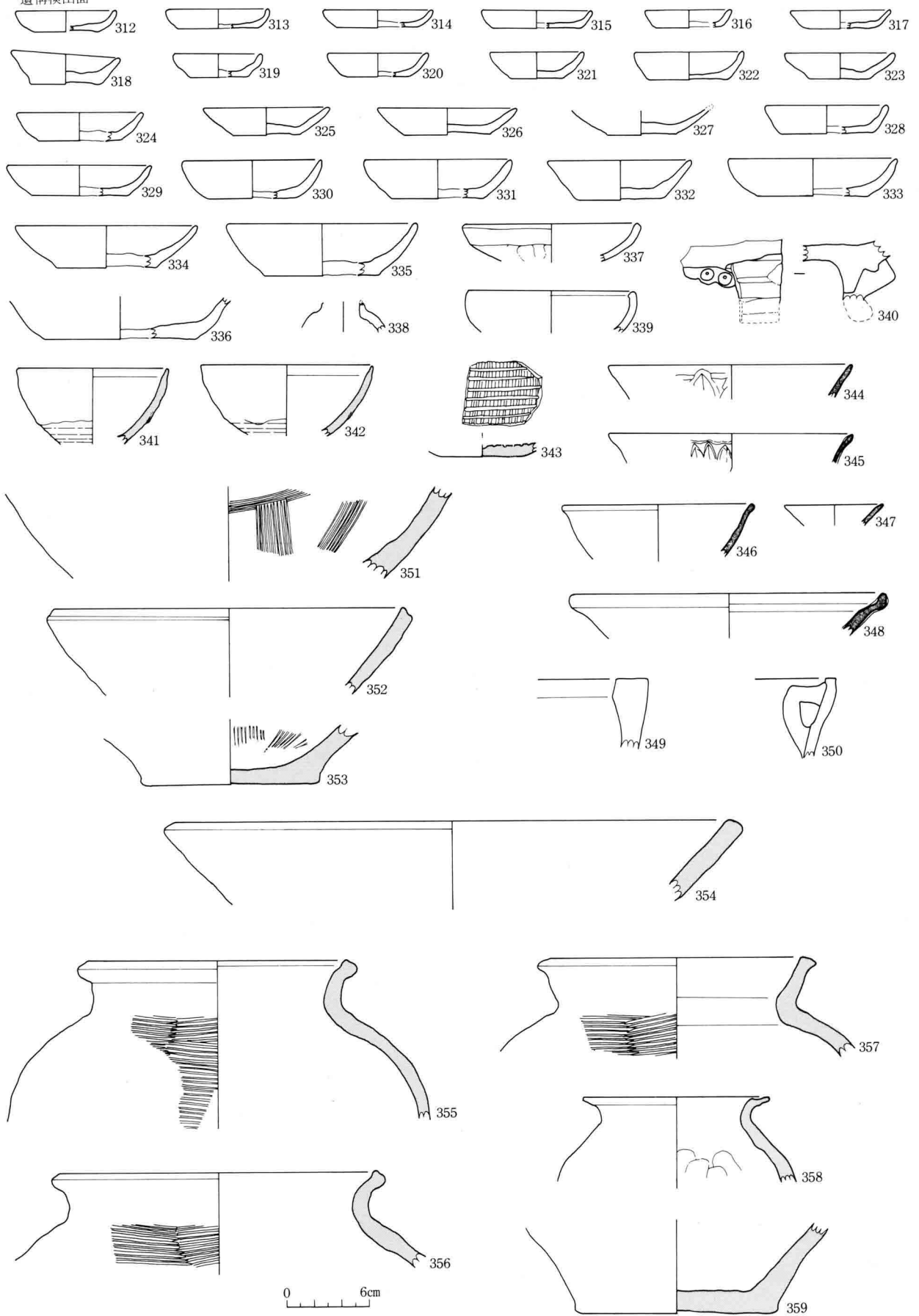
遺構外 (27図)

表土残土処理中、及び遺構検出時に採集したものを、遺構外出土として一括して取り上げる。ただしこれらは遺構検出の際に出土したものであり、遺構出土資料との接合などの検討作業が必要と思われるが行っていない。



26図 焼物実測図 7

遺構検出面



27図 検出面出土焼物実測図 8

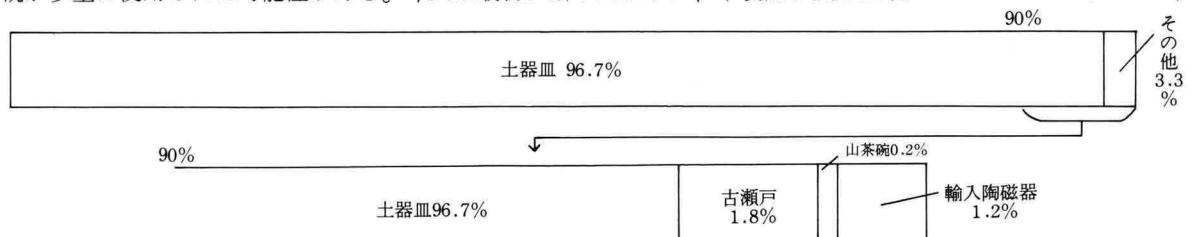
312～336は土器皿である。337は手づくね土器で、口縁が面取りされる。338は土師器の小型壺の可能性があり、339は口縁が大きく内弯し端部が面取りされる土器皿である。340は185と同様な形態をした土師器風炉の脚部である。341・342は古瀬戸天目茶碗である。343は古瀬戸卸皿で灰釉がところどころに掛けられる。344・345は龍泉窯青磁の蓮弁文碗である。346は同じく龍泉系窯青磁碗であるが無文で口縁端部は肥大する。348も同じく青磁の鉢である。347はいわゆる「口冗げ」の白磁の坏である。349は瓦質の浅鉢形の火鉢であり、全面ヘラミガキで仕上げられる。350は内耳鍋の把手部分である。口縁はやや内弯しながら立ち上がり、端部は面取りされる。把手は三角形をしており鉄鍋の形態にちかい。351～354は珠洲系の須恵質摺鉢である。351はやや内弯する体部をもち、12本単位の摺目が間隔を空けて施され、更にその上部に横方向に摺目がいれられる。352は口縁端部にU字状の凹みをもつ。355～357は珠洲の壺、358・359は常滑である。

2) 焼物に関する若干の考察

先に各遺構出土の遺物についてみてきた。次に今回出土した焼物について食膳具、調理具、貯蔵具、煮炊具、火鉢の順でみていきたい。この中で、古瀬戸・輸入陶磁器については食膳具がほとんどのため、食膳具の項でみていくことにする。また参考文献については、最後に一括して掲載する。

(1) 食膳具

食膳具全体をみると、土器皿が96.7%を占め、古瀬戸、輸入陶磁器が続く(28図)。器種別にみると、皿はわずかな皿をのぞき、ほとんどが土器皿によって占められる。それに対して碗には土器がみられず古瀬戸や輸入陶磁器によって占められる。単純に言ってしまうと、土器皿と陶磁器の碗という最も一般的な中世の食膳具構成である。ただし、土器皿の比率が圧倒的に高く、皿と碗の比率が40対1と非常に大きくなり、破損率が高いとしても日常生活にそのまま使われたとは信じられない数字である。用途として食生活以外で考えられるのは、燈明具としての使用がみられる。確かに口縁の油煙が付着したものがいくつかみられるが、その比率は10%にも満たない。他の用途、すなわち宴会用の器としての「かわらけ」の機能を考えたい。ただしすべてが宴会用と考えるのには飛躍があり、日常の食生活にも使用された可能性は十分にある。土器皿の内面を観察しても摩耗している場合は少なく、極端に言えば一回限りの使用としか考えられない場合が多い。今回の多量の出土が、多量の消費の結果であることは確かであり、本遺跡すなわち館が多量の「かわらけ」を使う宴会が頻繁に催された場所と考えられるのではないかと。当時の宴会が、身分関係を最も象徴的に示す場であり、政治的にも重要な意味を持つ場であったことは言うまでもない。すなわち、現在対比できるような資料がないのが残念であるが、今回出土した土器皿の量は、この「居館」の力の強さを示しているのではないと思われる。碗についてみると、陶磁器のみで土器皿に比べて、量は非常に少ない。また、その中の古瀬戸は天目茶碗、平碗であり、日常の食生活に使用されたとは考えられないものである。このことから碗が食生活の中で少ないと単純には言えない。この時期は、漆器碗が多量に使用された可能性がある。今回は最初に断ったように、木製品が残る土壤ではなかったと考えられ、

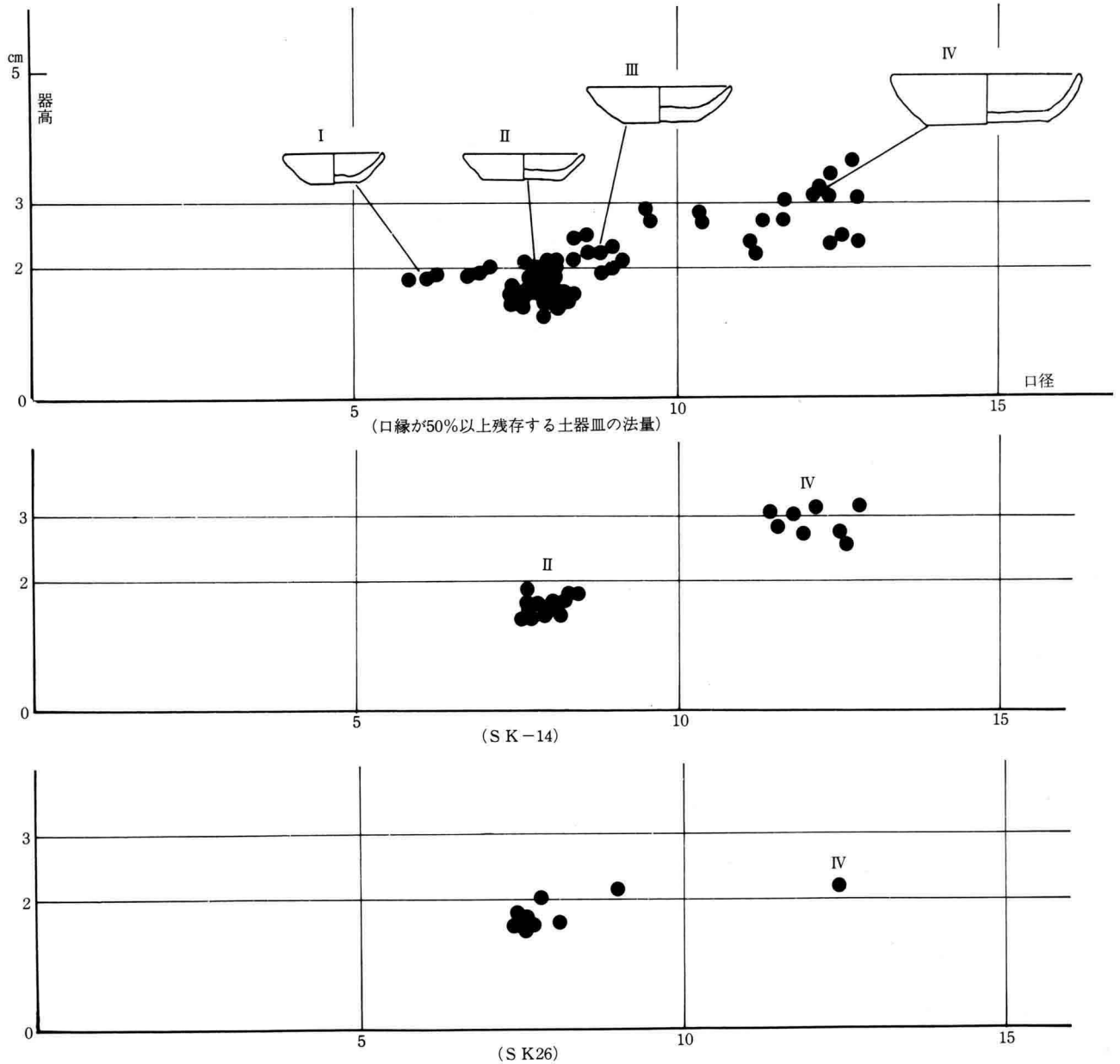


28図 食膳具の比率

陶磁器の碗を越える量の漆器が存在したことも否定できない。

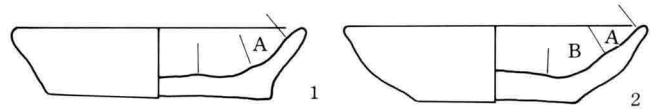
土器皿

量が最も多く、前頁の図に示すように食膳具の中で圧倒的な比率を示す。調整技法にはロクロ（回転台）と「手づくね」の2種が存在し、量的には前者が圧倒的に多い。比率で示せば後者は1%未満になるのは確実である。この2種の手法の存在は以前から指摘されており、松本平では手づくねからロクロへと大きな流れがとらえられようとしている。当遺跡の量的な比率をみると、移行期というとらえができそうであるが、まだ手づくねの位置づけができていない点などから速断はさけない。手づくねの土器皿は量的にも少なく、全体の形態がわかるものが少ないためはっきりしない面が多いが、口縁端部を面取りすること、体部のナデが非常にロクロ調整にちかく見分けが難しい点などが特徴としてあげられる。ロクロ調整の土器皿について詳しくふれてみたい。まず口径、器高が実長として計測できた法量分布が第29図（上）である。これを見ると、次のように分けることができる。



29図 土器皿法量分布図

- I群 口径6cm前後、器高2cm程度
- II群 口径7.5cm～8.5cm、器高1.2cm～2cm
- III群 口径8cm～9cm、器高2～2.5cm
- IV群 口径11cm～13cm、器高2～3.5cm



30図 土器皿の形態

以上のI～IV群に分けることができる。更に細分できる可能性もある。また比較的まとまった量が出土した、14号土壌と26号土壌の法量を示したのが第29図(中・下)である。これを見るとII群とIV群には明確に分けられる。この2種が量的にも多く、主体を占めるものと思われる。次に形態をみてみたい。大きくみると小法量、大法量共に共通しているが、底部から大きく外反する形態(第30図1)と内弯しながら立ち上がる形態(2)に大別することができる。底径は前者が大きく、後者は小さい。そのため口径をあわせる必要性から、体部を直線的に立ち上げたり、大きく開くように立ち上げたと考えことができ、この形態差にはあまり意味がないのかもしれない。次に口縁の形態である。面取りするもの、そのまま外に引き出すものの2者が存在するように見える。しかしはっきりと分離することは難しく、中間の形態がいくつか存在する。3番めにあげたいのは、強いナデをいれる部分である。内面の底部と体部の境(第30図のBの部分)にはほとんどの場合、強いロクロナデがはいり、凹みがつくられる。また体部(第30図のAの部分)にもBの部分ほどではないが強いナデが施こされ、浅い凹みがつけられる。これも大きな特徴である。次に底部内面中央部分はロクロナデのまま中央部分が盛りあがっている状態と、中央部を横方向のナデによって盛り上がりをつぶす状態の2者がある。底部裏面をみると、すべて糸切痕で残されており、ヘラケズリ等で再調整されたものはみられない。また様に板状圧痕が強弱のちがいはあるにしろみられる。胎土については、観察するといくつかのちがいがみられるが、類型化することはできない。また燈明皿として使用された土器皿がいくつかあることは最初に触れた。口縁端部にススが付着しているところから判断をした。使用された法量をみると、一定ではなさそうである。

以上、いくつかの観点から土器皿についてみてきた。それらから得られた要素よりいくつかの種類に分けることが可能である。この分類が、時間差、生産地の差などに起因するのか、今回の資料から考えることはできない。今後の課題である。

古瀬戸

食膳具・調理具・貯蔵具がみられる。食膳具についてみると、鉢の比率が高いが、大型品のため破片数のみ多く同一個体の可能性が高い(31図)。その口縁は端部が水平に折り曲げられ、更に直角にちかく折り曲げられるものもみられる。また底部には脚がつけられる。いずれも灰釉が掛けられている。碗についてみれば天目茶碗と平碗の2種がみられ、前者の量が多い。天目茶碗はいずれも鉄釉が掛けられており、口縁端部を強く押さえそのまま立ち上げる。高台はいずれも削り出しで、端部に糸切痕を残すものもみられる。平碗はいずれも灰釉が掛けられる。法量にはバラツキがみられ、184のように大型のものまでみられる。高台はいずれも削り出し高台である。卸皿の量が比較的多い。形態的には、129・127のように体部端部が面取りされるだけのものと、128・126のように端部に強く凹線がはいるものの2種が存在し、前者が古相を示す。皿類についてみると、その量の少ないのが特徴である。わずかに42号土壌に2点みられるのみで、古瀬戸後期様式の末期に多い縁釉小皿はほとんどないといってよい。これらの古瀬戸の製品は、中期様式から後期様式の段階に含まれる。このことから14～15世紀前半の巾にほぼおさまると思われる。

天目茶碗30%	平碗26%	鉢41%
---------	-------	------

皿3%

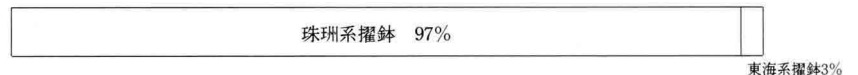
31図 古瀬戸食膳具の比率

輸入陶磁器

青白磁梅瓶（286）と青磁香炉（84）をのぞくとほとんどが食膳具である。最も多いのが龍泉窯系青磁碗であり、蓮弁文を施したものが多い。しかし蓮弁は縞を失っており、新しい様相を示す。また後出する青磁碗の特徴である雷文帯を口縁にもつ例はみられない。このように龍泉窯系青磁のみをみると、14世紀代におさまりそうである。ただ同安窯系青磁が2片（211・212）みられ、12世紀代も若干みられる。白磁をみると12世紀～13世紀を特徴づけるⅣ・Ⅴ類碗はみられず、いわゆる「口はげ」の白磁碗（Ⅺ類）がみられ、この点からみると13世紀後半以降となる。また白磁多角碗（83）がみられるが、15世紀前半に比定されよう。

(2) 調理具

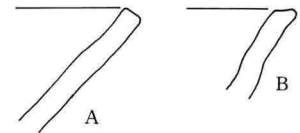
卸皿については「古瀬戸」の項で扱い、大型の製品について取り上げてみたい。



捏鉢と摺鉢の2種がある。捏鉢はすべて

32図 大型調理具産地別比率

東海産であり、摺鉢は珠洲系として考えられている。両者の比率は32図のようで、摺鉢が圧倒的に多い。従来、鋤柄俊夫氏によって指摘されているような、千曲川水系の状況であり、珠洲系の摺鉢圏としてとらえられる。ただ貯蔵具についてみ

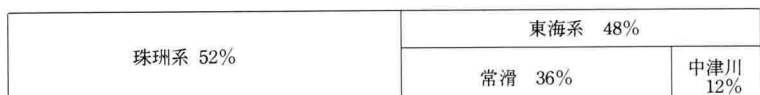


ると、東海系と珠洲系の比率はほぼ1：1の比率である。大きなちがいがみられる。33図須恵質摺鉢の口縁形態このことは、捏鉢と甕・壺などの貯蔵具が同じ流通ルートにのっていなかったことを示しているのではないかと。捏鉢の付加価値が低く、遠く東海地方から運搬したのでは、珠洲系の摺鉢と競合できなかったものと思われる。東海系の捏鉢は174の1点を図示したが口縁の端部の形態より13世紀から14世紀の前半代に位置づく。摺鉢は土師質や瓦質の焼成もいくつかみられるが、須恵質が圧倒的に多い。須恵質のものは、全体の形態がわかるものはないが、法量にバラツキがみられそうで口径も一定でない。片口が付くのが一般的である。内面の摺目には、70・99・177・195のように間隔をあけて内面中央に向って施されるものと、9・237のように間隔を空けずに施されるものの2種に分けることができる。なお70・99・351のように、口縁ちかくに摺目と同じ条数で、横方向に施される例もある。今まで管見にふれておらず、類例の増加を待ちたい。口縁の形態をみると大きく2種に大別することができる（33図）。Aは端部を面取りし、断面長方形を呈する。Bは口縁の端面を水平に仕上げる。摺目との関連ではAが間隔をあけており、Bが比較の間隔が狭い。なお、口縁端部の平端面を広くとり、波状文など加飾した牟礼バイパスC地点出土例は今回認められない。吉岡康暢氏の珠洲窯の編年と対比すると、摺目は粗から密への変化がみられるとされる。また口縁の形態もAからBへの変化が考えられている。主体を占めるAについては第Ⅲ期（13世紀後半）、またBについては第Ⅳ期（14世紀代）となりそうである。また口縁部の加飾が施された例がないことから、15世紀までは新しくならないと思われる。

(3) 貯蔵具

生産地別に分けると、珠洲系と東海系（常滑と中津川）となる。その比率は34図に示したようにほぼ同率である。この比率が何を示すのか、対比する資料を持ち合わせていない。ただ東海系の比率が高いのは注目される。ここでは全体の形態がわかるものがないので、若干の特徴と年代についてふれておくことにする。

珠洲についてみると、89の甕は口縁の形態から第Ⅳ期（14世紀代）に、壺では203は第ⅡないしⅢ期（13世紀代）、213



34図 大型貯蔵具産地別比率

はⅣ期（14世紀代）、355・356はⅢ期（13世紀後半）の所産であろう。総体として13～14世紀の範囲にはおさまりそうである。ただし焼成についてみると、摺鉢にみられるような軟質の製品はみられない。調理具のみの生産窯が存在する可能性も考えられる。常滑については口縁の形態から考えることにする。182は14世紀代前半、183は14世紀代後半、73は13世紀代、47は13世紀代前半におくことができそうである。

(4) 煮炊具

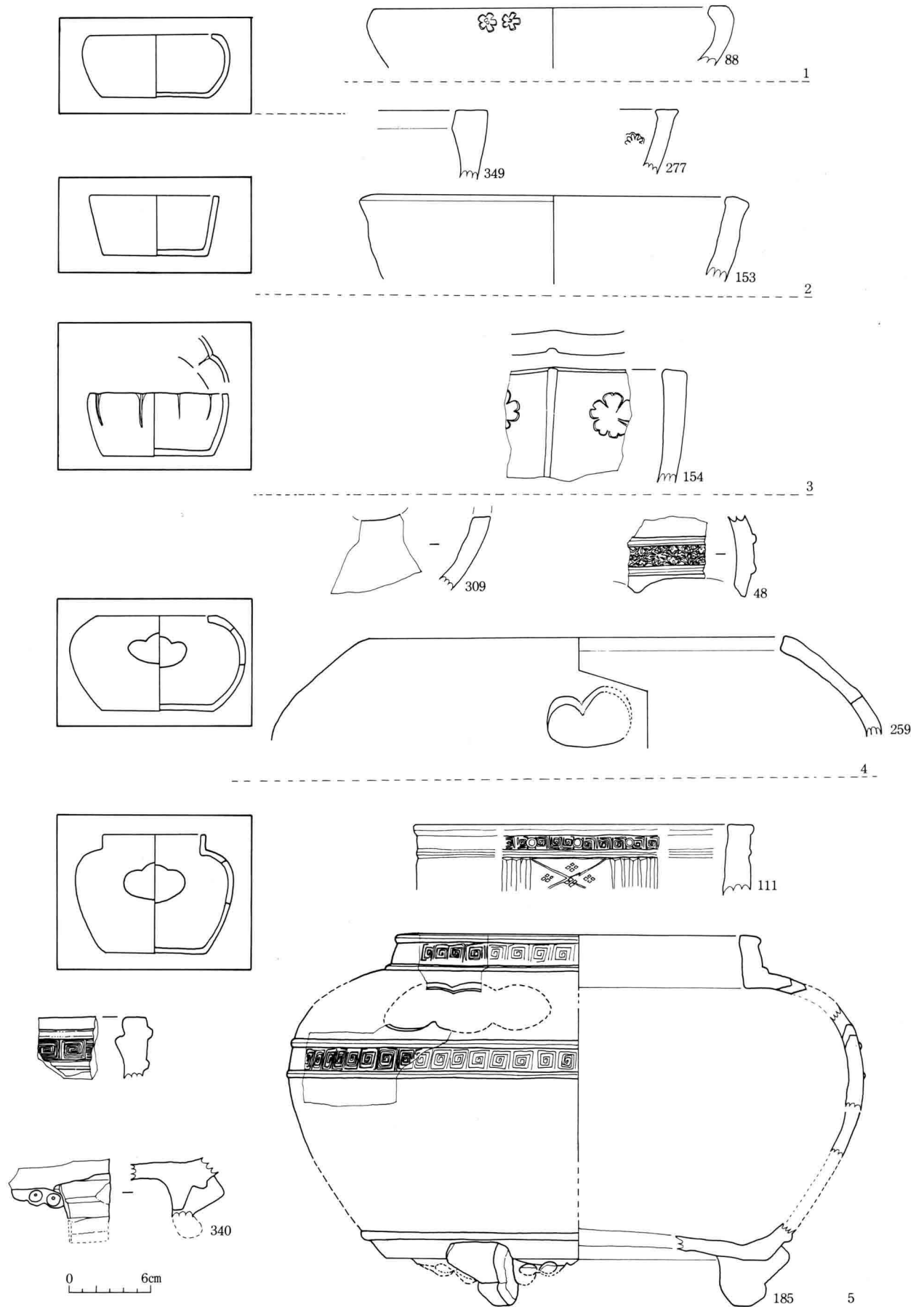
中世の煮炊具としては内耳鍋が代表される。本遺跡でも例外にもれず出土している。しかし、他の遺跡での量と比較すると非常に少ない。伴出の陶磁器等の年代からこれらの内耳鍋も13～15世紀前半と考えられそうである。従来その出現時期は問題がないが、最も古い時期に位置づけられ注目される資料である。全体の形態のわかるものはないが細かくその形態をみていきたいと思う。まず量の多い口縁についてみると、比較的強く外反し、口縁ちかくなるとやや内弯し垂直にちかく立ちあがる。端部は水平に仕上げられ内部に張りだす。把手（350）は一点の出土ではあるが、断面三角形を呈する。底部の破片が少ないが、264のように平底ではなく、やや丸底気味になると思われる。調整についてみると口縁端部ちかくに、強く丁寧なヨコナデが施こされ、外反部分まであらゆるヨコナデがはいる。この形態をみると鉄鍋にちかい。特に把手の形状は模倣しているとしか考えられない。ここでは煮炊具として内耳鍋のみ取り上げたが、13～14世紀は煮炊具がはっきりしない時期であり、鉄鍋の存在が想定されている。今回の資料は、鉄鍋から鉄鍋とその模倣の内耳鍋段階への変化を考えさせる好資料である。

(5) 火鉢

比較的多く出土している。当地域ではこれまで出土例が少なく、今回の出土遺物の中でも注目される一群である。焼物の種類としては土師器と瓦質の2種がある。総数30点のうちほとんどが前者である。全体の形態がわかるものは少ないが、形態についてみていきたい。分類については山村信榮氏の研究を参考とし、35図に破片と対比して模式図を掲げる。大きくは2種に分けることができ、1～3は浅鉢型、4・5はいわゆる「風炉」である。この時期、火鉢として有名なのが「奈良火鉢」がある。ただし瓦質の製品はみられないため、その製品が流通していたとは言えない。しかし花菱文や菊花文・雷文などの加飾技法や、形態が共通する点などからみると、「奈良火鉢」の影響を強く受けて生産されたことはまちがいないであろう。その生産地については言及する資料は持ち合わせていない。またここにみられる形態差が、時間差に結びつくのかははっきりしない。多量の火鉢類が何を意味するのか考えてみたい。現在まで管見にふれた県内の類例は、佐久市大井城跡、飯山市大倉崎遺跡である。しかし現在行われている上信越自動車道関連の長野市内の調査でも発見例がいくつかあり、千曲川水系にその出土が集中していることがわかる。中世遺跡の調査例の多い松本平では出土がみられない。この分布は、珠洲系製品の分布と一致しており、北陸との関連が考えられそうである。出土遺跡の性格をみると、居館跡あるいは城跡からの出土がほとんどである。一般集落の調査例が少ない現在、断定するのは危険であるが、館などの支配者層にとって必要な製品と考えることができそうである。今後、出土例が急増していくと思われ、遺跡の性格を考えるうえで、注目される器種といえよう。

3) 遺物群の時間的位置

それぞれの焼物についてみてきた。その中でいくつかの種類について、年代の限定を行ってきた。それらを照合することにした。上限となりそうなのは、同安窯系青磁碗の12世紀後半代である。ただし輸入陶磁器の主体は14世紀代である。珠洲系の摺鉢・甕・壺をみると、13～14世紀代である。古瀬戸系陶器は中期様式から後期様式を主体をおくか、縁釉小皿などの皿類の欠除から、15世紀前半代におさまると思われる。下限については、雷



35図 火鉢集成図 (遺物番号は共通)

文帯をもつ青磁碗がみられないことから、15世紀後半までにはおさまりそうである。総体としては13世紀代が若干あり、14世紀代～15世紀前半代に主体を置くと考える。

本来ならば、ここで焼物からみられる遺跡の性格を述べなければならない。ここまでいくつかの面から触れたわけであるが、はっきりとした性格は出てこない。理由としては前述したように該期の対比するような資料がまだ善光寺平ではみつかっていないことがあげられる。特に今回は居館跡ということ的前提にして論を進めたわけであるが、一般集落の様相との対比に沿って行えば、有効であったかもしれない。ただ、火鉢・「かわらけ」などは「居館」の性格を考える上で好資料である。今後、他の遺跡の調査が進むなかで、本資料の重要性が高まるであろう。

〔参考文献〕

（焼物全般）

- 鋤柄俊夫 1986 「中世信濃における陶磁器の産地構成と流通」『信濃』38-4
- 野村一寿 1990 「遺構・遺物の考察 中世土器・陶磁器」『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書—松本市内その1—総論編』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 原 明芳 1990 「80年代の研究成果と今後の展望 〈地域〉中部」『中近世土器の基礎研究』VI 日本中世土器研究会

（土器皿）

- 市川隆之 1989 「平安時代末期から鎌倉時代の土器皿」『吉田川西遺跡』（財）長野県埋蔵文化財センター
- 鋤柄俊夫 1988 「信濃における平安時代後期以降の土器様相」『東国土器研究』第1号
- 藤原良章 1988 「中世食器考 —〈かわらけ〉ノート—」『列島の文化史』5 日本エディタースクール

（古瀬戸）

- 藤原良祐 1984 「“古瀬戸”概説」『美濃陶磁歴史館報』III 美濃陶磁歴史館

（輸入陶磁器）

- 横田賢次郎・森田 勉 1978 「大宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4
- 森田朝子 1990 「80年代の研究成果と今後の展望 〈各論〉輸入陶磁」『中近世土器の基礎研究』VI 日本中世土器研究会

（東海系捏鉢）

- 鋤柄俊夫 1985 「中世信濃の東海系移入雑器—特に片口捏鉢を中心に—」『同志社大学考古学シリーズ』II 「考古学と移住・移動」

（常滑）

- 赤羽一郎 1984 「常滑焼」『考古学ライブラリー23』 ニューサイエンス社

（珠洲）

- 吉岡康暢 1989 「総論 珠洲古陶」『珠洲の名陶』 珠洲市立珠洲焼資料館

火鉢

- 菅原正明 1990 「瓦器」は何を語るか『中近世土器の基礎研究』VI 日本中世土器研究会
器研究会

- 山村信榮 1990 「太宰府出土の瓦質土器」同上

〔引用遺跡文献〕

牟礼バイパスC地点 長野市教育委員会 1986 『浅川扇状地遺跡群』

大井城跡 佐久市教育委員会 1986 『大井城跡（黒岩城跡）』

大倉崎遺跡 飯山市教育委員会 1989 『小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅰ』

3) 石製品

石 臼 (36図1～6)

5がほぼ完形の他は破片出土である。1は検出面、2は25ート号土壙、3は25ーロ号土壙、4は28号土壙、5は32号土壙西ピット、6は25ーイ号土壙からの出土である。すべて多孔質安山岩製である。1～3は上臼で、1と3には挽き木横打ち込みの長方形の穴がうがたれる。またイには芯棒受け・供給口が認められる。4～6は下臼で、5と6の中央に芯棒孔がうがたれる。臼の目は1と6が8分画、7は7分画になり、目自体は雑なU字型を呈する。6は他のものよりていねいに刻まれており受皿が付く。1～5は粉挽き臼で、6は茶臼であろう。

石 鉢 (36図7・8、37図10～13)

7・8は28号土壙からの出土で、やや張り出す台部を作り出す。10は4号土壙、11は23号土壙、12は25ーホ号土壙、13は25ーイ号土壙出土である。11・12は体部下半を幾分屈曲させ、底部を素直に仕上げる。13は大形のもので、口縁端部が丸味を帯びる点他と異なる。底部内面付近は使用のためか磨耗が著しい。多孔質安山岩製である。これらの石鉢は、須恵質の摺鉢、東海系捏鉢と同様に、調理具として使用されたと思われる。善光寺平をはじめとした千曲川水系に石鉢は分布するが、松本平をはじめとした中南信には類例はない。

凹 石 (36図9、37図15)

9は56号土壙、15は25ーイ号土壙出土である。楕円形の礫の上面に凹みが付せられる。使用のためか凹部は円滑である。9は安山岩製、15は砂岩製である。

硯 (37図18・19)

18は53号土壙、19は55号土壙よりの出土である。ともに石材は粘板岩である。18は全面が研磨されて仕上げられ、断面長方形で海の部分は長方形に掘りこまれる。脚が裏面の両側につけられる。19は扁平な自然石がそのまま利用され、海の部分以外は自然面を残している。

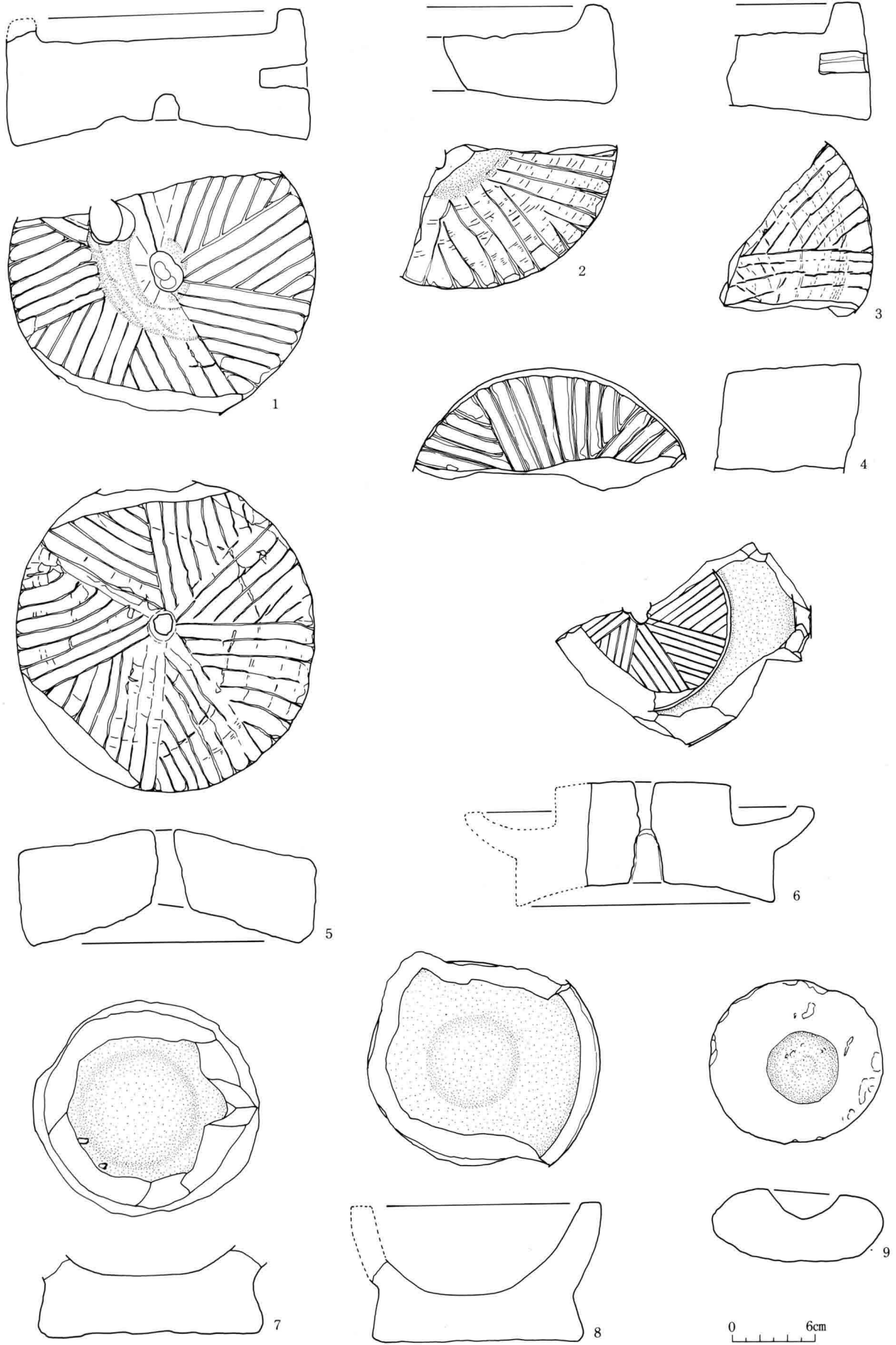
砥 石 (37図16・17)

16は14号土壙、17は54号土壙出土である。16は断面方形を呈し、全面に擦痕が認められる。本来この形態が使用された結果なのかは不明である。17の断面は扁平な長方形を呈し、一部自然面を残す。共に砂岩製である。

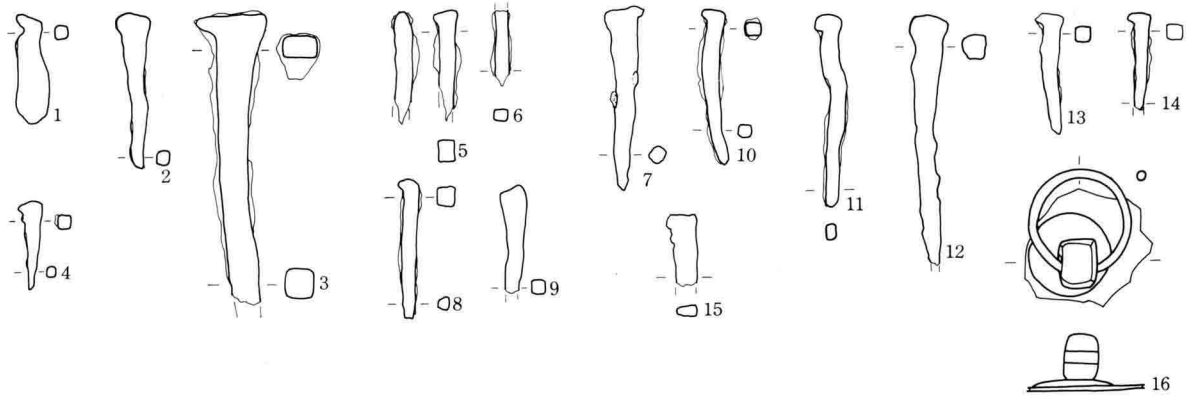
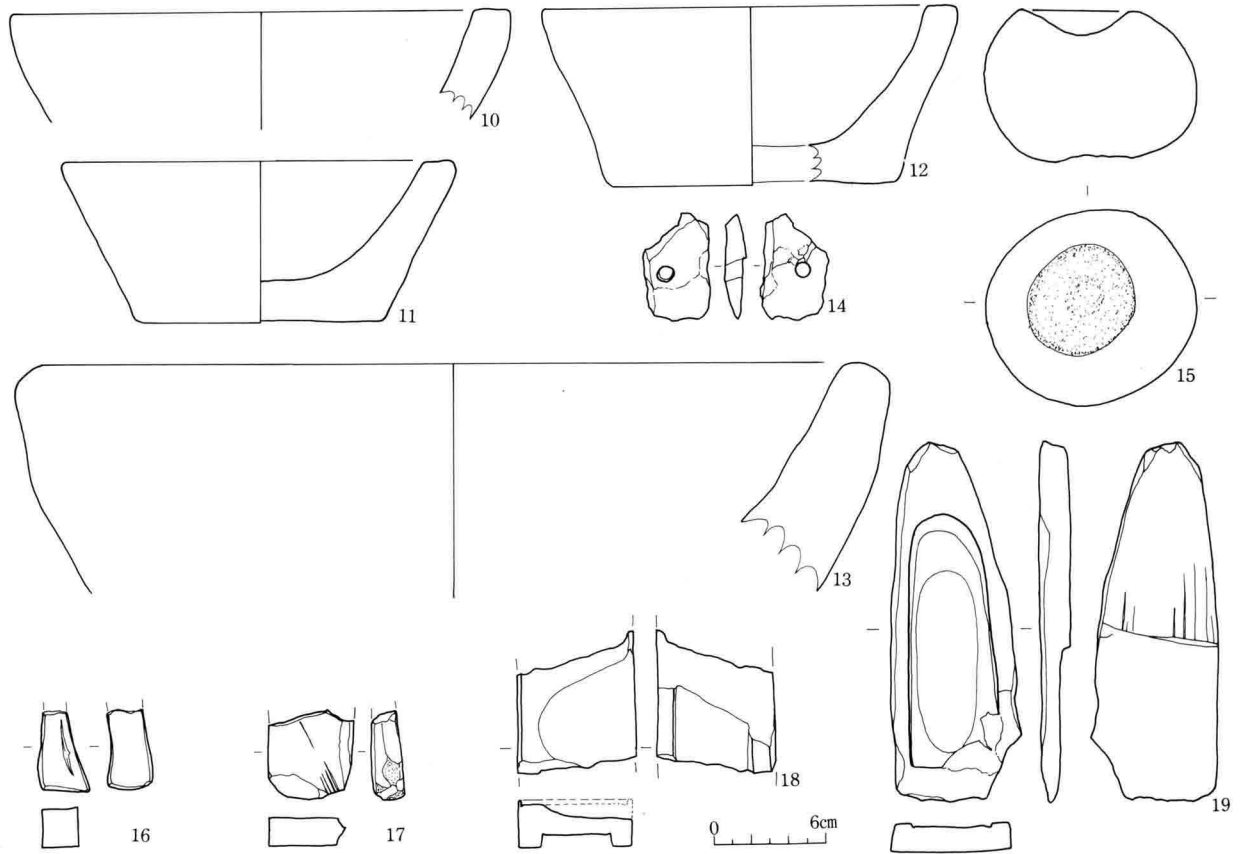
4) 金属製品

鉄製品 (37図1～15)

すべて釘と思われる。1は13号土壙、2・3は25ーイ号土壙、4は25ーホ号土壙、5・6は26号土壙、7は28



36図 石製品実測図



天聖元宝(1023年)
25-イ号土址

皇宋通宝(1039年)
5号土址

治平通宝(1064~67年)
40号土址

熙寧元宝(1068年)
21号土址

元豐通宝(1078年)
63号土址

元祐通宝(1093年)
40号土址

元豐通宝(1078年)
上面
以上左北宋

永樂通宝(明1411年)
25-ニ号土址

紹熙元宝(南宋1190年)
25-二号土址

0 2cm

37図 石製品・金属製品実測図、古銭拓本図

号土壙東ビット群、8は32号土壙、9は33号土壙、10は34号土壙、11は55号土壙、12～15は検出面出土である。まとまったの出土例はみられず、廃棄の結果と思われる。ただし釘がそのまま捨てられたとは考えられない。建築材や家具などに打ち込まれていたものが残存したものであろう。釘についてみると3のような大型品から、4のような小型品まで様々である。完形品が少ないためはっきりは言えないが、いくつかの寸法に分かれるものと思われる。

銅製品 (37図16)

27号土壙からの出土である。円板台座に乳部が付され、円環の引き手がつく飾り金具である。

古 銭 (37図下段)

9枚出土している。天聖元宝(1023年、25-イ号土壙)・皇宋通宝(1039年、40号土壙)・治平通宝(1064～67年、40号土壙)・熙寧元宝(1068年、21号土壙)・元豊通宝(1078年、63号土壙・検出面)・元祐通宝(1093年、40号土壙)の北宋銭、詔熙元宝(1190年、25-ニ号土壙)の南宋銭、永樂通宝(1411年、25-ニ号土壙)の明銭である。ただし()内の年号は鑄造年である。



1号土壤周边



4号土壤周边



14号土壤周边



18号土壙周边



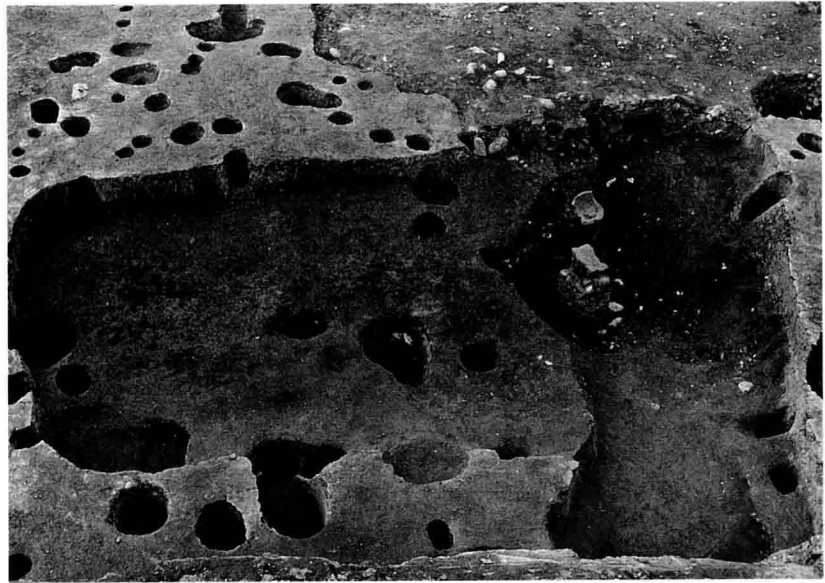
25号土壙周边(南)



25号土壙周边(北)



27号土壤周边



28号土壤周边



34号土壤周边



51号土壤周边



56号土壤周边

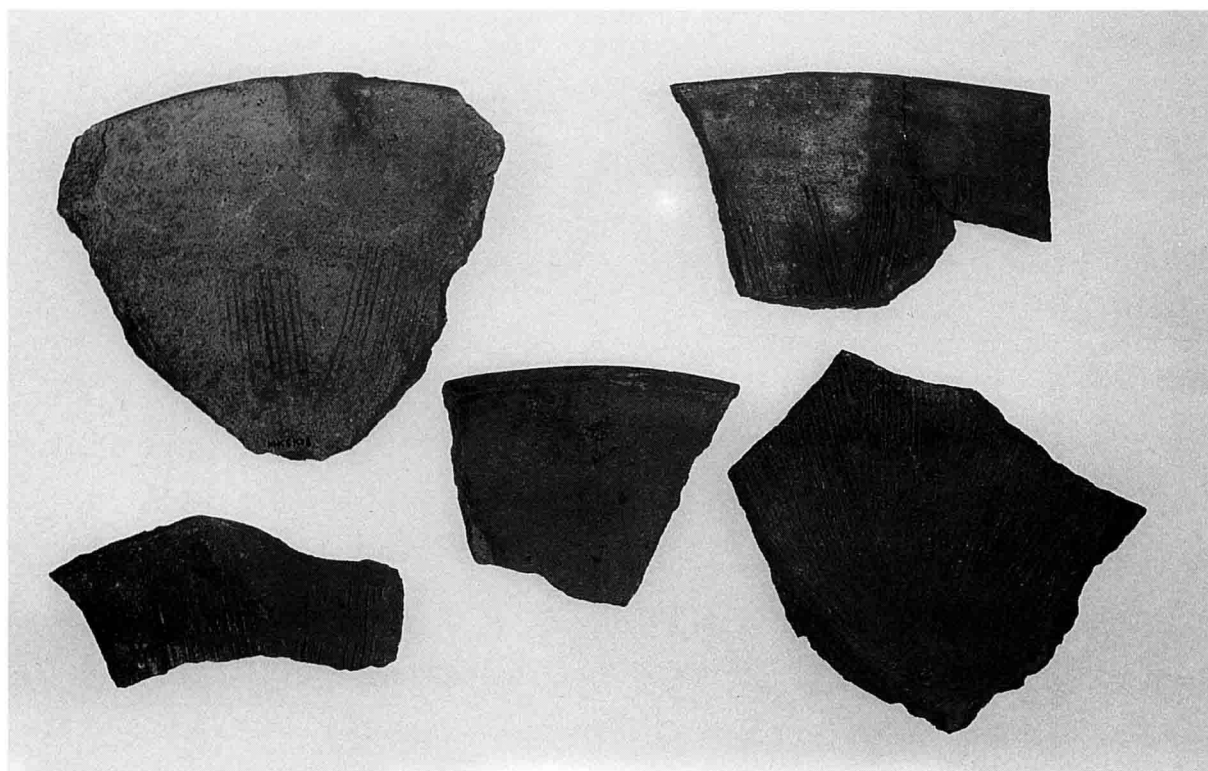


60号土壤周边





土器皿 (上段)28号土壙 (下段)26号土壙



擻鉢 (上左)26号土壙 (中)60号土壙 (上右)54号土壙
(下左)60号土壙 (下右)25-イ号土壙



火鉢 (左)33号土壙 (右)27・28号土壙



硯 55号土壤

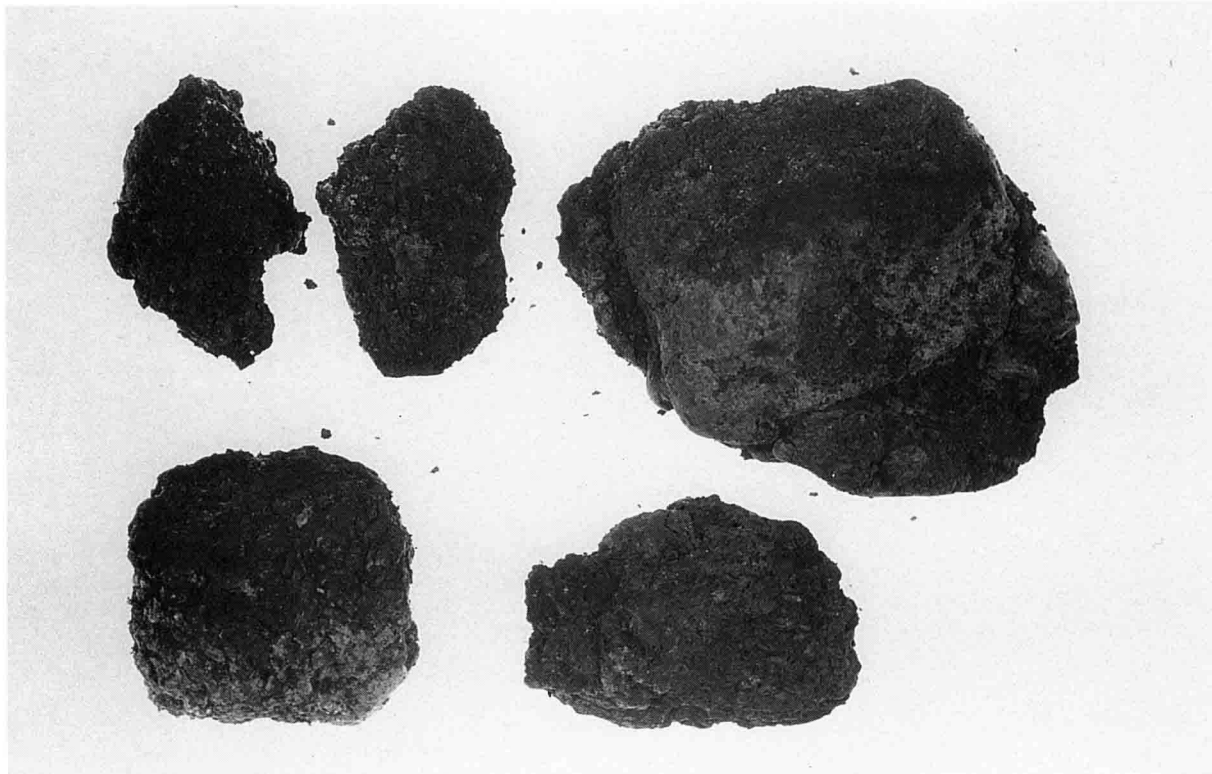
53号土壤



茶臼25-イ号土壤

凹石56号土壤

石鉢28号土壤



炭化米

IV 結 語

長野市において、小柴見城跡空堀の調査を除き中世関係の本格的調査の経験がない。また今回複雑な遺構が検出し、戸惑いを隠せない。ここでは前章で記述してきた点を要約して結語とする。

遺構は調査地南側に展開し、北側には認められなかった。また東側も漸減する傾向にある。土壘と称したうち、竪穴住居形態で居住用として考えられるものは、比較的大型で、床面がしっかりしたものを抽出すると、1・4・27・46・47号土壘を上げる。しかし小屋組用の規格を持った柱穴がない点で一抔の不安を覚える。炊事場としてのカマド（火床）の痕跡もない点も気になるが、別の場所に炊事場が存在した可能性を考える。他の土壘の形態は長方形・楕円形のもの等まちまちであるが、それぞれの掘り込みが直に近くしっかりしたもの多く単なるゴミ穴とは考えにくい。また掘立柱小屋組を想定するピット群と重複しているものが多く、この高床の建物址の附属施設とも考えられ、1号土壘にたいする6号土壘のように地下貯蔵施設の役割を想定することも可能であろう。ただピット群から建物の規模・性格等を読み取るまでに至っていない。土壘もピット群も数次に渡って掘られていることは確かで、25-イ号土壘から39-イ号土壘のように溝状になり、東西や南北間を区画するような状態になる。イ号溝址は直角に折れ曲がっている点から建物の雨落排水用に掘られたものと思える。

遺物の出土量は、中世比定の遺跡としては多い方との教示をいただいた。年代については「遺物群の時間的位置」で原明芳氏に総括していただいた。それによれば、大方の焼物は13～14世紀代に位置付き、15世紀前半までにおさまるとされる。絶体年代の判明している古銭から見ると永楽通宝が中国明代1411年鑄造であり、その伝世を考慮しても年代的に合致する。

さて本調査地は、裾花川の氾濫原のまっただ中に位置するも、同河川のもたらした扇状地先端部で、新旧河川敷が三方を囲む中洲状高地を形成しており、比較的安定した地域と考えられる。また交通の要衝であった。「和名抄」記載の芹田郷の比定地で、後に市村庄・千田郷・千田小中島郷を成立させていくことはⅡ章で記載したとおりである。平安時代及び12世紀にはこの地に居住の痕跡はないが、1180年木曾義仲との「市原の戦」で栗田寺別当範覚の名が登上し、栗田郷に居住するとされ、その仲国が「栗田城ヲ築居住ス」（里栗田）と水戸栗田系図にみえる。即ち仲国の代からの居館と考えれば遺物初源の年代と合ってくる。里栗田氏は1560年前後には甲斐に移ったと考えられている。遺物年代と下限で約数十年の空白ができてしまう。1400年の大塔合戦に名を留めないことから、1397年（応安3）の関東管領上杉朝房の栗田城の攻撃を境に主力は他へ移転し、残りも15世紀前半には廃城（廃館）になった可能性を今回の調査所見からうかがえ、16世紀末廃城との考察を再検討する必要がある。

栗田城跡は栗田氏の居館址であることはほぼ間違いなく、遺物の考察のとおり、中世の遺跡で多く認められる内耳鍋の出土量が少なく、高級品である中国輸入磁器や移入陶器が比較的多く出土したり、火鉢そして宴会用の「カワラケ」等の出土は破片ではあるが、居館の生活をうかがう上で重要な資料であることはいうまでもない。

今後、このような調査事例が増加するのをまって、遺構の性格の解明、遺物の再検討をする必要があり、更に鉄製品、木製品と焼物構成等追求していかねばならない課題を残している。

最後になりましたが、発掘調査参加者をはじめ、作業員募集の労をいただいた森山英男栗田区長、表土除去作業をお願いした(株)北沢組、鬼頭組、委託者の日特不動産(株)、(株)団設計事務所・東邦商事(株)の関係職員の皆様には発掘調査に際してご援助・ご協力をいただいた。記して感謝申し上げます。

下^{しも}宇^う木^き遺跡

—公営住宅宇木団地建設地点—

1991・3

長野市教育委員会

例 言

- 1 本書は、長野市（建設部建築課担当）が施行するうずら幼稚園プール造成、国補公営住宅建設及び関連事業に伴う緊急発掘調査報告書である。
- 2 調査地は、長野市三輪9丁目351-2（字下宇木）番地に所在する。
- 3 発掘調査は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが直営で実施し、その期間はうずら幼稚園地点が平成2年6月16日～6月22日（実質5日）、公営住宅地点は6月25日～7月18日、9月3日～10月17日、12月3日～12月7日（実質43日）である。
- 4 遺跡名を、浅川扇状地遺跡群のうち「下宇木遺跡」と称する。
- 5 調査面積は、うずら幼稚園地点100m²、公営住宅地点1,100m²である。
- 6 発掘調査から報告書刊行までの担当・直接参加者は以下のとおりである。【調査主任】千野 浩（遺物分類）・矢口忠良（土器実測・整図・報告書編集）【調査員】小松安和（発掘調査担当）・中沢克三・大室昂・今井悦子（以上注記・復元）【整理事業員】徳成奈於子・岡沢治子・池田見紀・小泉ひろ美・向山純子・西尾千枝（洗浄・注記・復元）【発掘調査参加者】神田敏子・金井 保・鷲沢 武・滝沢芳春・神頭清明・市川英乃・向山純子・野口洋美・西沢 幸・松本幹雄・西沢 茂・秋本まさい・柳沢真三・高野和子・長田いと・久保節子・青沼光江・戸谷ヒロ子・西尾千枝・堀内克子・丸山増王・原 和之・成田幸子・荒井久子・新津照子・新津三千子・佐藤ひで子・林貞子・吉沢トシ子・吉沢秋子・宮沢芳美・新津美幸・原 汪子・柄沢清志・神頭幸雄・美谷島昇・金子房吉・両角吉之丞・原 光雄・金子麻子・田中重二郎・川島邦子・高野和子・横山ふじ江・佐藤はま・金子ゆき・小林志げる・成田孜子・佐藤君江・佐藤幸子・中山やす子・小林さと・宮沢けさよ・中条くら子・横山百代・長原亀雄・金子とく（順不同・敬称略）
- 7 遺構測量はコーディックシステムにより、基準点測量を（有）写真測図研究所に委託した。

目 次

例言・目次	1
I 調査の経過	1
1 調査の事務経過	1
2 調査日誌	2
II 調査地周辺の環境	6
1 地理的環境	6
2 歴史的環境	8
3 考古学的環境	10
III 調 査	12
1 弥生時代の遺構と遺物	12
2 古墳時代の遺構と遺物	16
IV 結 語	51

挿 図 目 次

1 図	調査地及び地形図	7
2 図	調査地周辺の浅川遺跡群主要遺跡	11
3 図	遺構分布図	24
4 図	1号・2号住居址実測図	25
5 図	3号・5号住居址実測図	26
6 図	4号・7号住居址実測図	27
7 図	6号住居址実測図	28
8 図	8号・10号住居址実測図	29
9 図	9号・11号住居址、1号溝址実測図	30
10 図	12号・17号住居址実測図	31
11 図	14号・15号住居址、2号土壇実測図	32
12 図	13号・(5)号・16号住居址、1号土壇実測図	33
13 図	3号・10号・11号住居址出土土器実測図、拓影図	34
14 図	4号住居址出土土器・土製品実測図、拓影図	35
15 図	15号住居址・遺構外出土土器実測図、拓影図	36
16 図	1号・2号住居址出土土器・石製品実測図	37
17 図	2号・12号住居址出土土器実測図	38
18 図	5号・9号住居址出土土器・石製品実測図	39
19 図	6号住居址出土土器実測図	40
20 図	6号住居址出土土器・石製品実測図	41
21 図	7号・8号住居址出土土器実測図	42
22 図	13号・14号・16号住居址出土土器実測図	43

I 調査の経過

1 調査の事務経過

平成元年7月31日付 「平成2年度に於ける開発行為に伴う埋蔵文化財の保護について（照会）」を関係各機関に送付する。

8月10日受理 長野市建設部建築課長より、「公営住宅建設」計画の回答がある。

11月24日付 「建設地は、浅川扇状地遺跡群内にあり、周辺に下宇木B遺跡・宇木公園遺跡が存在し、埋蔵文化財包蔵地の可能性があるため試掘を伴う分布調査が必要」の旨通知する。

平成2年1月29日付 「平成2年度公営住宅宇木団地13・14号棟建設に伴う埋蔵文化財調査・試掘について（依頼）」がある。

2月2日 試掘を伴う分布調査を実施する。

2月3日 「公営住宅宇木団地13・14号棟建設に伴う埋蔵文化財確認調査結果について（報告）」を提出する。以下「埋蔵文化財確認調査概要書」を掲載する。

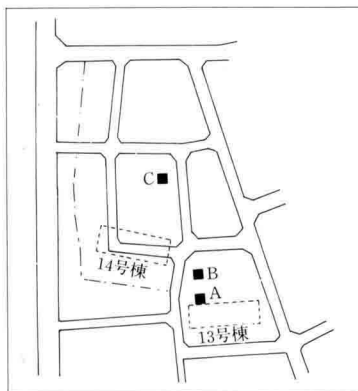
1. 調査地 長野市三輪9丁目

2. 調査の目的 公営住宅宇木団地13・14号棟建設予定地は周知される浅川扇状地遺跡群内に位置する。よって工事により埋蔵文化財等に破壊の及ぶ可能性も考えられるために、施行に先立ち事業用地を試掘し、埋蔵文化財の包蔵状況を調査する。

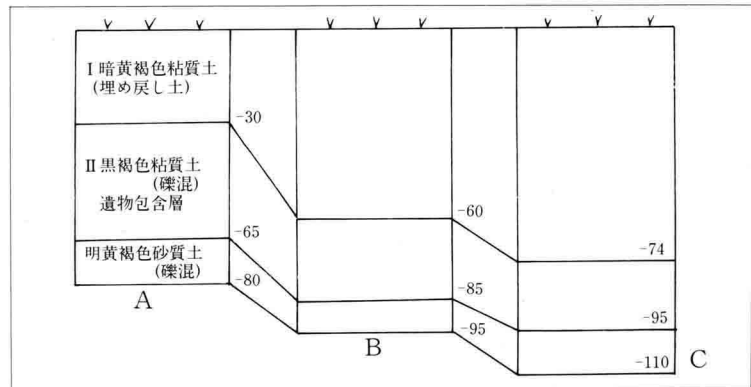
3. 調査年月日 平成2年2月2日

4. 調査方法 事業予定地内の任意の地点に試掘坑を設定し、坑内断面の観察により、遺物包含層の有無及び深さを確認する。

5. 調査結果（別図参照） 試掘坑は事業用地内の任意の地点にA・B・Cの3本を設定し、いずれもバックホーにより現地表下1m程まで掘削した。A～C各地点における基本的な推積土壌は3層に分層される。1層の暗褐色土層は現表土層であるが盛土もしくは構築物の撤去に伴う埋め戻し土と考えられる。2層の黒褐色粘質土層は円礫ならびに砂をかなり含み締りは少ない。若干の土器破片と炭化物を含み明らかに遺物包蔵層ととらえられる。3層は明黄褐色砂質土層で円礫を含む。包含層の2層は各地点にて安定した状態で認め



試掘坑位置図



土層柱状模式図

られ、事業予定地内のかかなりの範囲が遺跡範囲としてとらえられる可能性が高い。

今回の調査にて出土した遺物は土器破片数点であるが、時期的には弥生時代から平安時代にわたり、複合集落遺跡の存在が予想される。

以上の結果よりすれば、事業予定地内には埋蔵文化財等の存在する可能性が高く、事業着手に当たってはそれ以前に発掘調査による記録保存措置が必要である。

6月12日 宇木区長へ「発掘調査参加者の募集について（依頼）」を、区内への回覧をお願いする。

6月15日付 文化財保護法第57条の3第1項、同法98条の2第1項の規定による「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を文化庁長官宛進達・提出する。

6月27日付 長野県教育委員会教育長より「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）長野市長塚田 佐から通知のありました土木工事等については、別紙写のとおり発掘調査を行うこととしたいので、調査に際しては格別の御配慮をお願いします。」がある。

6月11日付 ㈱山岸工務店代表取締役山岸麻男と重機賃貸借契約書を締結する。

6月11日 うずら幼稚園プール造成地表土除去を重機により実施する。

6月18～22日 うずら幼稚園プール造成地点の発掘調査を実施する。

6月25～7月18日 公営住宅宇木団地13号棟建設地の発掘調査を実施する。

9月14日付 高木建設㈱代表取締役高木延雄と重機賃貸借契約書を締結する。

9月3日～10月17日 14号棟建設地及び付属道路拡幅改良事業地の発掘調査を実施する。

12月 日付 日精建設㈱代表取締役藤沢和吉と重機賃貸借契約書を締結する。

12月3日～7日 付属道路改良拡幅改良事業地の発掘調査を実施する。

12月10日付 「発掘調査終了届（通知）」、「埋蔵文化財拾得届」を長野市長・長野県教育委員会教育長・長野中央警察署長宛提出する。

10月14日付 「拾得物預り書」の送付が長野中央警察署長よりある。

平成3年1月4日付 長野県教育委員会教育長より「埋蔵物の文化財の認定について（通知） さきに長野中央警察署長から埋蔵物は、別紙写のとおり文化財に認定しましたので御了知下さい。」の送付がある。

3月25日付 発掘調査報告書『下宇木遺跡－公営住宅宇木団地建設地点－』を刊行する。

2 調査日誌

【うずら幼稚園プール建設地（A地区）の調査】

平成2年6月11日 現地協議を実施し、午後よりバックホーにて表土除去作業を開始する。

6月14日（晴）器機材整備・運搬する。

6月18日（晴・曇）休憩・器機材等収納用天幕設営する。水沢所長の挨拶を受け作業を開始する。



I - 1 6月19日

作業は一昨夜来の雨及び浸水にて調査地が一面水びたし状態で、午前中、排水作業にて本日の調査を終了する。

6月19日(晴) 暑い一日、最高温度32°という。表土除去による残土処理をする。東側に黒色砂質土による遺構がある模様。

6月20日(曇・雨) 前日の調査を進めるも遺物の出土がないので、この土層内に十字の試掘坑を設定するも、自然堆積と判明し、この地点での現地調査を終了する。

6月22日 調査地を埋めもどす。

【13号棟(B地区)の調査】

6月25日(晴) 13号棟建設地を重機により表土除去作業をもって調査を再開する。

7月2日(曇) 残土処理を実施するも礫層にて進展せず。住居址状遺構3軒ある模様であるが、砂利層の乾燥が早く形態がいま一つ明確にならない。

7月3日(雨) 作業中止。昨夜より降雨が激しい。九州地方の豪雨被害をテレビ等で報道される。

7月4日(曇・雨) 昨日の降雨が続き。部分的に浸水、一昨日の作業を進めるも、断続的な小雨にて作業を中止する。

7月5日(晴) SB1・2の調査を開始する。SB3周辺の包含層の土器を採集する。

7月6日(晴) SB1～3の調査を進める。SB3西側にもう一軒の住居址の可能性がある。

7月9日(晴・曇) 暑い一日。SB1～3の調査継続する。SB1の精査。

7月10日(晴) SB1～3の調査を継続し、完掘したSB1の写真撮影をする。

7月11日(晴) SB1の平板測量後、SB4の調査を開始する。SB2・3の調査を進める。

7月12日(晴) SB1は、2基の遺構の可能性が強くなる。SB2の柱穴等の精査をする。

建築課との協議の結果、13号棟建設地の埋蔵文化財発掘調査終了後、安全性確保のため埋め戻すことにする。



I-2 7月5日



I-3 7月17日



I-4 9月12日



I-5 9月19日

7月13日(曇) 今朝、激しい降雨あり。調査を中止するも明日のために、溜水の排水・土砂崩落地の整地を行う。

7月16日(雨・曇) 作業を中止する。

7月17日(晴) 昨夜来の雨にて調査地が水没し、排水作業から調査にかかる。SB2～4の床面遺構の精査・清掃・写真撮影をする。SB3周辺のピット群を検出をする。

器機材を撤収し、13号棟建設地の調査を終了する。

7月18～19日 遺構測量を実施する。

【市道(C地区)の調査】

9月3日(晴) C地区を重機により表土除去作業、発掘調査器機材の搬入、天幕設営をする。残土処理を開始する。

9月4日(雨) 作業を中止する。

9月5日(晴) 遺構検出作業を進めるも、確認できず、下層遺構の存在有無のためトレンチ掘削作業を実施する。下層遺構なし、本日でこの地区の調査を終了する。

【市道(D地区)・14号棟(E地区)の調査】

9月10日(晴) 重機により表土除去作業を行う。

9月11日(晴) 表土除去作業を継続する。残土処理、遺構検出作業をし、住居址4軒を確認する。

9月12日(晴) SB5～8の形態確認調査を進める一方、排水用溝掘削作業をし、SB5から調査を開始する。

9月13日(雨) 作業を中止する。

9月14日(曇・雨) SB5の調査を継続する。

9月17日(曇・雨) SB5・6の調査を進める。E地区を重機による表土除去作業を開始する。雨のため午後の作業を中止する。

9月18日(曇) 昨日の作業を継続する。E地区の表土除去作業が終了する。

9月19日(晴) SB5・6の遺構の掘り下げ作業を続ける。

9月20日(雨) 作業を中止する。

9月21日(晴) SB5・6の調査を進める一方、SB7・8の掘り下げを開始する。



I-6 9月27日



I-7 10月2日



I-8 10月4日



I-9 10月5日

9月24・25日（雨） 作業を中止する。

9月26日（曇・雨） D・E地区の排水作業をした後、土器洗浄作業を行う。

9月27日（晴） SB5の土層実測、SB6の調査を進める。E地区の排水用溝掘削作業を行う。

9月28日（曇） SB5の床面の精査、SB6の土層実測、SB8の調査を実施する。

10月1日（曇） SB6を完掘し、写真撮影する。SB5・8の調査を継続する。

10月2日（晴） SB5・7を完掘し、写真撮影する。SB8の調査を進める。

10月3日（晴） SB8を完掘し、D地区全景を写真撮影する。E地区の遺構検出作業を進め、SB9・10、SD1を確認し、SB9から調査を開始する。

10月4日（曇） SB9～11の調査を進める。D地区の遺構測量をする。

10月5日（曇） SB9～11を完掘し、写真撮影を行う。SD1の調査を開始する。

10月8日（雨） 土器洗浄作業を行う。

10月9日（曇） 降雨の為、現地の状況悪く調査を断念し、土器洗浄作業を行う。

10月10日・11日（雨） 作業を中止する。

10月12日（曇） 土器洗浄作業を行う。

10月16日（晴） うずら幼稚園西側道路拡幅改良地の表土除去作業後、午後より残土処理・遺構検出作業を実施するも、遺構なし。

10月17日（晴） 器機材の整理・撤収をし、発掘調査を終了する。



I-10 10月16日



I-11 12月4日



I-12 12月5日

【市道（F地区）の調査】

12月3日（晴） 残土処理・遺構検出作業後、SB14・15の調査を開始する。

12月4日（晴） SB14・15・5、SK1・2を完掘し、写真撮影をする。SB12・13の掘り下げを開始する。

12月5日（晴） SB12・13の調査を継続する。

12月6日（晴） SB12・13・16・17の調査を終了し、写真撮影をもって発掘調査を終了する。

12月7日（晴） 遺構測量を実施し、現地に於ける調査を完了する。

Ⅱ 調査地周辺の環境

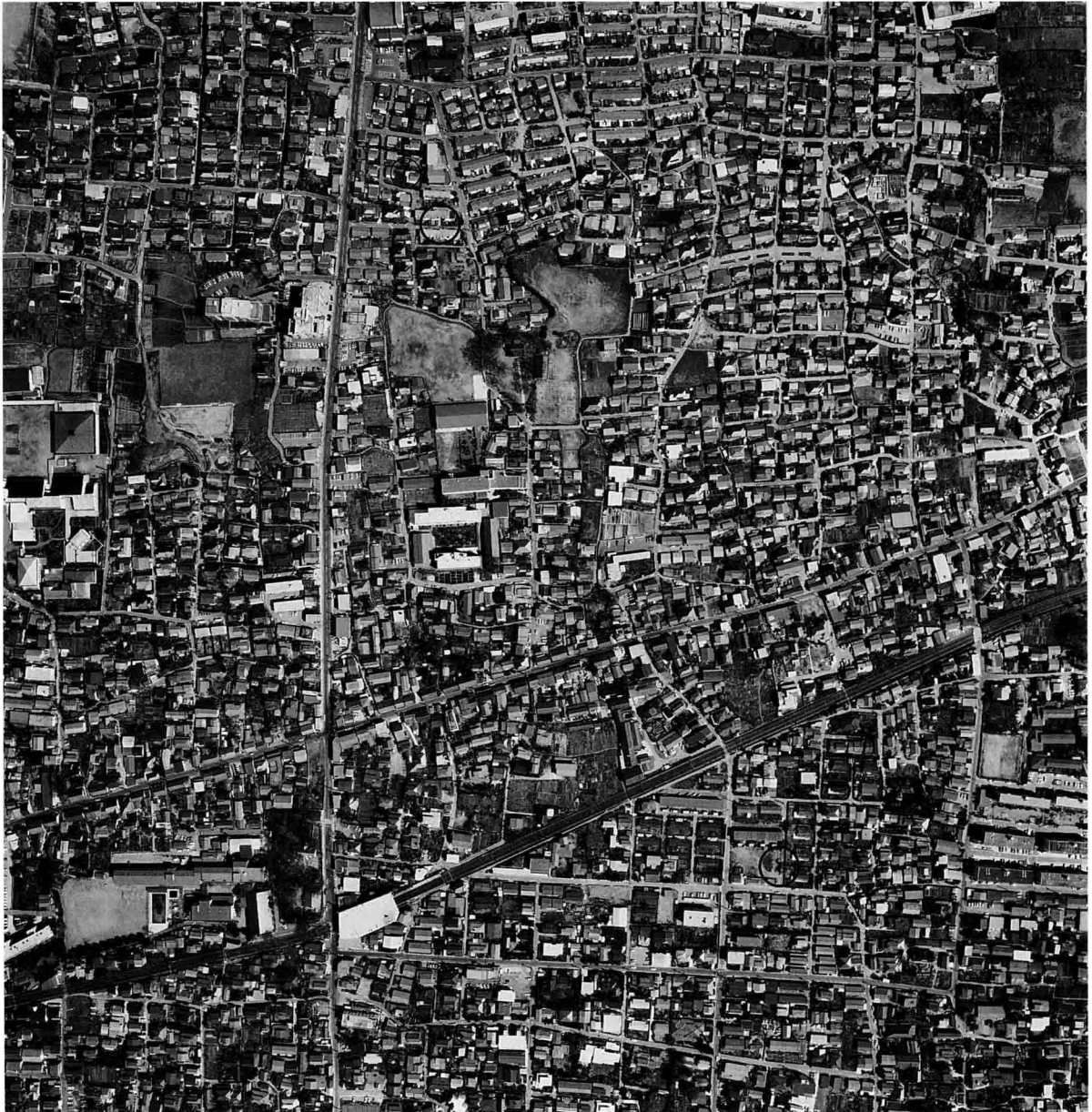
和田 博（長野市立博物館専門員）

1 地理的環境

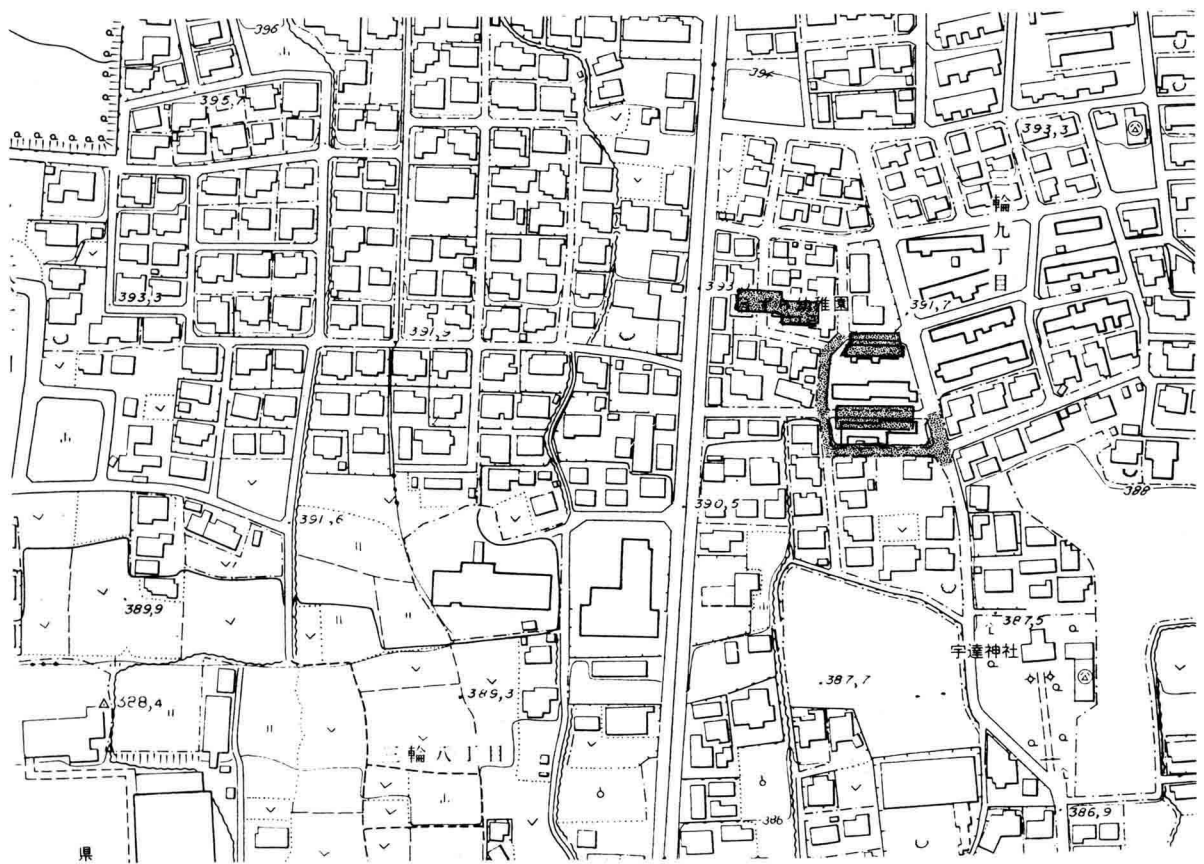
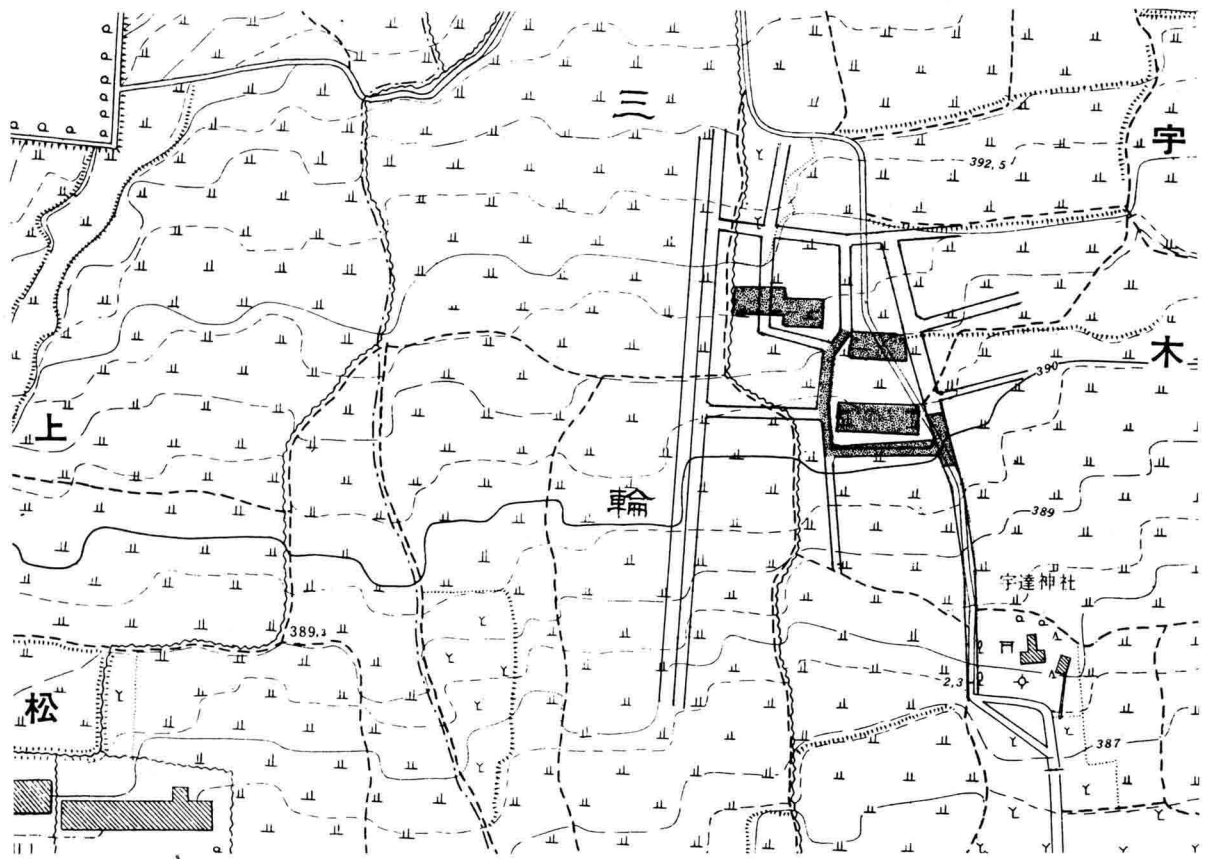
標高300～350 mの低平な長野盆地（善光寺平）は、千曲川を本流として犀川その他の諸河川を合流し、西南から東北に向けて長軸約40km、横幅の最も広い部分で約10kmに及ぶ紡錘状に展開する。

盆地以東は、上信越国立公園を形成する三国山脈で火成岩を主体とした急峻な山容を示し、山脚部はリアス式海岸状の出入に富み、おぼれ谷相当部には扇状地や崖錐が発達している。

これに比して盆地以西は、標高700～800 mの切峯面を形成する中新世以降の若い堆積層を主としており、地層



Ⅱ - 1 調査地周辺の航空写真（○印上 下宇木遺跡、下 三輪遺跡(3)）



1 図 調査地及び地形図 (1 : 3000) (上) 大正14年測量・昭和27年修正図

(下) 昭和49・50年測量・昭和57年修正図

の走向は盆地主軸に並行する。このため、盆地西側の辺縁部は段丘や段層を伴って比較的単調で、一般的に南部で扇状地が優勢に発達し北上するに従って劣勢となり、逆に千曲川以東に発達した扇状地形を見せる。

このような巨視的形成の中であって、飯縄山を水源とする浅川は山間部を浸食流下した後、三登山南麓を限る西条断層とこれに直交する上松断層の接点にあたる浅川東条地籍の通称浅川原口を谷口として盆地に流入し、東南方向を主軸とした平均斜度1/45を計測する典型的な扇状地を形成する。扇頂から約2 km弱東南流下した浅川は以後天井川となり、さらに約1 km程流下した富竹付近で大きく左旋回し、千曲川自然堤防の西側後背湿地帯を東北へ貫流して豊野町に至り、鳥居川と共に千曲川に流入する。

浅川扇状地は、右翼既ち南方部では扇頂から約2 km南下した三輪8丁目で城山丘陵を横断した堀切沢が扇状地と城山丘陵との接合部を一部開析しているが、新町一柳町一荒屋を縫合線として湯福・裾花川扇状地に接し、扇端は標高370 mの等高線沿いに東流する鐘鋳川用水付近で端末状の段を呈しながら平林一東和田一南堀にまで達して沖積地に移行する。

この扇状地の伏流湧水地帯は、古来桐原七景と呼ばれて親しまれていた湧泉にもうかがわれるように、標高390～370 m線の間に帯状に分布し、そこに相ノ木・桐原・返目・吉田さらに稲田・徳間の諸集落が発達し、県道長野豊野線（旧北国街道、通称相ノ木通り）をはさんで一連の街村を形成している。

湧水地帯下縁を裾花川から導水した前述の鐘鋳川用水が東流する。用水は点在する溜池と共に、それより低位の広い範囲にわたって条里制的遺構を呈する水田地域をうるおしていたが、年を追って水田が姿を消し住宅や事業所が立ち並びつゝある。

2 歴史的環境

大正14年（1925）作製の地籍図によると、本遺跡に南隣して東西に長い「三諸前」の地字が西方に広がり、さらにその南方に「神境」もある。「三諸」はサンジョと呼ばれているらしいが、本来は「神のいる所で、多くは三輪山を指す」（古語辞典）とされるミモロと考えられ、出雲の美和族奉斎神とされる祭神・神社名ともに大和の大神神社と同じ美和神社の神域が北側にある。

この神社は延喜式神名帳に記載された水内9社の筆頭に列する式内社で、記録上の初見は貞観8年（866）2月7日の条に、「三和・神部両神に兵疾の災を防ぐため国師・講師に奉幣読経させた。」（『三代実録』 意識）とある。神部（ミワノベ）神はおそらく三和神とならび祀られていた神であろうとされている。また同書の貞観3年（861）に「二月七日辛亥授信濃国正六位上国業比売神従ろうと五位下（上下略）」とある神は、現在美和神社の相殿に祀られており、記録から見ても古くからの美和神社鎮座がうかがわれる。

この神域西に隣接する三輪小学校の校地は昭和50年から3次にわたって発掘調査され、弥生後期～平安時代の遺跡が確認されている。東には昭和61年に調査した平安時代を主とした三輪遺跡(2)がある。

古い一筋の道がこのような古来からの由緒をもつ神社前から本遺跡南を経て東方約800 m地点にある桐原牧神社前にうねうねと通じている。延喜古道もほぼこれにそっていて、桐原牧神社付近さらに旧稲積村地籍から北上して三才の多古駅家跡へ向ったと考えられている。吉田大銀杏のある地籍は、以前は吉田大宮（現在吉田上町鎮座）の故地で皇足穂命を祭神とし式内社にも比定されている。この故地は飯縄山をはるかに望む湧泉地で古代祭祀に好適な所でもある。

桐原牧神社付近は牧野（まきの）地籍で、『北山抄』に「応和元年（961）十一月四日召桐原駒廿疋於南庭覽之云々」とある後院領桐原牧は、この桐原中心の牧場を指し、これが文治2年（1186）の「乃貢未済济々」にみえる吉田牧になったとも言われ、宇木（牛牧の略）・駒弓社・駒沢・三才の地名のほか、桐原牧神社の畜駒神事も旧

牧場の名残とされる。

同神社東側に昭和30年ごろまで「ほり田」と呼ばれる水田に囲まれて一段高い耕地があり、『長野県町村誌』には高野氏古城跡と記されている。こゝは応永11年（1404）の市川氏軍忠状に「大将細川兵庫助殿奥群御免向時桐原若槻下芋河之要害責落云々」とある桐原城で、当時これら諸地域は中野を本拠とする高梨氏の傘下にあった。諏訪御布礼之古書には文明3年（1471）の明年御射山祭頭役に「桐原惟宗忠国御花札五貫六百文」と見えている。また同書の長享元年（1487）の条には「宇木小井桐原小鹿野長嶋五ヶ村而頭本打替々々勤申候（上下略）ともあり、当時宇木は原諷宗、小鹿野（押鐘）は原真高の領有が同条で知られる。宇木城は本遺跡北約1 km余の盛伝寺地籍、小井（越）は約1.5 km東の中越、押鐘は東北約700 m S B C 東南隣にそれぞれあり、押鐘城は現在も遺構を残存している。長嶋は不明であるが退目あたりの古名とする説もある。

これらの居館跡以外に本遺跡西北200 mの長野女子高校建設以前には明瞭な遺構があり、相ノ木氏居館跡と呼ばれるが、一説には浅川の氾濫で宇木城がこゝへ移ったとする人もある。さらに南約1 kmの旧国鉄工場敷地には善光寺奉行も勤めた原有源の平林城があるなど、本遺跡を囲む一帯にはいわゆる小名と呼ばれる中世地方武力の本拠が数多い。

これら弱小武士達は時には高梨氏に併呑され、或いは太田庄を本領とする島津氏の蚕食を受けたり、互に協力合力して所領確保に努めたりもした。このように考えるとき応永7年（1400）の大塔合戦において、北信の大勢が反守護軍にまわる中であって、宇木・中越氏らが小笠原守護軍に投じた悲願がうかがわれる。

中世武士達の争乱は天文22年（1553）に始まる川中島の戦いでその極に達する。12年間に及ぶ甲越対戦の間、謙信は信濃に出撃するたびに横山城を拠点とした。これが本遺跡西約1 kmにある城山丘陵上にあった平山城で、約50 m余の比高差をもって平地部に臨んでいる。横山城の本郭跡は、現在そこに祭祀されている水内大社は近世末まで善光寺本堂に接して社殿のあった年神堂で、延喜式にある水内郡の名神大社健御名方富命神彦別神社はこの神とされている。なお城山は仮寝ヶ丘と呼ばれてもいた。

乱脈だった地域情勢も統一されて近世になると、松平忠輝が松代から越後に移封になった翌年慶長16年（1611）に江戸～福島城（直江津）を結ぶ動脈として、それまでの長沼～松代通りにかわって善光寺経由が北国往還となった。これによって通路が整備され横山・吉田間は在来古道より上部に直線的な最短路が開設され、散在していた周辺の集落は新しい街道沿いに集められ、吉田には口留番所がおかれ、横山には一里塚が設けられた。

以後、近世を通じて加賀藩主をはじめ北陸諸大名の参勤交替や佐渡金山からの金銀運搬の重要路となると共に、庶民の生活物資の輸送や善光寺参りの旅人などで賑わった。

なおこの三輪地域は、近世初頭に一部地域の善光寺領時代があったものの、近世を通じて善光寺領に接する松代領であった。明治以降は数次にわたる合併を経て大正12年に長野市に併合して今日に至っている。

（参考文献）『上水内郡地質誌』『上水内郡誌自然篇・歴史篇』『豊野団研連絡紙No.30』『信濃史料』『長野市史』『長野県町村誌』『長野県の地名』『長野県史』

【付記】 本文は『長野市の埋蔵文化財第20集 三輪遺跡（2）－本郷住宅地地点－』から筆者の承諾のもとに一部改変し、転載したものである。

3 考古学的環境

調査地一帯は、市街化しているため遺跡の範囲を画することは困難に近い、このため過去に於る遺物の確認地及び地形を考慮して広域の浅川扇状地遺跡群として周知されている。この中から本書所収の調査遺跡を除き、発掘調査等実施されたものを主要遺跡とする。これらは遺跡内の部分的な調査であり、遺跡内に於る性格的位置やその広がりには不明である。またこの地域は前節で記述した通り小豪族が割拠した地でもあり、多くの中世遺跡が確認されている点特色がある。

押鐘遺跡 (2図3) 平成2年度に発掘調査を実施した。平安時代住居址1軒・土坑15基を検出した。中世の遺物を抽出・整理することにより盛伝寺居館址の年代が明らかになるものと期待される。

浅川端遺跡 (4) 昭和62年度発掘調査を実施した。縄文時代前期初頭関山式期の住居址・土坑各1基が検出され、今の所扇状地上に於る最古の人類の足跡である。同時代の遺跡に牟礼バイパスE地点遺跡があるが、前期中～後葉の諸磯期を最後にこの地域から縄文時代人の生活跡は認められなくなる。弥生時代中期住居址3軒・溝址1ヶ所・土器集中遺構1ヶ所、同後期住居址1軒、古墳時代後期住居址11軒、奈良時代住居址2軒・建物址3軒、平安時代土坑1基を検出した。長野市教委『浅川端遺跡』昭和63年

壇田遺跡 (5) 平成2年度に発掘調査を実施した。ゴルフ練習場建設用支柱穴地点の調査であったため、奈良・平安時代住居址10軒、溝址2ヶ所を確認したにすぎない。本年度報告書刊行予定である。

神楽橋遺跡 (6) 昭和51年度に日本窯業史研究所が発掘調査を実施した。調査報告書が未刊であるため詳細は不明であるが、弥生時代中期から平安時代にかけて多数の遺構が検出されている模様である。この調査の前年分布調査を実施し、現在公園地の下には弥生中期の密集集落址が予想された。西側の堰側で隅丸長方形の土坑が確認され、中より完形の高坏3個・甕1個・壺1個を検出した。また本調査では木簡の出土を聞く。

吉田高校グランド遺跡 (7) 昭和46・49・60年度発掘調査を実施した。この遺跡の遺物・遺構は単純・同時代のもので「吉田式土器」の標識となっている。弥生時代後期初頭に位置する。住居址総計16軒を検出している。壺への施文が、ヘラ描平行線文・同鋸歯文等に代表される。長野市教委『吉田高校グランド遺跡』昭和61年

美和公園遺跡 (8) 昭和58年度長野市遺跡調査会により発掘調査を実施した。古墳時代中期住居址1軒、直径約25cmの柱根が残存し、大形建物址を予想させるピット2個が検出された。建物址の規模・性格は不明である。

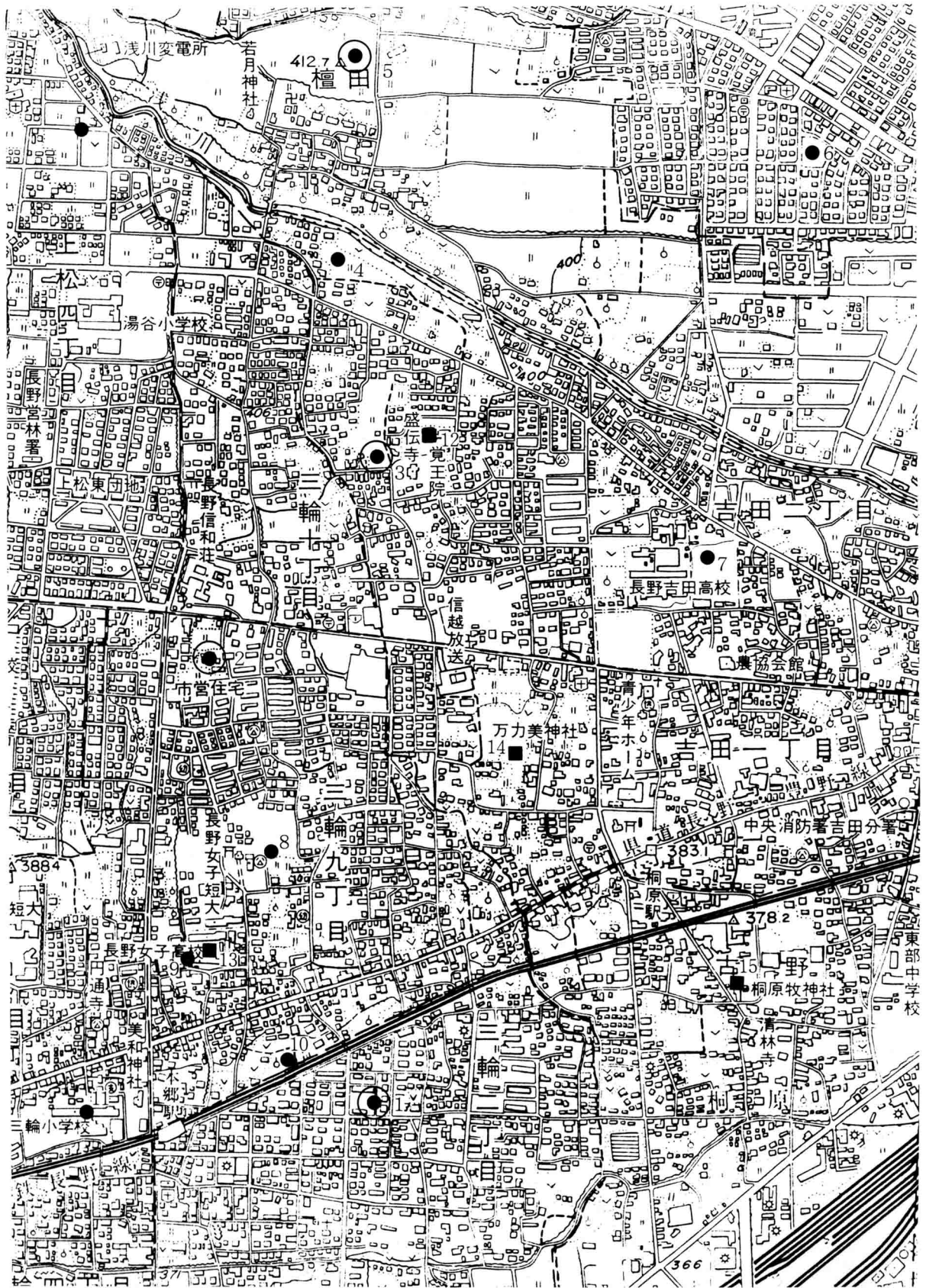
下宇木B遺跡 (9) 昭和43年下水道工事中発見され、長野吉田高校地歴班が調査した。遺構は方形周溝墓との判断が示されているが、不明な点が多い。古墳時代前期の1括土器群が採集されている。器高50cm、底部に小円孔が穿たれる大形壺・埴・小形丸底形土器・兜形坏等の器種がある。笹沢浩「長野市下宇木遺跡B地点出土の土師器」『長野県考古学会誌8号』昭和45年

三輪遺跡 (2)(10) 昭和61年度発掘調査を実施した。古墳時代後期住居址1軒、平安時代住居址4軒、溝址4ヶ所を確認する。平安時代の遺構・遺物は編年研究上好資料である。長野市教委『三輪遺跡(2)』昭和62年

三輪遺跡—三輪小学校地点— (10) 昭和50・51・54年度の3次に亘って長野市遺跡調査会により実施された。弥生時代後期住居址2軒をはじめ古墳時代後期を主体に総住居址数14軒、溝址3ヶ所、土坑2基が検出されている。そのうち2号住居址は火災にあい、上屋構造を知る上での考察資料として重要である。主軸11.8m×東西軸9.7mの大形住居址で、平出遺跡11号住居址に次ぐ県下で2番目の規模である。首長者層の住居か、遺物の中で高坏が多いことから祭祀を伴う公共施設とも考えられている。長野市教委『三輪遺跡』昭和55年

中世遺跡 この小地域に比較的多くの遺跡があることに注目され、その推移はⅡ章に記載した。その補足を記す。

盛伝寺居館址 (12) 108 m×91mの規模の連郭式の多田氏の居館跡という。**押鐘城跡** (13) 140 m×130 mの複郭式の城跡で多田氏・押鐘氏の居城と推定される。**相ノ木城跡** (14) 86m×70mの回字形を呈していた。**桐原要害** (15) 連郭式の城跡と考えられている。長野県教委『長野県の中世城館跡—分布調査報告書』昭和58年



2 図 調査地周辺の 浅川遺跡群主要遺跡 (1 : 10000) ①三輪遺跡(3) ②下字木遺跡 ③押鐘遺跡 ④浅川端遺跡
 ⑤檀田遺跡 ⑥神楽橋遺跡 ⑦吉田高校グランド遺跡 ⑧美和公園遺跡 ⑨下字木B遺跡 ⑩三輪遺跡(2)
 ⑪三輪遺跡-小学校地点- ⑫盛伝寺居館址 ⑬押鐘城跡 ⑭相ノ木城跡 ⑮桐原要害 ●は平成2年度調査